
けいおん！ Fragment

鮮血の刻印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！F r a g m e n t

【Nコード】

N 6 5 0 2 L

【作者名】

鮮血の刻印

【あらすじ】

けいおん！の恋愛のオリジナル小説です。

時期は、1期の梓加入後で、ヒロインも梓です。

―彼の名は灘宮英樹、軽音部に所属する3年生。

そして、彼は中野梓と奇妙な出会い方をする。―

この小説には、以下の注意点があります。

？、オリジナル主人公の物語です。

？、桜ヶ丘高校は共学です。

？、主人公以外に、友人として、他のオリジナルキャラが多数登場します。

？、作者は文才がなく更新が遅いです。
以上の事をあらかじめ御了承ください。

感想を随時募集中です。

短くても結構ですよ。

1月7日、全話改編しました。

第1話 「もう1人の部員」 (前書き)

初めまして、鮮血の刻印です。

注意点は確認していただけたでしょうか？

私は文才がないので、おかしい部分が多々ありますが、
どうか暖かい目で見守ってやってください。

それでは、第1話、どうぞ。

第1話 「もう1人の部員」

けいおん！ F r a g m e n t

第1話 「もう1人の部員」

S i d e : 憂

「お姉ちゃん？

そろそろ起きないと、遅刻しちゃうよ？」

「ふえ〜？」

おはようございます、私は平沢憂です。

私は今、ダレているお姉ちゃんを揺さぶりながら起こしています。

「今日は『お兄ちゃん』が朝から迎えにきてくれるんでしょう？」

遅れたら怒られるよ。」

私のその言葉に、お姉ちゃんが飛び起きる。

「ええっ!？」

憂、今何時？」

「もうすぐ8時だよ。」

私は苦笑いしながら答える。

「お兄ちゃん、もう来てる?。」

お姉ちゃんが恐る恐る聞いてくる。

「まだ大丈夫だけど、そのうち来るから、早く支度した方がいいよ。」

「はい。」

そう言っつて、着替え始める。

「朝食とお弁当、できてるからね。」

Side: 憂了

「よし、準備OK！」

ギー太、今日も頑張ろうね？」

彼女の名前は平沢唯。

桜ヶ丘高校の2年生で、軽音部に所属している。
そして、ギー太というのは唯の大切な楽器だ。

「まったく、唯は相変わらずだな。」

「エヘヘ。」

「つて、お兄ちゃん！？」

「よう、唯。」

「遅いから憂に言っつて、上がらせてもらったよ。」

「おはよう、お兄ちゃん。」

「ああ、おはよう、憂。

ホラ、唯、支度できたのなら行くぞ。」

「ハ―イ♪」

「ああ、そうだ、今日は俺も軽音部に行くから。
新入部員の顔も見ておきたいし。」

「ああ、あずにゃん？」

「まあそうなんだけど。

唯、その子の本名、ちゃんと覚えてるのか？」

「モッチロン！

ええと確か・・・。

・・・。 なんだったかな？」

「オイオイ・・・。」

「エヘヘッ」

「本名は中野梓ちゃんだよ。」

憂が補足してくれる。

「だってさ。」

「ハァー」

俺は溜息をつく。

「そうだ、お兄ちゃん、今日2年生は放課後に全体集会があるから、部室に行くの、遅くなるからね。」

「ああ、わかった。

それじゃあ、そろそろ行くか。これ以上遅れるとマズイからな。」
そうして彼らは席を立った。

――放課後――

Side：梓

「すみませ〜ん、部室の鍵を取りに来ました。アレ？」

軽音部の鍵が普段ある所に行ったが、そこには鍵が無かった。

（部室の鍵が・・・無い？）

「石田先生、音楽室の鍵、知りませんか？」

「ん？ 中野か。

そういえばさっき、ほかの人が取りに来たぞ。」

「えっ？ そうなんですか？」

教員の言葉を耳にし、梓は不思議に思った。

（唯先輩たち、2年生は全体集会で早くはこれないと思ったけど。
さわ子先生かな？）

「わかりました。それじゃあ、失礼しました。」

彼女の名前は中野梓。

軽音部でただ1人の1年生で、ギターを扱う。

（とにかく、行ってみればいいか。）

——軽音部部室——

（アレ？ 中から物音が聞こえるけど、誰がいるのかな？）

そう思って梓は、扉にあるガラス窓から中を覗いて見る、すると・・・

（お、男の人がいる？
しかもなんか物色してるし！ 不審者！？
ど、どうしよう……。先生に知らせる？
ううん、やっぱり自分でなんとかしよう。）

そう考え、梓はギターとカバンを床に置き、中から分厚い辞書を取

り出した。

（よしっ！ これで。

何かあっても、あの人のせいにすればいいし、正当防衛を主張すればいいよね。）

以外と腹黒いようである・・・。

扉を少し開け、こっそりと忍び込み、
息を殺しながら男性の背後に立ち、そして辞書を大きく振りかぶる。

「な、何っ！？」

男性が振り返るが、一足遅かった。

梓の振り下ろした分厚い辞書が、彼の頭に見事に見事に頭にクリーンヒットした。

「ぐはあっ！？」

「や、やった。」

梓は不審者を倒したのだと思い、喜んでいる。
と、そこへ澪がやってきた。

「遅くなってゴメン・・・なっ！？」

「あっ、澪先輩！

不審者がいたので、殴っておきました。」

（梓のやつ、笑顔でスゴイ事を言うな・・・。）

「ええっと、梓、悪いけど氷嚢つひなひをもらってきてくれるか？」

「え？ 何ですか？」

「うん、あとでちゃんと話すよ。」

漣は頭を押さえて言った。

「???」

S i d e : 梓 了

——数十分後——

「ホントにごめんなさい。」

梓が何度目かの謝罪の言葉を口にした。

「いや、もう謝らなくてもいいよ。」

「ホントにすみません。」

それでも梓は謝ってくる。

「もういいって言ってるだろ？」

梓に殴られた被害者が、今度は声のトーンを落とし、威圧してくる。その威圧に、梓がビクツと体を強張らせる。

「まあ、改めて自己紹介しとくか。

俺は、なだみや ひでき灘宮英樹。

軽音部で唯一の3年生だ。よろしく。」

「あ、えっと、1年生の中野梓です。

英樹さんは、楽器は何を？」

「ん？ 基本的にはギターだよ。」

「へえ、腕前は・・・？」

「唯よりは上だよな。」

律が横から言ってくる。

「律ちゃん、ヒドイ。」

その言葉に、唯が頬を膨らませる。

「まあ、一応律の言うとおりだな。」

漣とムギが笑っている。

「さて、皆、今日も練習するぞ。」

「「ええー!？」」

唯と律が口を揃えて不満を言う。

「ええー!?」じゃない。 漑から聞いたぞ。

梓が入ってから少しは練習を頑張ると思いきや、
大して練習していないそうじゃないか。」

英樹がジト目になる。

「そ、それは・・・。」

2人が答えに詰まる。

「やったら、梓に殴られた後に作ったりンゴタルト、食べていいぞ。」

「「やりますっ!」」

目を輝かせて勢いよく答える。

（（簡単に乗せられた・・・。））
漑と梓は呆れた。

くくくくく

「うん、今のいい感じだったな。」

漣が皆を振り返る。

「そうだな。」

「じゃあ、今日はここら辺にしとくか。唯と律も、限界みたいだな。」

英樹の言葉に、ムギと梓が2人を見る。

「「燃え尽きた・・・。」」

「ホラッ、2人ともしつかりしろ。」

漣が律を揺すり、ムギが唯を揺する。

（こんなんで大丈夫なのかな・・・。）

梓は不安と呆れの感情をないまぜに抱いた。

「それじゃあ、私たちはここで。」

梓と唯、そして英樹は、帰路の途中で漣、律、ムギと別れた。

「ねえお兄ちゃん、今日は夕飯はどうするの?」

唯が英樹に聞いてきた。

「ん? 今日は義姉さんの分も作らないといけないからまた今度な。」

」

「そっか。」

唯は少し気を落とした。
と、そこに梓が聞いてきた。

「あの、唯先輩と英樹先輩って、兄妹なんですか？」

「本当の兄妹じゃないけど、小さいころからよく世話したから、
「兄」って呼ばれているだけだよ。」

英樹が答える。

「あずにゃんも「お兄ちゃん」って呼んでもいいよ。」
唯が能天気と言う。

「えっ。」

梓が上目遣いに英樹を見ながら言う。

「お、お兄・・・ちゃん。」

最後の方は消え入りそうな声になっていた。

「好きにしてくれ。」

英樹は興味なさそうに言った。

（ス、スルーされた。）

その事に、梓はちよつと落ち込んでしまった。

「じゃあねえ、あずにゃん、お兄ちゃん。」

「明日はちゃんと起きろよ。」

「わかってるよお。」

「英樹先輩、私と同じ帰路なんですね。」

「みたいだな。」

「・・・。」

「・・・。」

（か、会話が続かない。）

梓は内心で頭を抱えた。

（梓のやつ、急に静かになったけど、やっぱり会話が続かないとマジイよな。）

英樹も同じように頭を抱えていた。

「それじゃあ、私はここで。」

あの後も少ししか会話がなかったが、なんとか平和？に着いた。

「ああ、じゃあ、また明日。」

「ハイツ。」

「。。。お、お兄ちゃん。」

「っ！」

梓の不意の一撃に、英樹は頬を赤らめた。
まんざらでもなさそうだ。

第1話 「もう1人の部員」 了

第1話 「もう1人の部員」 (後書き)

あとがき

皆様、どうも初めまして。 作者の鮮血の刻印です。

こんな駄文を読んでいただいて光荣です。

一応これから『かなり遅い』ですが、ちゃんと書いていきます。

気長に待てる方は是非読み続けていただけると幸いです。

気にいった方も是非読み続けてください。

それでは、また。

第2話 「合宿（前編）」（前書き）

とりあえず、待ってくださった方々、（いるのか？）
遅れてしまって申し訳ございません。

一応、注意点に書いたとは言え、謝ります。

ただ、言い訳させていただくなら、学校が、授業が、課題が、
テストが、レポートが、と様々な事が重なってしまったので・・・。

それでは、第2話、どうぞ。

一応確認してはいますが、誤字脱字があったらご指摘ください。

第2話 「合宿（前編）」

けいおん！ F r a g m e n t

第2話 「合宿（前編）」

S i d e : 憂

こんにちは、平沢憂です。

今日は梓ちゃんとお出かけです。

「おい、お待たせ。」

あ、来たみたいです。

「おはよう、梓ちゃん。
その服、可愛いね。」

「あ、ありがとう。」

S i d e : 憂 了

――ファストフード店内――

「そういえば、今日は唯先輩は？」

「お姉ちゃん？」

今日は1日家にいるよ。

暑いのが苦手だし、冷房もダメなんだ。」

「だれてる姿が目につく。」

梓は呆れた。そんな梓の考えなど露知らず、憂は続けてくる。

「でも、だれてるお姉ちゃん、かわいいんだよ。」

憂が恍惚の表情を浮かべる。

（何だろう・・・。）

憂と私のこの感覚の違いは・・・。）

梓はちよつと怖くなった。

「そうだ、梓ちゃんはお姉ちゃんとかお兄ちゃんだったら誰がいい？」

憂がいきなり聞いてくる。

「え？ うん、お兄ちゃんは英樹先輩しかないよね。
私が知ってる年上の男性ってあの人ぐらいだし。」

「やっぱりお兄ちゃんは頼りになるよね。
ギターだけじゃなくて、ピアノも弾けるし、武道もいろいろ習ってるし、

家事全般もだいたいそつなくこなせるし。」

「でも私、英樹先輩の事、何も知らないんだよね。」

「そうなんだ。」

何か知りたい事があつたら、私に聞いて
答えられる事は教えるよ。」

「憂……。」

梓が少し感動している、と、

「弱点なんかもね。」

憂が笑顔で返してくる。

（じゃ、弱点……。）

そんな梓に、憂が悪魔の囁きの如く、耳元で呟く。

「お兄ちゃんの弱点がわかれば、好きなだけ弄られるよ。」

（英樹先輩を弄る……。） 梓が恍惚の表情を浮かべる。

（よし、梓ちゃん陥落。）

2人は静かに恐ろしく笑っていた。

その頃英樹は……。

（お、悪寒が……。）

「どうした？ 灘宮？」

「ああ、凍夜。 ちょっと悪寒が。」

彼の名前は氷狩 凍夜。

英樹の親友の1人だ。

「今日の『仕事』の勉強は休んだ方がいいんじゃないか？」

「いや、大丈夫。

それを休むなんてできないしな。」

「頼もしいねえ。」　そう言いながら凍夜が笑う。

「そんなんじゃないよ。

兄さんと義姉さんが俺を推薦しなけりゃ、こんな事には……。」「

英樹はうなだれてしまった。

――数日後――

「よしっ！　今日は合宿の買い出しに行くか。」

放課後、軽音部で律が言う。

「合宿？　俺はそんなの聞いてないぞ。」

「え？　澪ちゃん、伝えてないの？」

英樹の言葉に、唯が澪に聞く。

「……。」

漣が目をそらす。

「忘れてたみたいですネ。」

ムギが言う。

「ご、ごめんなさい。」

新しい曲の歌詞を考えていたら・・・。」

「まあ、日程は問題ないから、気にすることはないよ。
次からは気をつけてくれよ。」

――商店街――

「それで、何を買うんですか？」

梓の言葉に、漣が答えるよりも先に、

「新しい水着だよ。」と、唯が答える。

（遊ぶ気マンマンだあっー。）

梓がショックを受け、唯たちに抗議している。

英樹はそれを横目に、溜息をついた。

「呑気だな。」

「まあまあ、たまにはいいじゃないですか。」

ムギがなだめてくる。

「俺はあまり遊ぶ気はないんだが。」

「皆と楽しみましょう。」

「ムギ、さすがに皆と海にいるっていうのは、俺はいたたまれないんだが。」

「でも、皆の水着姿が拝めますよ。」

彼女は笑って言った。

「ムギ、お前の目に俺はどういう風に映っているんだ？」

「え？ 普通の男性と同じですけど？」

「普通の男性がそんなので喜ぶなら、俺は普通じゃあ無いんだな。」

「つまり・・・水着姿程度では満足できないからそれ以上を望むって事ですか？」

「違うっ！」

別にそういうのは求めてないって事。」

「ああ、なるほど。」

まあ、英樹さんはそういうのには全く興味のない人ですからね。」

「いや、わかってて言っただろ？」

「さあ、どうでしょうね。」

英樹の嘆息する姿に、ムギはほほ笑んだ。

—合宿先—

「「おおっ——！」」

唯と律がムギの別荘の壮大さに声をあげる。
が、ムギ当人はというと、

「ごめんなさい、少し狭いけど我慢してね。」
と言った。

（（（まだ上があるんだ！）））
ムギと英樹以外の4人が驚いている。

「大丈夫だよ、ムギ。 これでも十分だよ。」

（なんで英樹先輩は驚かないんですかあ！？）
梓が内心でツツコンでくる。

「やっぱり英樹先輩、驚かないな。」

「近頃驚くつて事がなかったから、驚く行為ができなくなったんじゃないかって。」

「なんか、無茶苦茶な理論だな。」

漣、唯、律はいたって冷静だった。

（なんか、ホントに軽音部ってすごいなあ。）

梓はいつの間にか遠い目をしていた。

「遊ぶぞおっー。」

「コラー、ちょっと待て。」

すぐに水着に着替え、遊びに向かう唯と律を、漣がすんでの所で制する。

「練習が先っ！」

「ええー。遊びたい。」

漣の言葉に、律が反論してくる。

「じゃあ、多数決だ。」

私は練習が先！」

そんな漣に対し2人はもちろん、

「「遊ぶっ！」」

すかさず、梓が「私も練習がいいです。」と言ってくる。

4人は、ムギを振り返る。

「私も遊びたいでえす。」

（まさかの裏切り！？）

ムギにまで裏切られた澪は落胆してしまった。

「よし！ それじゃ、遊ぶで決定な。」

完全勝利といわんばかりに、律が腕を空に突き上げる。

「待ってください。 英樹先輩の意見を・・・」

梓が最後の望みのように、慕っている先輩の名をだすが、

「英樹先輩なら、宿題をするって言って、割り当てた部屋に入っちゃたわ。」

ムギの言葉に、梓も落胆してしまった。

（英樹先輩・・・）

憂が言っていたように、ホントに協調性がないんだ。）

当の本人はというと、

「皆には悪いが、俺は遊びよりも勉強優先だ。」

スマン、梓、澪。」

唯たちに負けて遊びに出ていく2人を案じていた。

――数時間後――

「たっだいま。」

唯たちが戻ってきたようだ。

「ああ、皆おかえり。十分楽しめたか？」

「そりゃあもちろん！」

「いっぱい遊んだよ。」

唯と律が答える。

その言葉を聞いて、英樹は

「そうか、十分遊んだのなら、練習するぞ。」
と言ってきた。

「「ふえ？」」

「まだ夕食まで時間があるし、何より十分遊んだんだろ？
だったら練習するぞ。」

「えっと、休みは・・・。」

「ん？ さっき十分息抜きしたんだろ？
だったら平気だよ。」

（（（（お、鬼だぁっー！！！！））））
ムギを除いた4人は、疲れた体にムチを打ち、練習場し移動した。

――練習場――

なんとか全員が到着した。
各々準備を始めていると、唯が梓に訊ねていた。

「あずにゃん、それなぁ〜に？」

「これですか？ チューナーですけど。」
何故そんなことを聞いてくるのか、梓にはわからなかった。

「へえ〜、チューナーって言うんだ。」

「もしかして唯先輩、チューナーを知らないんですか？」
梓が恐る恐る聞いてみると、

「うん」 見事な回答が返ってきた。

「じゃ、じゃあどうやってチューニングするんですか？」

「えっ？ 適当に・・・。」

ホラ！」と音を鳴らすと、見事にチューニングができていた。

（ぜ、絶対音感！？ スゴイのかスゴくないのかよくわからない人だ。）

「アレ？ でも英樹先輩もギターですよ？

なのにチューナーを知らないなんて・・・。」

「だって、お兄ちゃんも使ってないよ？」

「ええ！？」

唯の言葉に、梓が英樹を振り向く。

「あ？ どうした？」

「お兄ちゃん、チューナーって使った事ある？」

「いや、無いよ。」

どの曲で、どのくらいの音を使うかはわかっているから、それを出せるぐらいにチューニングするだけなら感覚でなんとか。

「

ホラね？」

（ホ、ホントにスゴイ・・・。）

「それじゃあ行くよ？ 1、2、3、4！」

♪♪♪

「今の、なかなかいい感じでしたね。」
梓が皆を振り返る。

「律も、ちゃんとリズムキープできてたな。
特訓でもしたのか？」

漣が律の方を見てみると、

「お腹がすいて、力がでない・・・。」

魂が半抜けの律がいた。

「どうやら、お腹がすいて無駄な力が抜けていたみたいだな。
フム、今度はそれを取り入れてみるか？」

そんな英樹の言葉を、律は全力で拒否した。

「そ、それだけのご勘弁を！」

うあゝ、叫んだら余計に疲れた。 飯食わせろお！」

漣は呆れたが、ムギの「私も。」という言葉に従った。

「戻ったよ。」

買い出しから戻ってきた唯の言葉に、別荘に残った漑と律が出迎える。

「それじゃあ、私たちはおにぎりでも作るか。」

漑が梓と一緒ににおにぎり作りを開始する。

ちなみに、唯と律は隣で玉ねぎによって流した涙を利用して見つめ合っており、

ムギは英樹と一緒に鍋を見ている。

（英樹先輩、料理上手なんだ。）

梓はそんな事を考えながら、漑の作ったおにぎりの隣に、自分の作ったおにぎりを置いていく。

その2人のおにぎりの大きさの差は・・・。

（こ、こんなにも違いがあ・・・。）

漑がショックを受けるには十分なほどだった。

「漑ちゃんの手が大きいのかしら」

そんな漑をみかねて、律が更に追い込む。

その後漑はしばらく自信の手を見ては、涙を流していたという・・・。

「それじゃあ、俺はあとかたづけしとくからな。」

「「ハアーイ。」」 唯と律は声が揃える。

「すみません、何から何までやらせちゃって。」
「漣が申し訳なさそうに言う。」

「構わないよ。 気にするな。」

「英樹先輩は花火はやらないんですか？」

「ん？ ああ、他にやらなきゃいけないことがあるから。
悪いな。あまり付き合ってやれなくて。」

「そう言いながら、英樹は梓の頭を優しく撫でてやる。」

「梓は少し頬を赤らめており、それを見た律は何かを思ったらしく、
ニヤついている。」

「フーン。」

「な、何だ律、その顔は？」

「いゝえ、何でもありませんよ。」

「「???」」

「梓と英樹は、漣の真意がわからず、首を傾げた。」

―浴場―

「まさかさわちゃんが来るとはね。」

律は湯船につかりながら言う。

花火の後、律が肝試しをやらうと言いだし、漑と梓が森の中に入っ
た後、

どこからつけてきたのか、さわちゃんがやってきたのだ。

ただ、あまりに突然だったためか、漑がかなりびっくりして、気絶
してしまったのだ。

「ん？ 梓、熱いの苦手なのか？」

なかなか肩まで浸からない梓をみて、律が言う。

「いえ、そういうわけじゃあ・・・。」

「こついうのはね、一気に入れば平気だよ。」

と、唯が言いながら梓の両肩を持ち、一気に湯船に入れた。

「痛いっ！！」

「あ、日焼けで入り辛かったんだね。」
しばらく梓はうずくまっていた。

皆が寝静まった夜遅く、梓は寝室を出た。

「あれ？ 練習部屋の明りがついてる。」

誰がいるのか気になり中を覗くと、そこには懸命に練習する唯の姿があった。

「ごめんね。」

こんな事に付き合わせちゃって。」

「いえ。私ももっと練習したいですから。」

そうしてしばらく練習していると、いつの間にか唯が寝てしまっていた。

「唯先輩、ここで寝ちゃうと風邪ひきますよ。」

「ん〜。」

梓が揺するものの、唯は起きなかった。

「梓？ 何やってるんだ？」

「えっ！？」

突然声をかけられ、梓は飛び上がりそうになった。

「英樹先輩。」

「ん？ 唯が寝ちまったのか。」

「悪いけど、ギターをケースにしまっけてくれるか？
唯を寝室まで運ぶから。」

「あ、はい。」

梓はギターを唯から離し、ケースにしまう。

「まったく、8年前とあまり変わらないな。」

英樹は唯を軽々と抱き上げ、寝室に運んだ。

「英樹先輩はこんな遅くまで何をやってたんですか？」

「学校の宿題と、勉強と、漣の書いた歌詞の確認と、ギターのおさらい。」

「お疲れ様です。」

「お前もな。 唯たちに引っ張り回されたりして大変だったろ。」

「ええ、まあ。」

あの、少し聞きたい事があるんですけど。」

「それじゃあ、リビングにでも行くか。」

リビングに到着し、英樹たちは向かい合って座った。

「それで？ 聞きたい事ってのは？」

「えっと、唯先輩と兄妹になった経緯とか、どうして軽音部に入っ
たのか、とか。」

「唯と兄妹になった経緯ねえ。」

特別、何かあったわけじゃないんだけど・・・。

あれは、8年前か。俺が10歳で、唯が9歳の時、
元々俺たちは家が近所だったのもあるし、

唯も憂も俺を兄として慕ってたからな。それだったらって事で。

」

「そうだったんですか。」

「でもまあ、困った事も多々あったけどな。」

「聞きたいです。」

梓の興味津々の顔に、英樹は言わなければよかったと思った。

「いつも俺に髪を梳いて欲しいって言ったり、宿題教えてくれって
言ったり、

迷子になったら大声で俺を呼ぶし、一緒に風呂に入ろうとするし
で、大変だったよ。」

「それは・・・、大変ですね。」 梓は本気でそう思った。

「まあ、悪気があったわけじゃあないし、俺も甘いからな。」

「そうですか？ 今は唯先輩に厳しく接してるじゃないですか。
とても甘い風には見えませんけど。」

「そういう風につとめているからな。」

最近じゃあ、一緒に夕飯食べようって、ほぼ毎日誘ってきてるよ。」

「それじゃあ、軽音部に入っただのはどうして？」

「2年生になって唯と高校で再会して、

それであいつが俺がギターを弾けるのを覚えててな、それで半ば無理やり。」

それまで、俺はただ何もせずに過ごしていたからな。

漣たちにも感謝してる。皆のおかげで、俺は……。

ん？ 寝ちまったのか。」

英樹は、向かい側で小さな寝息をたてて寝ている梓を見て笑った。

そして、静かに彼女を抱き上げ、寝室まで運んだ。

そうして、1日目は幕を閉じた。

第2話「合宿（前編）」了

第2話 「合宿（前編）」（後書き）

というわけで、前編が終了しました。

それにしても、書いてて思ったのですが・・・

英樹、全然絡んでなくね？

こんなんで梓フラグ、立つのか？ と。

一応そうはならないようにしようかなあとは思っていますが、はつきり言って無理ですね。

次は後編ですが、かなりの駄文です。

読まなくてもいいかもしれません。

それではまた。 ごきげんよう。

第3話 「合宿（後編）」（前書き）

今回は何とか早く書けましたが、次の話の投稿は再び遅くなるかと。

それと、けいおん！がリズムゲームで発売だそうですね。

リズムゲーム、それは、私には縁もゆかりも無いものです。
なので買わないかも・・・。

けいおん！のファンとしては如何なものかと思いますが。
アルター様から発売されるあずにゃんので、お金が・・・。

第3話 「合宿（後編）」

けいおん！ F r a g m e n t

第3話 「合宿（後編）」

―合宿 2日目―

「ん、ううん。

あ、もう朝か。」

梓は寝ぼけ眼をこすりながら体を起こす。

「あれ？ 昨日は遅くまで英樹先輩と話してたのに・・・。
なんで寝室にいるんだろっ？」

梓は周囲を見回すが、自分以外には唯と律だけだった。

（英樹先輩に運ばれたのか。）

梓は情けなく思った。

―リビング―

「おはようございます。」

梓がムギに挨拶をする。

「おはよう、梓ちゃん。昨日はよく眠れた？」

「はい。」

「よかった。」

英樹さんが朝食を作ってくれたから、いただきましょう。」
ムギは梓の分を用意しながら言った。

「零先輩は・・・どちらに？」

「テラスで英樹さんと話してたわ。」

「零ちゃん、髪がかなり乱れてたから、英樹君に頼んでるんじゃない？」

さわちゃんが朝食を終え、片付けている。

「後で見えます。」

梓はそう言って、朝食を取った。

数十分後、朝食を終えた梓は、ムギの言っていたテラスに出た。

「零、昨日渡してくれた歌詞だけど・・・。」

「それじゃあ、ここは……。」

英樹は澪の髪を梳きながら、歌詞について、というよりも歌詞の言葉について話していた。

「だいたい、こんなところかな？」

「すごい。ありがとうございます。」

英樹が整えた澪の髪は綺麗になっていた。

「澪先輩、英樹先輩、おはようございます。」

「ああ、梓。おはよう。」

「梓は綺麗に整ってるな。」

英樹は櫛をしまいながら、言った。

「一応、ムギ先輩に整えてもらいました。」

「ムギは上手だよな。」

「英樹先輩も十分だと思いますけど。」

「まだまだだよ。」

「お兄ちゃん、私の髪も。」

いつ起きたのか、唯がぼさついた髪と共に出てきた。

「ウワッ！？　すごいな唯。」

「いやゝ、照れるなゝ。」

「褒めてないですよ。」

漣の驚きように、唯は照れたが、梓がそれを撃沈させる。

「あずにゃんがいじめるゝ。」

唯は泣きながら英樹に抱きついた。

「よしよし。　でもまあ、褒めてないのは事実だから。」

「漣ちゃん。」

「褒めてないよ。」

皆に気を落とされ、唯はがつくりと肩を落とした。

「ほら、髪を揃えてやるから、こっちにこい。」

「ふあゝい。」

唯はのそのそと英樹の前にある椅子に座った。

「ああいうのを見ると英樹先輩と唯先輩、本当に兄妹みたいですな。」

梓の言葉に、漣が頷く。

「そうだな。」

でも、私も英樹先輩がお兄ちゃんみたいだな、って思う事あるな。

「私は、あんまりないですね。

お兄ちゃんって感じじゃなくて・・・。

何だろう?」

梓はしばらく考えたが、その答えは出なかった。

お昼過ぎ、昼食を終えた唯たちは、再び海へと駆けだした。

「遊ぶぞおっー!」

「オー、イエス!」

「練習は・・・。」

「後で、後で。」

「でも・・・。」

「梓だって、もう水着に着替えちゃってんじゃん。」

梓は、自分の言葉と行動が矛盾しているのに、全く気が付いていなかった。

「ちゃんと、やるって。」

そう言って、律は漕を引っ張って、外に出た。

「はあ・・・。」

「そういえば、唯先輩。」

「なあに？」

「英樹先輩は一緒じゃないんですか？」

唯の傍らにあるボールを転がしながら、梓は聞いた。

「お兄ちゃん？」

ああ、お兄ちゃんは肌が人より弱いから、あまりこつこつ日は外に出ないんだ。

「焼けるのがあまり好きじゃないみたい。」

唯は奥でムギと話している英樹を見た。

「それじゃあ、夕食の買い出しは2時間後に行ってくる。」

「今日は大雨が降るかもしれないので、気を付けてください。」

「私も一緒に行った方がいい？」

「先生は体を休めた方がいいと思いますよ。」

「唯、梓、早く来いよ。」

律の呼びかけに、唯と梓が外に出た。

2時間後

「遊んだね。」

「そうですね。」

浜辺に大の字になる唯を見ながら、梓が答える。

「零、今何時？」

「えっと、15時26分だな。」

「今日は夕立があるかもしれないから、戻った方がいいかもしれないわね。」

さわちゃんの言葉に、全員が曇がかった空を見上げる。

「雨に降られて、それにあたって風邪でもひいたらマズイし、戻って練習するか。」

「律ちゃんとは思えないお言葉がつ！？」

「じゃあ唯はそこで大の字になったまま雨にあたってる。」

「あつ、律ちゃんゴメン。」

「わかればよろしい！」

「それじゃあ、そろそろ戻りましょう。」

ムギに従い、皆が別荘に戻っていく。

それとはすれ違いに、英樹が店に買い出しに出かけるところだった。

「今から、どこに行くんすか？」

「買い出し。」

律の問いかけに、英樹は雨具を持ちながら答えた。

「1人で平気ですか？」

「大丈夫だと思うよ。そんなに量は買わないし。」

「私たちは少し休息したら、練習します。」

「そっか。頑張れよ。」

英樹は手を振りながら歩き出した。

「……」

練習してるんじゃないかったのか？」

買い出しから帰ってきた英樹の目の前には、
ぐうつたらに寝ている部員＋教員の姿があった。

「まったく、しょうがないやつらだな。」

英樹は材料をそれぞれ適切な個所に入れ、1人で練習室に入った。

「ピアノの練習はできないが、まあいいか。」

それから英樹はギターの練習を開始し、梓にだされた課題曲を淡々とこなし、

自分の好きな曲を弾き、果ては他の人が行うパートまで練習した。しかし、一向に誰も練習室にこなかった。

「あいつらは何やってんだか。」

ギターの手入れでもして、その間にこなかったら勉強するか。」

英樹が丁寧にギターを手入れしていると、ドアが開いた。

「英樹先輩！？ いつ戻ってきたんですか？」

梓だった。

「いつって、43分前かな。」

「言ってくればよかったじゃないですか。」

梓は憤慨するが、英樹はそれを意に介する様子もなく、淡々としていた。

「お腹を出して、ネコミミを付けたまま気持ちよさそうに寝てたから、つい。」

「っ！？」

英樹の言葉に、梓は自分の頭にネコミミがある事に今気がついた。

「それにしても、起こしてくれればよかったのについて言っている割

には、

他の皆を寝かしたままにするんだな。」

「そ、それは・・・。」

気持ちよさそうだったから・・・。」

梓は自分の回答に口ごもる。

「それに、お前は偶然ここを通りかかったただけだろ？」

「どうしてそう言えるんですか？」

梓は英樹に見破られるのが気にいらず、挑発的な態度をとってしま
う。

「1度この部屋の前を通った後、戻ってきてこっちを覗いていたし、
お前がわざわざ乱れた髪を直さずにそのまま俺の所にくるのはな
いと思ってな。」

おおかた、目を覚ましたものの、他の皆は寝ているから、
唯に抱きつかれない今のうちに髪を直しに行こうと思っ
てここを
通ったら、

俺が1人で練習しているのに気付いて、申し訳なく思っ
たんじや
ないの？」

「っ！ ま、まあまあ合ってます。」

英樹の分析に、梓はそっぽを向く。

「まあ、別に合つてようが、間違つていようが、俺にはどうでもい
い事なんだけどな。」

ああ、そうだ。一応、課題曲はだいたいできるようになったぞ。

「

「そ、それじゃあ、弾いてみてください。」

「ああ。」

「どうだ？」

弾き終わって、英樹は梓に聞いた。

「早いですね、修得するの。」

「そりゃあ、梓が早くつてせがむから。」

「英樹先輩、才能があるんですね。」

「そんなわけないだろ。」

梓の言葉を、英樹は即座に否定した。

「俺のこれは才能じゃなくて、お前の指導のお陰だよ。本当に、いつもありがとうな、梓。」

「そう言ってもらえると、うれしいです。」
梓は、英樹のお礼に少し照れた。

「あ、よかったら、私の髪、梳いてもらっていいですか？」
唐突に梓が言った。

「別に構わないけど、大して綺麗にできないぞ。」

英樹は忠告してから、梓の髪を梳いた。

「こんな感じでいいか？」

「はい、ありがとうございます。」

数十分後、梓の髪は綺麗に整っていた。

「それにしても、梓の髪は綺麗だよな。」

英樹はうらやましそうだった。

「英樹先輩も、綺麗だと思いますけど。
何で伸ばしてるんですか？」

「ん？　なんでだろうな？」

「わからないんですか！？」

梓のツツコミに英樹は至って冷静だった。

「多分だけど・・・。」

ただ単に長い方が好きだからかな。」

「なんなんですか、その理由は・・・。」

「言っなよ。」

理由なんて立派なものもあれば、くだらないものだってあるぞ。」

「そりゃあ、そうでしょうけど・・・。」

「それより、唯たちを起こして夕食を作るぞ。」
英樹は立ち上がり、梓もそれに倣う。

「それで？ 何で練習してなかったんだ？」
英樹の前には、正座をした唯、律、漑、ムギ、梓、さわちゃんの6人がいた。

正座は別に強制したわけではない。
ただ、英樹の威圧に自然とこうなったただけだ。

「実は、着替え終えて、練習室に行く前に休息がてら、飲み物を飲んでいたら……。」

「ちょっと会話を始めてしまつて……。」

「トランプで遊び始めて……。」

「その後、いつもの放課後のようになつてしまつて……。」

「終いには、寝てしまつて。」

「私も皆を起こそうと思う前に、気持ちよさそうだったから、それにつられて……。」

全員がそれだけ言つて、冷や汗をかいていた。

「昨日十分に寝たんじゃないのかよ・・・。」

英樹は頭を押さえた。

「しょうがない。」

罰として、明日は宿題をやれ。」

「「「「ええ〜!?!?!」」」」

「一応、雨が降ってきた時のために、持ってくるように伝達しただろうが。」

まさか、宿題するのが嫌で、持ってきてないってやつはいるのか？
「？」

「一応、持ってきました。」

「あたしも。」

「私もです。」

「私も。」

「私もです。」

「なら、別に問題はないだろう？」

どうしても嫌なら、練習に切り替えてもいいぞ。

だが、夏休みの終わり頃に泣きついて知らないぞ。」

「やりますっ!」

英樹の言葉に、唯は即座に挙手する。

「別に英樹先輩じゃなくて、零たちに教えてもらえばいいじゃんか。」

「
律は零とムギを見る。

「律ちゃん、その考えは甘いよ！」

しかし、唯はそんな律を叱咤する。

「お兄ちゃんなら、それくらい簡単に見越して2人に根回しするに決まってるよ!」

「よくわかっているな、唯。」

唯の大きな考えを律は冗談かと思つたが、あながち嘘ではないよ
うだ。

「でもまあ、さすがにそんな事してもな。」

それに、明日はそんなに何時間やるわけじゃないから、気にするな。」

と、その時、「グウ」と誰かのお腹がなった。

「！！！！！！」

皆が恥ずかしそうに顔を伏せる。

「すまん、話者自身が話をくぎってしまっただけで元も子もないな。もう夕食の準備を開始するか。」

英樹が顔を反らし、夕食のための支度を始める。

（英樹先輩、ごめんなさい。）
6人はお腹のなった事が自分のせいだと言った英樹に、内心、感謝した。

その後、夕食を終えた後、練習を行い、2日目は過ぎ去った。

―合宿 3日目―

「朝から雨か。」

英樹は独りごちる。

何気なく窓をしばらく見ていると、誰かが扉をノックした。

「英樹先輩、梓ですけど。」

「ああ、どうした？」

「朝食の準備ができたので呼びにきました。」

「そうか。」

英樹は立ち上がり、部屋を出た。

「わざわざ呼びに来てくれてありがとうな。」
そう言って、英樹は梓の頭を優しく撫でた。

「……。」

「あ、悪い。嫌だったか？」

梓がただ黙しているだけだったので、英樹は手を引っ込めた。

「あ、いえ、そういうわけじゃなくて。」

憂の言っていた通りで、英樹先輩に頭を撫でられると気持ちいいなっている。

「そういう事か。」

英樹は安心した。

「でも、憂と違って「お兄ちゃん」って感じじゃあなくて……。
何だろう……？」

「別に何でもいいんじゃないか。」

そして、2人が移動した後、漣とムギがこっそりと出てきた。

「やっぱり梓は英樹先輩の事が好きみたいだな。」

漣の言葉に、ムギが頷く。

「そうみたいね。」

漣ちゃん、ここは私たちが。」

「うん。」

可愛い後輩のために頑張ろう！」

「ええ！」

「それじゃあ、とつとと始めるぞ。」

朝食を終え、英樹たちは1室に集まり、勉強を開始する。

「うへへ。 澪ちゃん、数学教えて。」

唯がいきなり澪にすがりつく。

「あたしも頼んます。」

更には律までも。

「わかったから、そんなにひつつくな！」

澪は2人を引き剥がした。

「英樹先輩、ここはどうすれば・・・。」

「えっと、ノートはあるか？」

「数学、飽きた。 ムギちゃん、古典教えて。」

「はい。」

「飽きるのはやっ！」

「唯、少しは持続させろよ。」

律は呆れながらも、宿題を解く手をゆるめない。

「それと、ここもなんですけど……。」

「ん。これは……。」

（もう少しで2人がくつつく！ 澪ちゃん。）

（ああ、やるぞ。 ムギ。）

梓と英樹が勉強を教授しているのを見たムギと澪は、素早くアイコンタクトをかわし、行動を開始する。

とは言っても、ただ単に、梓と英樹を近づけるために、幅を詰めるだけなのだ。

（あれ？ なんだかさっきより英樹先輩が近いような……。）

（何だ？ 先程より梓が近いような……。）

梓と英樹は、澪とムギの策略に気付かず、少しずつ近づいていった。

「お兄ちゃん、古典教えて。」

その時、唯が梓に抱きつきながら、英樹にプリントを見せた。

「にやつ!？」

「えっ!？ あ、ああ。」

2人は突然の事に、驚くがあくまで冷静を装う。

「えっと、どこがわからないんだ？」

「……。」

「唯先輩、離れてください。」

英樹が唯に教えている間も、唯は梓に抱きついたままだった。

「さて、勉強はここら辺でいいか。」

あれから数時間、ちよこちよこ休息をはさみながら勉強を行った。

「オオッー！ 外が晴れてきたよ。」

唯の言葉に、皆が外を見る。

「よおし！ 遊ぶぞおー！」

「あ、おい。」

英樹の制止を聞かず、唯と律は駆けだした。

「まったく。まあ、勉強は終了したから、いいか。」

「それじゃあ、私たちも失礼します。」

そう言つて梓たちも部屋を出た。

――合宿 最終日――

昨日は遊んだ後は、あまり練習をしなかった。
英樹の罰（宿題）と、遊んだのとで、かなり疲弊してしまったよう
だ。

「今日も朝から遊ぶのか・・・。」

英樹は呆れながら、自分を外へ連れ出す唯を見た。

「今日は最終日なんだから、精一杯遊ばないとね!」

「だからって、何で俺まで・・・。」

英樹は嘆息した。

「それも、最終日だから。」

「全部それで済ます気か!」

「うん、最終日だから。」

「マジか・・・。」

「暑い・・・。」

結局、唯の無理やりに英樹は根負けしてしまった。

「まあまあ、これでもいい出の1つになりますよ。」
隣でムギがなだめる。

「ムギ、英樹先輩、スイカ割りしますよ。」

「行きましょう。」

律の言葉に従い、ムギが歩き、英樹もそれに倣う。

「私が割るんですか？」

「ファイトだよ、あずにゃん。」

「ちゃんとサポートするさ。」

「零の言うとおりだぜ。」

「それじゃあ、頑張ります。」

そう言っ、梓は目隠しをした。

「ちゃんとサポートしてくださいね。」

梓は既に多少ふらつきながら言う。

「それじゃあ、行くよ。」

まずはそのまま、まっすぐ、まっすぐ。」

唯が梓に早速指示を出す。

「あ、梓、行き過ぎ。もう少し後ろに下がって。」

「もうちょい、左だな。」

漣と律もしっかりと梓をサポートする。

「梓ちゃん、そこからゆっくり前に行つて。」

ムギが指示し、次の指示まで皆が英樹に指示させるために、少し間を空けた。

（英樹先輩ならまともに指示するだろう。）

誰もがそう思ったが、何を思ったのか英樹は、「上。」と言った。

それを聞いた梓は、その場でジャンプした。

「え？ あれ？ 上って？」

突然の事に、梓が戸惑う。

（跳んだ・・・。）

英樹はお腹を押さえて、笑いをこらえる。

（梓が、跳んだ。）

他の皆も笑いをこらえるのに必死だ。

（「下」って言ったらどうするのかしら。）

さわちゃんも笑いをこらえながら思った。

「英樹先輩！ 何が「上」ですか！」

無事にスイカを割った後、梓が噛みついてきた。

「いや、なんとなくどうするのか気になったから、つい。」

「つい、じゃないですよ。もう、恥ずかしいです。」

「別に、俺が言わなくても誰かが言っていたさ。」

「そんなわけ……。」

「ないとは言えないですね。」

確かに、唯や律が言ったかもしれないと思った。

「ほら、お前も少しは食べる。」

「そんなんでつられるわけ……。」

梓はがなるが、英樹にスイカを目の前で見せられ、梓は隣にちょこんと坐した。

「よし、そろそろ時間だし、帰るか。」

律が皆を振り返りながら言う。

「そうだな。」

「それじゃあ、片付けるぞ。」

「はい。」

「到着」

唯が駅に降り、全員がそれに続く。

「律、梓の荷物はそれで全部か？」

「はい。」

「まさか、疲れて寝ちゃうとはな。」

「可愛い寝顔ね。」

梓は今、英樹におぶられて小さな寝息をたてながら寝ている。

「ご両親がいてくれば、そのまま渡せるんだが、できれば到着する前に起きてほしいな。」

「それじゃあ、梓の事、お願いします。」

漣の言葉に、英樹は頷く。

「わかってるよ。唯、荷物は途中まで頼む。」

「はい。」

英樹は自身の背で安心したようにぐっすりと寝ている梓を起こさないように、

静かに彼女の自宅に向かった。

第3話 「合宿（後編）」 了

第3話 「合宿（後編）」（後書き）

さて、如何だったでしょうか？ けいおん！の後編。

うん、見事に話の流れはおかしい、無理矢理感がある、と駄文ですね。

こんなんで本当に大丈夫なのか・・・？

今回は梓が英樹に運ばれるという事が続げざまにありましたが、

これはただ単に、他にどんな事ができるか、

作者が考え付かなかっただけです。

それでは。

第4話 「ある夏休みのとある1日」 (前書き)

今回は出だしがスパイラルです。

元々、スパイラルも書こうかなあと思っていたのですが、
けいおん！と分けて独立して書こうとすると、

見事にまったく書けなかったので、英樹を特殊キャラにしました。

こんなのが主人公でごめんなさいm(_ _)m

それではどうぞ。

第4話 「ある夏休みのとある1日」

けいおん！ F r a g m e n t

第4話 「ある夏休みのとある1日」

突然だが、『ブレード・チルドレン』とは何か知っているだろうか？
かなり突拍子もない話だが、『造物主』が人間を滅ぼし尽くすために、

世界に1人の『悪魔』を降ろした。

その『悪魔』は、何故か、生まれつき肋骨が一本だけ欠けた男だった。

その男の名は、『ミズシロ・ヤイバ』。

彼は物心つく前から天才児と呼ばれ、成長するに伴いその傾向はより強くなり、

あらゆる事物に才能を発揮し、絶大なカリスマ性を持っていた。

そして、ヤイバは23歳の時、

自らをリーダーとする『騎士団^{ナイツ}』と呼ばれる組織を結成。

その組織は、ヤイバのカリスマ性で財政界まで取り込み、大きくなっていた。

当時彼は『神』と呼ばれ、財政界のお偉方からは崇拜されていた。
それもそのはずで、何しろ彼に従っていれば何一つ間違え事などなく、

逆に、彼には向かえば確実に破滅したのだ。

その後、彼は人間を滅ぼし尽くすため、組織の中で1つのプロジェ

クトを立ち上げた。

それは、ヤイバの子供を量産する計画、『ブレード・チルドレン計画』。

『人工授精』などの生殖手術により、ヤイバの子供を『製造』するのだ。

倫理的には言語道断なのだが、この計画に携わった遺伝子学者などからは、

ほとんど反対の意見が出されなかった。

その上、多くの人間がヤイバの血統を欲しがったのだ。

そして、その計画で生まれた子供たちは、偉大なヤイバの血統の証として、

生まれてすぐに肋骨を一本取り除かれた。

その後、ヤイバは唐突に組織の者にこんな事を言った。

「我が意志は人間の駆逐。我が血はこの意志を伝える。

成人したブレード・チルドレンは人間を滅ぼすように行動する。

逃れようなく。」

それは、ヤイバ自身も同じだった。

20歳以降のヤイバは、影で相当数の人間を死に追いやっていたのだ。

そして、それを知った連中は、ヤイバを『悪魔』とし、彼とその子供に殺される前に、

逆にこちらから彼らを殺し尽くすための抵抗勢力を作った。

後に『ハンター』と呼ばれる勢力を・・・。

それ以外にも、計画の異常さに組織はハンターを含め、3つに分裂した。

計画およびヤイバの存在に、危機感を抱き、迅速な掃討を主張する『ハンター』。

すべては実験の途中として、ヤイバも子供も子供たちも見守り、観察する『ウォッチャー』。

あくまでヤイバを支持し、以降の計画推進を主張する『セイバー』。

そして、『ハンター』は最初から問題の根源であるヤイバを、全力で狙った。

しかし、どうやってもヤイバを殺せなかった。

信じられないような強運、偶然が連なりヤイバを守った。人には殺せない、誰もがそれを思い知った。

だが、その破局は突如訪れた。

不意に1人の男性が現れ、あっさりとヤイバを殺した。

その男こそ、まるで神様に愛されたかのような強運と、知力、カリスマ性を持ち合わせ、

警察庁では名刑事として名を残し、世界の要人たちすら崇拜する『

神』—— 鳴海清隆。

『悪魔』は『神』により殺されたが、『悪魔』には『弟』が存在し、その存在を『神』は殺すことができなかった。

そして『神』にも『弟』があり、両者は殺しあう運命にあると言われている。

『悪魔の弟』、『ミズシロ火澄』。『神の弟』、『鳴海歩』。

だが、歩は火澄を自身の論理で説得し、一時の平穏が訪れていた。

しかし、両者は互いの『兄』のクローンであったため、寿命は20

歳前後と言われていた。

火澄は既に逝ったが、自身の身体をクローン体治療の被験者として志願し、

歩の症状の進行を抑え、生きる時間を少しでも延ばすことができた。

ブレード・チルドレンの面々も、今は未来に進んでいる。

しかし、もちろんそれに対する反対勢力、『ハンター』が未だに活動している。

ブレード・チルドレンは今、彼らを殺さずに退けている。

そのブレード・チルドレンの行動に、軽音部、唯一の3年生、灘宮英樹も参加していた。

― 廃校 E棟 3階 ―

深夜2時。

英樹はE棟の屋上に向かって走っていた。

そして、目的地に繋がる扉の鍵を素早くピッキングで開けた。

「おっ、開いた。」

屋上には誰もいないのを確認し、英樹は屋上の指定された箇所に爆薬を仕掛ける。

「英樹、今からF棟に移動してくれ。」

イヤホンから歩の指示が出される。

「さつき、E棟の屋上に、設置してくれって言ったばかりじゃなかったか？」

「ハンターが動き出したんだよ。」

「ハンターが？」

今回は廃校舎の破壊作業を手伝っただけって言われたから引き受けたのに……。」

「すまないな。取りあえず全部片付けろ。」

「はいよ。」

それでも、英樹は歩の指示に従い、階段を駆け下り、連絡通路を走った。

「うお!?!」

「うわっ。」

英樹が1人の少女とぶつかりそうになる。

「っ!」

「なんだ、亮子か。」

英樹はハンターかと思っただが、仲間である事に安堵した。

「なんだ、とはごあいさつだねえ。」

亮子は嘆息しながら睨む。

彼女の名前は『高町亮子』。

ブレード・チルドレンの1人だ。

「ハンターかと思っただよ。」

「あつそ。それより、早く移動するよ。」

亮子は踵を返し、走り出す。

彼女は足が速いので、英樹も遅れないように走る。

「理緒のやつが爆発させる前にね。」

「あの『爆裂ロリータ』め。」

英樹が苦々しげにもらす。

「本人の前で言うんじゃないよ。爆破されるから。」

「冗談に聞こえねーな。」

そんな風には微塵も感じられないような言い方だ。

「ん、ラザフォード!」

「リョウコ、それにヒデキか。」

「よう。」

「そっちはどうだった？」

「確認できた奴らは皆捕らえたよ。」

「そうか。」

銀髪の端正な顔立ちをした少年が一瞬だけ安堵した表情を浮かべた。

彼の名前は『アイズ・ラザフォード』。

ブレード・チルドレンの1人で、現在は世界的なピアニストだ。

「では急ごう。」

それだけ確認し、アイズは走る。

2人もそれに倣い、F棟に走り出した。

—B棟 校舎口—

「よし、爆薬の量はこんなもんな。」

「だったらとつとと移動するぞ。」

最初に声を発したのは、ツインテールの女の子で、名前は『竹内理緒』。

彼女もブレード・チルドレンの1人で、高校生だが、決してそうは思えない体型だ。

そして、彼女の隣にいる眼鏡をかけた男もそうだ。

彼の名は、『浅月香介』。

生きているブレード・チルドレンの中では最も生まれが早い
ため、ヤイバの呪いが最初に降りかかるかもしれないと言われている。

「はいはい。」

理緒は浅月の後をちょこちょこ着いて行く。

—E棟 連絡通路前—

「で？ 鳴海、F棟の途中にハンターがいるのをどうして教えてく
れなかったんだ？」

英樹はハンターからの銃の砲火を死角に隠れながらやり過ごす。

「思ったより向こうの方が早かったみたいだな。

高町とラザフォードはどうした？」

歩は至って冷静に答える。

「いや、それがだな。

2人を援護してたら、「あとは頼んだよ。」って言われて・・・。

」

「体よく押しつけられたのか。」

「そういう事。」

まあ、頼まれたと考えて頑張りますよ。」

壁から未だに乱射される砲火を覗く。

（敵は1人だが銃を持っている。しかしこっちは飛び道具が無し。だとすれば、砲火が止んだ時に接近戦を仕掛けるか。）
そこまで考えた時、砲火が止んだ。

その瞬間、英樹はハンターに向かって走る。

急に飛び出した事にハンターは驚くが、すかさずナイフを取り出す。だが、英樹はそれに臆する事無く肉薄する。

「そらあっ!」

「ウワッ。」

ハンターの水月に攻撃を叩きこみ、そこから頭部を掌底で攻撃し、意識を混濁させる。

「よし、あとはこれで縛っておけば……。」

「貴様!　そこで何をしている!」

1人のハンターを伏した時、2人が増援にきた。だが、英樹は即座に2人に向かった。

（反応が遅いよ。）

内心で敵に対して注意するほどの余裕が英樹にはあった。

片方の銃を蹴り飛ばし、もう片方は携帯電話を投擲して銃口を反らす。

英樹はそこで動きを停滞させず、2人を武術で擦じ伏せ、持っていた手錠で身動きを封じる。

「こんなところか。」

さて、急いで合流するか。」

合計3人のハンターを捕らえ、英樹はF棟に向かって走り出した。

午前3時。

ハンターを全て捕らえ、英樹は疲れた体をほぐしていた。

「疲れた。」

「若いのに何言ってるの。」

英樹の言葉に、理緒が嘆息する。

「お前に言われるとかなりムカつくんだよ、『爆裂ロリータ』。」

「なっ！ その2つ名は言わないでよ！」

「そうだな。」

スマン。 お前が哀れになっちまうな。」

「爆破するよ!」

「やめろよ、お前ら。」

理緒と英樹のやりとりに、浅月が仲裁に入る。

「こーすけくん! 英樹くんがいじめる〜。」

「いつもお前がいじめてんだから、たまにはいいじゃねえか。」

「ヒドイよ!」

「こーすけくんは味方だと思ってたのに!。」

それだけ言っと、理緒はアイズの所へ行ってしまった。

「それにしても、まさかハンターが来るとは思わなかったなあ。

だいたい、俺たちはこんな事していいのかねえ?

無茶苦茶凶悪犯じゃん。」

英樹の溜息混じりの言葉に、浅月が笑う。

「しょうがねえよ。」

嫌なら止めちまえよ。」

「お前らを放っておくなんてできるわけないだろ。

例えこの手が鮮血に染まったとしても・・・。」

「無理すんな。」

辛かったら辛いって言えよ。」

「言えるわけねえよ。」

皆だって辛いのに、俺だけ弱音を吐くなんて情けないし。」

「そうか。」

「さて、今日はもう帰るわ。」

英樹が立ち上がった時、くぐもった声が届いた。

「ちゃんと将来の勉強はしているのかね？」

「清隆？」

「つて、何だそれは！」

声をかけてきた鳴海清隆は、どういうわけか、カエルの着ぐるみの格好をしていた。

「あんまり君たちとおおっぱらに接触するのもあれだからな。目立たないように変装してきたんだ。」

「その方が目立つたら・・・。」

浅月も呆れている。

「俺には変装しなくていいって言ったくせに。だいたい、何でカエルなんだよ。」

「なに、簡単な事だ。」

緑が・・・きれいだったからさ。

あと、とある『ゆえ』があつてな」

（『ゆえ』って、何！？）

浅月は清隆に詰め寄る事はしなかったが、内心でツツコンだ。

「相変わらずだな。」

一応は、勉強してるよ。」

「そうか。それはよかった。」

私も、君の大学卒業が楽しみだよ。

君の知識はかなりのものだからね。」

「気が早いな。まだ大学に行けるかどうか分からないのに。」

「それもそうだな。」

では、気を付けて帰れよ」

――灘宮宅――

S i d e : 英樹

午前9時30分。

「英樹先輩、起きてください。」

誰だか知らないが、俺を揺すって起こそうとしているやつがいる。

「今何時だよ？」

俺は起きるのがメンドウだったので、俺を起こそうとしているやつ

に訊ねた。

「9時30分です。」

声からして女だろうか、彼女が答える。

（9時30分だと？

俺はまだ6時間しか寝てないんだぞ。

睡眠は1日8時間以上取りたいのに、それでも起きろというのは酷じゃないか。）

俺はそう考えて、声の主に言った。

「あと2時間ほど寝かせてくれ。」

すると、先ほどとは違う女の声が聞こえた。

「そんなのダメです。」

そもそも、英樹先輩が起こしにきてくれてメールしたんじゃないんですか。」

（誰がそんな事するかよ。

ん？ 「先輩」？ それにこの聞き覚えのある声。もしかして・
・。）

「梓と漣？」

「はい。」

恐る恐る声の主を確認したところ、見事に当たった。
いや、別に嬉しくないけどね。

（そういえば、なんか昨日、出掛けるのを手伝う約束を無理矢理さ

せられた気が・・・）

俺が思考している間にも、2人は否応なしに揺すってくる。

「とにかく、早く起きてください。」

「すまんが、もう少し寝かせてくれ。」

別に俺は必要ないだろ？ 荷物なら漣が隠された力を發揮して全部持つてくれるから。」

そう言つて、漣をおちよくつたところ、俺の頭に衝撃が走った。

ゴンッ、と随分といい音だったが、俺は殴られたのだ。 あの秋山漣に。

「荷物持ちは英樹先輩つて決まってるし、第一、その為に呼んだんです！」

「フツ、本音が出たな。」

まあいいや。 じゃあすぐに準備するから、外で待ってる。」

「はい。」

「お願いします。」

2人が出てつた後、英樹の頭にふと疑問が浮かび上がった。

「あいつら、どうやって家に上がったんだ？
まあ後で聞かか。」

Side：英樹 了

「で？ 今度は何で唯の家に行くんだ？」

「まだ起きてないみたいなんで。」

「あつそ。」

英樹は澪たちを外に出してから5分で準備を済ませた。

「律、ムギ、唯は？」

「んー、今憂ちゃんが起こしてる。」

「楽しみで寝られなかったんじゃないかしら。」

「あいつらしいな。」

「皆、お待たせ〜。」

「皆さんすみません、お待たせしちゃって。」

唯と憂がちょうど出てきた。

「そつえば、梓と澪。」

「お前らどうやって俺の家に入ったんだ？」

「憂に英樹先輩を起こしに行くって言ったら、合鍵を渡されたんで。」

「部屋の場所も聞きました。」

梓が英樹の質問に答えながら歩きます。

「合鍵？ 俺、憂にそんなの渡してないぞ。」

「お兄ちゃんのお兄さん、翔影さんからいただいたの。」

「聞いてねえし……。」

まあ、憂になら別にいいか。」

（（いいんだ……。））

英樹の考えに、梓と漑が驚く。

「よし！ 行くぞ！」

「「オッー！」」

律の掛け声に、ムギと唯が従う。

「頼むから、お金の無駄遣いしないでくれよ。」

英樹は嘆息しながら言った。

――デパート 洋服売り場――

「ねえねえ、漑ちゃん、これどうかな？」

「えー、それより、こっちの方がいいよ。」

唯と漑が服について話し合っている。

「律ちゃんとムギちゃんはどっちがいい？」

「やっぱりこっちだよな。」

「あたしにや、2人のセンスがわからん。」

「2人とも似合ってるわ。」

「じゃあ律ちゃんはどっちのがいい？」

「あたしは普通にこついうので……。」

「ムギは……。これなんてどうかな？」

「それもいいわね。」

4人とは別の所で、梓、憂は服を選び、英樹は興味なさげにしていた。

「お兄ちゃん、これどうかな？」

「英樹先輩、これ、どうですか？」

「ん？ いいんじゃないか？」

英樹は本の少し2人を見ただけだった。

「それじゃあこつちは？」

「どうですか？」

「いいんじゃないか？」

「真面目に答えて（ください）よ！」

英樹の変化の無い言葉に、2人は憤慨する。

「そんな事言われてもなあ・・・。」

「女の子は、相手がどう見てるか気になるものなんだよ。」

「憂の言つとおりですよ。それなのに大して興味なさげにするなんて。」

（「興味ないし。」なんて言ったらまた怒るだろうなあ。）

「当たり前だよ（です）！」

「お前らの読心術の方が俺は興味深いんだが・・・。」

「英樹先輩、そんなんじゃないやあ、乙女心は理解できませんよ？」

「できなくて結構だ。別に理解しようとも思わん。」

それに、思っても理解できるものでもないしな。」

「もう。形だけとはいえ妹として兄の将来が心配だよ。」

「奇遇だな。俺もお前たち皆の将来が心配だ。」

さて、改めて言うが、服選びなんて自分たちでできるだろうが。何故俺に似合っているかを問う必要がある？」

「さつきも言ったように、相手がどう思つか気になるからです。」
梓の言葉に、憂がウンウンと頷く。

「そうは言っても、そんなのは人の好みで変わるもんだろ？」

「そりゃあ、そうだけど・・・。」

「今、お前たちは赤い服を着ている。
それを似合うと言うやつもいれば、俺みたく青の方がいいと言う
やつもいる。」

（英樹先輩、一言も青がいいだなんて言っていないし！）

「とりあえず今はそれは置いてけ、梓。」

「読心術、必要ないじゃないですか！」
梓は英樹に心を見透かされ、慌てた。

「結局のところ、相手がどう思つかは、そいつの好みによって変わる。」

だから、気にしてもしようがないんだよ。」

「「うーん・・・。」」

2人はあまり納得しなかった。

「だいたい、お前たちは可愛いんだから、何を着ても似合う。
だったら別に服装なぞどうでもよかるう。」

「お世辞は結構です。」

「お世辞なんかじゃねえよ。」

「っ！ よくそんな事が平然と言えますね。」

「本当の事だからな。」

梓は英樹に可愛いと言われ、顔を赤くするが、
対して英樹はそれが至極当然だとも言っように、平然としていた。

——喫茶店——

「おい、なんだこの買い物袋の量は……。」

「いや、買い過ぎちゃった。」

「あたしもつい。」

「結構安かったので……。」

「皆に薦められたので。」

「何着ても似合っつて言われたので。」

「気にいったのが多くて……。」

「梓、何故お前は俺にそう言われたからってそんなに買った？」

「別に。」

梓はプイツとそつぱを向く。

（（少しは梓の想いをわかってあげて。））
2人の様子を見ていた、漣、ムギ、憂も3人はそんな事を思っていた。

「まったく……。女は全然理解できん。」

「しないし、しようとも思わないって言ったじゃないですか。」

（俺、梓に対して恨みを買うようなことしたか？）

しばらく考えるが、答えが出てきそうもなかったので、
（まあいいや。） と思い、止めた。

「お待たせしました。」

そこに、飲み物を運んできた店員が現れた。

しかし、その姿は、犬だった。

否、犬の着ぐるみを着た店員だった。

「わあ、わんちゃんかわいい。」

「確かにかわいいな。」

「いや、そこじゃねえだろ。」

唯と漣は見とれていて、律の言葉など耳に入っていない。

「この声は……。」

英樹は声の主に心当たりがあるようだ。

「ここって、こういうお店なんですか？」

「いえいえ、私は今日、臨時で雇われたのです。」

今まではこうやって着ぐるみを着て風船とかを配っていたのですが、

それが定着してしまって、このまま接客しようと思ったのです。」

「ねえねえ、皆で写真撮ろうよ。」

「「「「えっ！？」「「「「

「構いませんよ。どうぞどうぞ。」

「わーい♪」

「まあ、別にいつか。」

「だな。」

「これもいい思い出になるわね。」

全員で写真を撮り終えた後、犬が英樹に近づいた。

「清隆、何故お前がここにいる？ 仕事はどうしたんだ？」

「さっきも言ったように、今日はここに臨時で雇われたのだ。」

ところで灘宮、君があんなに美しい女性たちをたぶらかせていたとは思わなかったぞ。」

「たぶらかしてなどいない！ 部活の後輩だ。」

「ふむ。とりあえずはそういう事にしておこう。」

それと突然だが、今晚もアルバイトだ。今回はハンターはいないはずだ。」

そう言つて、清隆は紙を渡す。

「都合が悪ければラザフォードに伝えてくれ。ではな。」

清隆が去つた後、英樹は紙を開く。

・ 8 / 6 2 3 : 0 0 駅前集合 交通費全負担

と、それだけ書かれていた。

「交通費、出るのか。」

「それじゃあ、次はアクセサリーでも見に行こうよ。」

「そつだな。」

「早速行きましょう。」

（何！？ まだ何か買うのか！
さすがにこれ以上は・・・。）

英樹は横目で、皆の買い物袋の量を見る。

「英樹先輩、逃げないでくださいね。」

「わかってるよ。」

英樹の考えを見透かした梓が静かに耳打ちする。

「なんか最近、梓によく心を読まれる気がするが……
どうなってるんだ……？」

その後も、多数の店を回り、ようやく帰路につく事となった。

「全員の家に届けなくていいのか？」

「さすがにそれはね。」

「ええ、自分たちで持って帰ります。」

「そうか。」

律とムギと漑はああ言っているのに、お前らは持たないのか？」

「「「お兄ちゃん（英樹先輩）の家から近いからいいじゃない。」」」

「

（コイツら……。）

唯、憂、梓の3名は、最後まで英樹に運ばせる事にした。

「それじゃあ、私たちはここで。」

「次は明後日の部活の時だな。」

律、ムギ、漑の3名と別れ、唯と憂とも別れる。

「ようやく到着か。」

「ご苦労様でした。」

「じゃあ、次の部活の時にまた。」

「はい。」

梓の態度がいつ戻ったかはわからないが、英樹はそれに安心した。

「さて、清隆に呼ばれてるし、夕食の支度を済ませてとつとアルバイトに行くか。」

そう言つて、英樹はその場を後にした。

「えっと、これはこつちに・・・。」

ん？　なんだろう、この紙。」

梓が自室で購入した服の整理をしていた時、何かが書かれた紙があった。

・ 梓には、赤と白のストライプのやつか、
白地に青い水玉模様のが似合うと思うよ。

灘宮 英樹

「直接言ってくればいいのに。」
梓は小言を言いながらも、微笑んでいた。

第4話 「ある夏休みのとある1日」 了

第4話 「ある夏休みのとある1日」(後書き)

なんだこの文は・・・。

とまあ、下手なのはご勘弁を・・・。

今回はかなり書くのに悩みました。

英樹のやっている事、どうよ？

こんな犯罪の一線を軽々越えてるキャラが
梓ルート行けんのかよ？

みたいな。

もしかしたら、葛藤の末自殺しちゃうかもしれませんね(笑)

まあ、それは一応無いのですが。

英樹の事だから、一応今回の件は黙っているだろうとは思いますが。
話したらBADエンド直行じゃないですか・・・。

本当にごめんなさい。

それでは、次の5話でまた。

第5話 「具現されゆく想い 崩れゆく想い」(前書き)

どうもです。

今回は夏祭り編となります。

展開が多々妙な所があるかと思いますが、
いつも通りスルーしてやってください。

あと、誤字脱字、感想もどしどし受け付けております。

第5話 「具現されゆく想い 崩れゆく想い」

けいおん！ F r a g m e n t

第5話 「具現されゆく想い 崩れゆく想い」

——平沢家——

「憂、英樹先輩の事を教えてほしいんだけど。」

突然、梓がそんな事を言ってきた。

（梓ちゃん、お兄ちゃんの事が・・・？）

「違うよっ!」

「梓ちゃんが私の心の中を読んだ!？」

「いや、おもいつきり口に出たよ・・・。」

梓は呆れてしまった。

「でも何で突然そんな事を？」

「えっ!?! いや、その・・・。」

梓が返答に困っている。

（なんだ、やっぱりお兄ちゃんの事が好・・・。）

「だから違っつてば!?!」

「またも梓が叫ぶ。」

若干頼が赤くなっているため、説得力など微塵もないが。

ただ当人はその事を断固として認めていない上、自覚がない。

「そんなに強く否定するって事は、大嫌いなのか？」

「そ、そういうわけじゃ……。」

「フーン。」

憂は慌てふためく梓を見てニヤついている。

「ただ、日頃お世話になってるからそのお礼にと思って。」

「なるほど。」

梓を弄るのを止め、彼女の言葉を聞いた憂は、

（これは、お兄ちゃんと梓ちゃんを引き合わせる最大のチャンス！）
と思い、梓に積極的に協力することを決意する。

「わかった、梓ちゃん。」

「私も2人のために協力するよ。」

「憂……。ありがとう。」

感謝する梓だったが、ふと違和感に気付く。

（ん？ 今2人って言った？ 気のせいかな。）

「それで具体的に何が知りたいの？」

憂はやる気マンマンだ。

「ええっと、お菓子でも送りたいんだけど……。
味の好みとか教えてほしいな。」

「うーん、お菓子かぁ。」

梓の言葉に、腕を組んで難しい顔で考え込む。
それを見て、梓は不安になってしまう。

「ダ、ダメ……かな？」

「ダメじゃないけど……。」

昔、お兄ちゃんにお世話になったからお菓子を作って渡した事があるんだけど……。」

「味の調整ができてなかった、とか？」

「ううん。お兄ちゃん、性格が変わってるから。」

「なんか、見返りを求めて世話しているみたいで悪いな。」って
言われたんだ。」

（ホントに変わってる……。）

梓は絶句した。

「じゃ、じゃあどうすれば。」

「夏祭りに誘ってみたらどうかかな？」

「夏祭り？」

「うん！」

今日の日曜日あまつがみじんじゃに天津神神社で行われるんだ。」

「それはいいかも。」 「でしょう？」

「それじゃあ憂も行こうよ！」

梓は目を輝かせながら言った。

「え？ 何で？」

「だって、皆で行った方が楽しいし。」

「そ、そうだね……。」

梓にそう言われては仕方無かった。

（２人きりで行ってきてほしかったのに……。）
憂の策略は無残にも梓には通じなかった。

―天津神社―

夏祭り当日。

「ハァー、まさか失敗しちゃうとはな。」

憂はがつくりと肩を落とす。

それを耳ざとく聞いた澪が憂に訊ねた。

「もしかして、ホントは英樹先輩と梓の2人きりでこさせようとしたの？」

「ハイ。」

「だけど梓ちゃんが皆で行こうって。」

「梓……。」

「澪さんはいつから梓ちゃんが英樹さんの事を想っていると思ったんですか？」

「私は、こないだの合宿の時からかな。」

「英樹先輩に頭を撫でられている時の梓、嬉しそうだったし。」

「でもそれって、お兄ちゃんを兄として捉えてたからじゃあ？」
澪の言葉に、憂が訊く。

「違うわ。あれは本当に英樹さんの事が好きなのよ。」

「紬さんも気づいていたんですか？」

「ええ。」

「確かに憂ちゃんの言うとおり兄として捉えているかもな。それでも私はあの2人はいいい組み合わせだと思うんだ。だから私たち3人で梓と英樹先輩を近づけよう。」

漣が勢い込む。

「「オオッー！」」

それに憂とムギがならう。

「よおーし、食べるぞおー！」

「オオッー！」

律と唯がいさんで駆け出す。

「コラー、2人ともはしゃぐな！」

他の人に迷惑がかかるだろうが！」

英樹はそれを制し、注意している。

（とは言ったものの、困ったな。どうやって梓と英樹先輩を近づけるか・・・。）

漚は自分の隣で綿菓子を手をしている愛らしい後輩に目を向ける。

（試しに梓の浴衣姿をどう思っているか英樹先輩にハッキリと聞いてみるか。）

漚は梓をムギと憂の2人に任せ、早速作戦を実行する。

「英樹先輩。」

「ん？ どうした、漚？」

「梓の浴衣姿、どう思いますか？」

「どうって……。そりゃあ可愛いと思うけど？」

（（こ、これは、脈アリ！？）（））

少し離れて様子を窺っていたムギと憂も驚く。

ちなみに、梓は出店に夢中で聞いていなかった。

「そ、それじゃあ……。」「

漚は喜色の声を上げるが、次の言葉にうなだれてしまう。

「梓だけじゃなく、皆も可愛いよ。」

笑顔でそう続ける英樹。

憂はこけそうになってしまった。

しかしムギは簡単に諦める事なく、次の質問を投げる。

「それじゃあ、誰が一番可愛いですか？」

「えっ!？」

ムギのこの質問に英樹は返答に困ってしまう。

(さすがムギ! うまく核心をつく質問をしかけた。

さあ、英樹先輩、ちゃんと「梓」だと答えてくださいよ。)

英樹がなかなか返答しないため、ムギ、漑、憂の3人が迫ってくる。と、そこへ先に行っていた唯たちが呼んでくる。

「皆、早く早くう。」

英樹は助かったとばかりに、

「ゆ、唯たちを待たせるのも悪いし、行こうか。」
と言って駆け出し、もとい逃げ出した。

「逃げられちゃいましたね。」

憂が漑とムギに言う。

「まあ私たちもここにいてもしょうがないから行こう。」

「まだチャンスはあるものね。」

「???」

言葉の意味がわからない梓が首を傾げていた。

その後も、憂たち3人は積極的に英樹に梓の話題を提供しては、

それをどう思うか訊ねるのだが、英樹ものりくらりとそれらの質問をかわしていく。

「なかなかの強敵だな。」

「漣のやつ、さっきから何言ってた？」

英樹に奢ってもらったたこ焼きをほっばりながら律は漣を心配した。

今は唯、律、漣、ムギの3人は休憩しているが、

英樹、憂、梓の3人は、硝子細工の店を見ている。

「綺麗だね、梓ちゃん。」

「うん。 あっ、憂、コレ可愛いよ。」

憂と梓は商品に目を奪われている。

英樹は少し距離をとった所で、店の人と話しこんでいた。

「そういえば、梢さんのところにはもう行ったのかい？」

「いえ、まだ。 どちら辺にあるんですか？」

「鳥居の近くだよ。」

「梓、憂、 2人とも何か欲しいなら買ってあげるけど？」

硝子細工に夢中になっていた2人に、英樹が声をかける。

「で、でも、悪いですよ。」

「そうだよ。」

が、しかし梓も憂も、決してたかろうとはしない。

「そうか？　ならいいんだけど・・・。後悔だけはしないようにな。」

そう言い終わると、漑たちがやってきた。

「そろそろ時間がなくなってきたか？」

英樹は後輩たちの帰宅時間を気にする。

「まだ大丈夫ですよ。」　漑の言葉に、皆がうなづく。

「そっか。」

それじゃあ悪いけど、鳥居の近くに俺の知り合いがやってる、硝子細工の店があるから、寄ってもいいかな？」

「モチロン。」

唯と憂が声を重ねる。

「えーっと、確かこの辺りだって聞いたんだけど・・・。」

アレだ。 梢さん、お久しぶりです。」

英樹の声に、20代の女性が顔を向ける。

「アレ？ 灘宮、久しぶりね。

その子たちは皆あなたの彼女？」

「違いますっ！」

不意ながら、英樹と梓の声が重なる。

「ハア、部活の後輩ですよ。」

英樹が頭を押さえながら言う。

「あなたが後輩と祭りにくるとはね。

大抵は1人じゃないの。」

「何年前の話ですか、それは。」

「かれこれ、6、7年？」

「それくらいあれば、人は変わるものですよ。」

英樹と梢がすっかり話しこんでいるため、

取り残された後輩たちは並べられた硝子細工を見て、驚嘆している。

「綺麗……。」「」「」「」

それを耳にした梢は気分を良くした。

「そりゃあもちろん、これしか取り柄が無いからね、私は。」

「そんな事ないと思いますけど・・・。
そういえば、鹿嶋さんは？」

「旦那？」

旦那なら、客集めに行くって出て行ってそれきり。逃げられた
みたいだね。」

「相変わらず接客はダメなんですね。」

「まあね。」

それより、今年はいくつ買ってた？」

「後輩たちによりますね。
皆、どれか買おうか？」

英樹の言葉に、唯と律が素早く反応し、欲しいものを告げる。

「梓たちはどうする？」

「ええっと、さっき断ったのに、いいんでしょうか？」

梓が不安げに聞いてくる。

「もちろん構わないさ。」

「そ、それじゃあ・・・。」

そう言って、梓は猫の硝子細工を買ってもらい、
残りの3人も、皆自分の欲しいものを英樹に買ってもらった。

「いやあゝ、楽しかったね。」

唯が背伸びをしながら言う。

「そろそろ遅い時間だし、もう帰るか。」

律の言葉に従い、皆歩き始める。と、

「キヤツ！」梓がバランスを崩し、転倒してしまう。

「大丈夫か！？ 梓！」

英樹がすぐに駆け寄り、梓を抱き起こす。

「へ、平気です。 痛っ！」

梓が右足の足首を押さえる。

「足を捻ったのか？ 少し見せてみる。」

英樹の言葉に従い、梓が右足の足首をみせる。

「っ！ 少し赤くなっているな。」

その言葉に、皆が慌てふためく。

「ど、どどうしよう・・・、憂、お兄ちゃん。」

「落ち着け。」

誰か、タオルとハサミを持っているか？

友人から聞いた応急処置の方法に必要なんだが・・・。」

英樹の冷静な対応に、皆落ち着いてくる。

「タオルなら、あたし持ってます。」
律が言う。

「けど・・・、ハサミは誰も・・・。」
憂が落ち込んでしまう。

「それじゃあ、近くの人に聞いてもらっていいか？」

英樹の問いに、唯たちはすぐさま頷き、周辺に探しに行く。

（皆、頼んだぞ。）

彼女らを見送りながら、英樹は思った。

「梓、もう少し我慢できるか？」

「はい、大丈夫です。」

英樹の心配そうな声に、梓が気丈に振る舞う。

「お兄ちゃん、あつたよ！」
数分後、唯たちが急いで戻ってきた。

「ありがとう。」

律、すまないがこのタオルを切断してしまつて大丈夫か？」

「応急処置のためなら。」

「助かるよ。」

言うが早いのか、英樹はタオルに互い違いに切れ目を入れ、包帯に模した。

そして、それを梓の足首に2回巻き、足の裏から足の甲を通り再び足首に・・・。

それを何度か繰り返し、最後に結んだ。

「これでよし、と。」

英樹はようやく安堵の息をもらした。

「良かったあ。」

澪も胸を撫で下ろす。

「梓、歩けそうか？」

英樹の言葉に、しかし梓は申し訳なさそうに言う。

「すみません、普段はまったく使わない下駄なので、ちょっと難しいかと・・・。」

「そうか、だったら俺がおぶって行くよ。」

その言葉に、憂は意見した。

「でもお兄ちゃん、梓ちゃん浴衣だから足開けないよ・・・。」

「『『『『『』』』』』』」

憂の詩的に、全員が沈黙する。

「それだったら、私が車を手配しましょうか？」

ムギの提案に澪は首を振った。

「それだと、他の人に迷惑がかっちゃうし・・・。」

「だったら、梓の両親に迎えにきてもらえば？」

今度は律が提案するが、

「残念ながら、私の両親はまだ帰ってきてないです。」との梓の回答にうなだれる。

「どうするか・・・。」英樹や唯たち皆が考え込んでしまう。

「そうだ！」

やがて憂がある方法を思いつく。

それは・・・。

「『『『『『』』』』』』」お姫様抱っこ？「『『『『『』』』』』』」

皆が口を揃える。

「うん。これしかないと思う。」

憂の言葉に、1人を除いてうなずく。

「で、でもそれは・・・かなり恥ずかしいんだけど。」
梓だ。

「しょうがないよ。梓は他に何か方法を思い付いたか？」
漣の言葉に、梓は首を振るしかできなかった。

「いたしかたない。梓がそれでいいのならそれでいこう。」
英樹はなんの躊躇いもなく言った。

しばらくの逡巡の後、梓は覚悟を決め、英樹にお姫様抱っこをされた。

（うう、恥ずかしくて死にそう。）
腕の中にいる梓の顔はかなり赤い。

そんな2人を見ていた憂は、ふとある事を思った。

（お兄ちゃん、恥ずかしくないのかな？）

「どうしたの？ 憂ちゃん。」

「絀さん、お兄ちゃん、恥ずかしくないのでしょうか？」

「そういえば、まったく顔が赤くないわね。」

「そうなんですよね。」

そんな憂とムギのやりとりを聞いていた澪が2人のもつともな疑問に答えた。

「いや、あれは私と同じでかなり恥ずかしいのを必死に隠してるんだ。」

私にはわかる。私も1年の学園祭の時……。」「と、遠い目をした。

「それじゃあ俺は梓を家まで送って行くから。」

「うん、じゃあね、お兄ちゃん、あずにゃん。」

「はい、それでは。」

無事に祭り会場を抜け出し、平沢家までたどり着いた。

「……………」

「……………」

静寂の闇が2人を包み込む。

そんな永遠ともしれない空間の中を、2人は歩いていく。

「すみません、英樹先輩。」

唐突に梓が謝ってくる。

「なんだよ、突然。」

「だって、いつもお世話になっているうえ、今日は怪我をして、家まで送ってもらって。」

「そんな事を気にしているのか？」

英樹は暗くなっていく梓に半ば呆れた。

「だって、スゴク迷惑かけてますし……。」

「俺は全く気にしてないし、迷惑だって思ったこともないよ。」

梓が不安になっていくのを気にして、英樹はなんとか元気づけようとする。

「でも……。」

それでも梓はなかなか引き下がらない。

「梓、頼む。もう自分を卑下しないでくれ……。」

俺にお前を叱らせないでくれ。そんな弱気なお前を見るのは辛いんだ。」

「英樹先輩……。」

「……。」

そこまで話した後、再び闇が2人を包み込んだかに見えた。

「さあ、到着したぞ、梓。」

「あ、はい。」

梓の家に到着し、英樹は梓を彼女の部屋まで運んだ。

「ご両親が帰ってくるまで一緒にいようか？」

「大丈夫です。メールで私の容体を伝えましたから。」

梓はそう言って笑顔を見せた。

「そうか。」

それじゃあ何かあったらメールでも電話でもいいから連絡してくれ。」

「はい。」

思ったんですけど、英樹先輩はどうしてこんなにも私を気にかけてくれるんですか？」

「……。それじゃあ、また。」

しかし、梓の問いかけには答えず、英樹は梓の自宅を出た。

（質問、聞こえなかったのかな？）

英樹は、自宅への帰路で、先程梓に言われた事を思い出す。

（「英樹先輩はどうしてこんなにも私を気にかけてくれるんですか？」か……。）

闇夜に広がる星を見上げながら考えた。

（俺は、梓の事が……。）
そんな考えがよぎった時、英樹は頭を振った。

（もしそうだとすると、この想いを梓に伝えたら、俺たちは今までのように過ごしていけるのか……。？）
溜息をついて家に入る。

（『今』という形が壊れるぐらいなら、俺はこの気持ちを彼方へ追いやろう。

さようなら、『梓を好きな俺』。）

第5話 「具現されゆく想い 崩れゆく想い」 了

第5話 「具現されゆく想い 崩れゆく想い」（後書き）

とまあ、今回はこんな感じでした。

英樹が梓への想いを一時的に断ち切るという形ですが、いつ復活するんだろうこれ。

相変わらずこんなのが梓ルートでごめんなさい。

それと、ここ最近、憂も書いてみたいなあと思っていたのですが、うん、無理っぽ。というわけで止めました。

らじおん！！、早く次のCDが発売されてほしいです。

第8回の終わりはとてもよかったです。何度聞いても彩ちがかわゆいです。

それではまた来週。

第6話 「再生」 (前書き)

只今、他のけいおん！の小説を制作しようかなあ、とか考えてます。

それを薄ルートにするか、それとも普通の話にするかが決まってるので、いつ頃から掲載できるかわかりません。掲載するかどうか怪しいのですが・・・。

それでは、第6話、「再生」をどうぞ。

第6話 「再生」

けいおん！ F r a g m e n t
第6話「再生」

―夏休み明け 軽音部部室―

「ああ、夏休み終わっちゃったね・・・。」
唯が今日何度目かの台詞を溜息混じりに言った。

「唯、その台詞飽きた・・・。」

「じゃあ律ちゃん考えて。」

「だってさ、澪。」

「私が考えるのか!？」

そんなこんなで今日も軽音部は賑やかだ。
ただいつもと違うのは、英樹がいないという事だ。
何故か夏休み以降はまだ1度も顔を出していない。

その時、さわちゃんが何を思ったのか、ふと言った。

「そーいえばあなたたち、良い年した女の子が集まって、
1人も彼氏がいたりしないの？」

その言葉に、律、梓、澪は目をそらす。

「『さわちゃん（先生）だけには言われたくない。』」

「よしお前ら体育館裏にこい。」

「でもまあ、良くも悪くも見ての通りだね。」

律が回転椅子に座りながら言う。

「澪はこんなし・・・。」

律の視線の先には、顔を真っ赤にして

「男の人と付き合うなんて無理無理無・・・。」

とうずくまっている澪がいる。

「唯は縁が無さそうだし・・・。」

「ほえ？」

律の言葉に、唯が首を傾げる。

「だから10代の青春は軽音部にささげることにしたから。」

そーいうのはまあいつかなって。」

律はぐるぐる回りながら言う。

「ならもうちょっとポジティブに言いなさい。」

さわちゃんが溜息混じりに言う。

「全く、皆情けないわねー。」

私とその歳の頃だった「さわちゃんて、恋愛上手く行っていないのに

そーいうこと語れたがる人だよなー。」・・・。」

唯の言葉に、さわちゃんはどこからか縄を取り出し、彼女をグルグル巻きにした。

その光景に律と梓が呆れる。

「「唯（先輩）……。」「」

「んー、でも確かにちよつと勿体無いですね。」
唐突に梓が言い出し、澪を見る。

「澪先輩とかモテそうなのに。」

その言葉に澪が顔を真っ赤にする。

「えっ、私！？ 無理だよ私は！
私なんかよりほら！」

慌てた澪が、ムギを指さす。

「ムギ！」

ムギがこの中で一番早く結婚しそうじゃない？」

いきなり名指しされ、ムギはきょとんとする。

「え？ 私？」

それに律がのっかる。

「あー、わかるわかる！」

親が持ってきたどっかの御曹司とお見合いとかしてさー。」

「そうそう、高級料亭とかでー
えーと……。あの水がばしゃーんって、カコーンて……。」「

いつのまに縄を解いたのか、唯ものつかる。

「水がばしゃーんでカコーンって・・・。
ししおどしだろ？」

漣が呆れる。

「そうそう。それで美味しいもの食べてー・・・。」
と、皆で盛り上がっている中、ムギが神妙な面持ちになる。

それを見た梓が心配する。

「ムギ先輩？」

ま、まさかホントにそんな話があったりするんですか？」

「『えっ！？』『』」

全員が一齐にムギに注目する。

「そ、そうじゃないの。」

そんなこと本当にあつたらどうしようって・・・。

私、皆と一緒にいたいのに・・・。」

ムギが涙目になる。

「大丈夫！」

そんなことがあつたら、私たちが助けに行くから！
律が元気づけるように言う。

「その見合い待った――！！」
律が障子を思い切り開ける。

「み、みんな・・・！」
振袖姿のムギが目を見開く。

「なんだね君たちは。出て行きなさい！」
ムギの父親が声を荒げる。

律はそれを無視し、ムギに手を差し伸べる。

「ムギ！ 来い！」
律の男前レベルが上がった！

「ムギちゃん！ 迎えに来たよ。」
唯も律と同じように手を差し出す。

「うん・・・！」
お父様、ごめんなさい。
私、みんなともっと音楽をやりたいの。」

そう言つてムギは唯たちの所へ・・・。

「みたいな！」
律がグッと拳を握る。

それに梓は呆れる。

「ベッタベタな三文芝居ですね・・・。」

しかし、唯たち3人は目を輝かせている。

「「「アリだね。」」」

「アリなんですか!？」

そんな彼女たちをよそに、さわちゃんは続ける。

「それにしても・・・もっと懸命に恋愛しなきゃいけないのが他に
いるけどね。」

「「「「誰ですか?」」」」

5人は首を傾げる。

「決まってるでしょう。 英樹君よ。」

彼女ぐらいいてもよさそうじゃない。」

「「「「「ああー。」」」」」

さわちゃんの言葉に、5人は納得する。

「でも、お兄ちゃん恋愛事とかまったくないけど・・・。」

「そうなの?」

唯の言葉に、澪が訊ねる。

「うん。女性自体が苦手みたいだし。

恋愛にかまけている暇があるなら勉強しろ、みたいなタイプだし。

」

「なんか納得できる。」

律の言葉に、みんなが頷く。

「そーいえば唯、何で最近英樹先輩来てないんだ？」
律が聞いてくる。

「さあ？」

「「さあ？」って・・・。」

まがりなりにも一応妹なんだろう？」

「でも家は別々だし、お兄ちゃん自身、あんまり自分の事話さないし・・・。」

唯がしよげながら言う。

と、そこへ憂がやってきた。

「お姉ちゃん、教室にあつた忘れ物、届けにきたよ。」

「ああ、ありがとう、憂。」

唯が憂から忘れ物を受け取る。

「ねえ憂、最近、英樹先輩どうしてるか知ってる？」

梓の言葉に、憂が首を傾げる。

「お兄ちゃん？」

お兄ちゃんなら多分、将来就く仕事の勉強をしているんじゃないかな？」

「『『『『仕事？』『』『』『』』」

唯も含めて、5人は不思議そうな顔をする。

「うん、ちよつと紛らわしいから言い方を変えるけど、英樹さんのお兄さん、翔影^{しょうえい}さんと、義姉^{しよ}さんの詩織さんが警察官なの。」

で、英樹さんは翔影さんの影響かどうかはわからないけど、将来は科捜研に勤めるって聞いたから、多分それに向けての勉強じゃないかな？」

憂の言葉に、梓、漣、ムギ、律が驚く。

「『『『『科捜研！？』『』『』『』』」

「律ちゃん、「かそーけん」って何？」

「『『『『。。。』『』『』『』』」

しかし、誰もそれに答えようとはしなかった。

「無視しないでえ〜。」

そのころ英樹は、ちょうど図書室から出てきたところだった。

「疲れた……。」

先生に許可をもらい、5時限目から授業を抜け出して、かれこれ数時間、彼はずっと勉強をしていた。

（試験まであと数ヶ月か。）

英樹の兄は、憂の言うとおり警察官で、捜査一課に勤めている。義姉というのは英樹の兄、翔影の妻で、詩織しおりといい、彼女は捜査三課に勤めている。2人は庁内でも有名で、その実績はかなりのものだ。

そして、英樹は幼少期の頃から兄の勉強を見ており、その影響からか、

警察官になる決意をし、科捜研に勤める事にしたのだ。

（アレ以来、軽音部に行っていないな……。）

そう、夏祭りでの1件以来、英樹は1度も軽音部に行っていないのだ。

理由は単純にして、明快だ。それは、「梓がいるから」だ。

（『今』という形が失われるのなら……。）

そう思って、梓への想いを捨てたはずだった……。

しかし、それは杞憂で、実際には彼女への想いが募るばかりだった。

（俺はどうすればいいんだ……？）

英樹は自問するものの、答えなど出てはこない。

「アレ？ 英樹。まだ残って勉強していたのか？」

声がした方に顔を向けると、そこにはきりゆつなおえ騎龍直衛がいた。
英樹の幼馴染で、クラスメイトの1人だ。

「ああ、直衛。

そうだけど？」

「ここ最近、根を詰めすぎてないか？」

（よく見てるなあ。）

英樹がそう思っていると、

「もちろん、心配してるんだから当然だろ？」

あっさりと心を読まれた。

（バんなそ力な！）

「「そんなバカな」だろ……。」

直衛は苦笑いしている。

と、そこに1人の女性が現れた。

「直衛。

あ、英樹先輩も、こんにちは。」

「ああ、エリ。」

どうしたんだ？」

彼女の名前は瀧エリ。

唯たちと同じ2年生で、直衛とは恋仲の関係である。

「じゃあ邪魔しちゃ悪いから俺はこれで。」

英樹がその場を立ち去ろうとすると、エリが呼び止める。

「あ、構わないですよ。」

お借りしたノートを返しに來ただけですから。

直衛、ありがとうね。助かったわ。」

「ああ、役に立って良かったよ。」

エリはノート渡した後、手を振りながら去って行った。

「……。」

その後ろ姿を英樹はしばらく見ていた。

「かわいいだろ？」

渡さないけどな。」

「いや、そういうんじゃないけど……。」

「冗談だよ。お前も彼女の1人ぐらい作ればいいのに。性格はともかく、見た目はいいんだから。」

「そうは言われてもなあ。」

だが、直衛の言葉に、一瞬だけ梓の顔が英樹の頭をよぎる。その一瞬の表情の変化を、直衛は見逃さなかった。

「誰か心当たりがあるのか？」

（げっ！？ 何ではれたんだ？）

「幼馴染だからな。」

直衛は笑顔で言った。

英樹は観念し、この機会に誰かに洗い浚い話して楽になろうと考えた。

「人気の無い所で話すか。」

「ああ、頼む。」

——中庭——

「で？ 単刀直入に聞くけど・・・。

誰か好きなやついるのか？」

中庭に着いてから、英樹と直衛は椅子に腰かけた。

「まあ、いるけど・・・。」

英樹は戸惑いながら答える。

ハッキリ言っところという話はかなり苦手だ。

「じゃあさっさと告白しちゃえば？」

直衛は軽く言う。

「簡単に言っなよ。それにそんな気持ちは捨てるつもりなんだよ。」

「ハア？ 何でまた？」

「その子に想いを伝えて、『今』という形が壊れるぐらいなら、そんな気持ちは捨てるって決めたんだよ。」

「だけど・・・。」

「そこまで言って、英樹は口を閉ざす。直衛は先を催促せず、ただ静かに英樹が言っのを待った。」

「だけど、その子に対する気持ちを捨てきれないんだ・・・。」

「なるほどね。」

「で、どうすればいいか迷ってると。」

「ああ。」

2人はしばらく黙っていたが、直衛が唐突に口を開いた。

「まあ、無理に気持ちを捨てる必要は無いんじゃないか？」

「え？」

「だって、その子への気持ちを捨てられないって事は、その子の事が本当に好きだからなんじゃないの？」

「……。」

その言葉に、英樹はただ黙っている事しかできなかった。

「だったら、今お前の眼の前にある選択肢は3つ。

まず1つは、その子への気持ちを完璧に捨てる。

ただ、それができる保証はないし、捨てられるまで勉強に身が入るとは思えないな。

もう1つは、とりあえず今は保留にして、軽音部に戻る。

これは英樹が耐えられればの話だけだな。

そして最後の1つは、その子に自分の気持ちをちゃんと伝える。つてところかな。」

そう言つて直衛はこちらを振り返る。

「そう……かもな。」

英樹は難しい顔をしていた。

「別に想いを伝えたからって、『今』が壊れるわけじゃないぜ？
現に、俺とエリだってそうだぜ。」

「なるほどな。」

話したら幾分楽になったよ。」

「そつか。 そりゃあ良かった。
と、もうこんな時間か。 それじゃあ俺はそろそろ帰るわ。」

「ああ、気をつけてな。」
2人はそう言つて別れた。

―学校外近郊―

直衛と別れた後、英樹は部室に行こうかと思つたが、
誰ももっていないだろうと考え、帰路についたのだが、
今彼は自宅付近の青果店で突っ立っている。

「で、何で俺はここにいるかと言うと、ただ単に雨宿りしているだけだ。」

彼は誰に説明しているのでしょうか？

「「まったく突然雨に降られるなんて……。 えっ？」」

最初から最後まで英樹と言葉を一致させたのは、今話題（英樹内のみ）の中野梓だった。

「あ、梓！？」

「英樹先輩！？」

「・・・・・・・・・・」

（（気、気まずい・・・・。））

2人は久しぶりに会ったというのに、なかなか言葉を交わす事ができない。

（な、何故梓は何も言わないんだ？）

英樹は梓が何も言わない事に、不安を覚えた。

「あ、あの・・・ 最近来ないから、ちょっと不安でした。でも、憂が勉強しているんじゃないかって・・・・。」
しばらくして梓はそう言ってきた。

「えっ！？ ああ、まあ。」

すまないな。 ちゃんと行けなくて。」

突然話され、英樹は少し慌てる。

「いえ。」

でも良かったです。

何かあったんじゃないかってずっと心配だったんです。」

「そうか、ありがとうな。」

そう言っつて英樹は何気なしに梓の頭を撫でようとするが、

「クシュン！」

梓がくしゃみをしたので、手を引っ込める。

「しばらく止みそうもないし、ここからなら俺の家まで近いし走るか？」

「でも……。」

英樹の言葉に、梓が言い淀む。

それを察して、英樹は言った。

「そっか、ギターを雨にさらすわけにもいかないもんな。」

「あ、それもありますけど……。」

英樹先輩に迷惑が……。」

「前にも言ったように、迷惑だって感じた事はないって。」

英樹は梓の言葉を遮った。

「そ、それじゃあお言葉に甘えて……。」

「わかった。少し走るけど、疲れたら言えよ?」

「はい。」

——灘宮宅——

「それじゃあ、タオルを持ってくるから、少し待っててくれ。」

家に到着した英樹は、梓を玄関に残し、すぐにタオルを取りに行っ

た。

（ここが、英樹先輩の家。）

梓はしばらく周囲を見回した。

「そ、それよりブレザーを脱いでおこう。

うう、さすがにシャツまでビショビショだよ。」

そう言つて、梓がブレザーを脱いだ時、英樹がバスタオルを持って戻ってきた。

「梓、これを使・・・

っ!？」

英樹はブレザーを脱いだ梓の姿を見て、急に彼女から目をそらした。

「? どうしたん・・・。

あっ!？」

そんな英樹を見て梓は不思議に思っていたが、その理由が自分にある事がすぐにわかった。

そう、梓は雨のせいでワイシャツが透けていたのだ。

「み、見ました?」

梓が顔を赤らめながら聞いてくる。

「いや。見てないよ。」

英樹はそれ以上回したら折れるのでは、と思えるほど首を回してい

た。

「よ、良かった。」

梓が英樹の言葉に安心して息をつく。

「ああ、危うく天に召されるところだったよ。」

英樹は意味不明な事を言っていた。

「どういう意味ですか？」

梓が聞いてくる。

「いや、なんでも・・・。」

英樹はそれ以上何も言わなかった。

「それじゃあ、この傘、お借りします。」

「ああ、気を付けて帰れよ。」

梓がバスタオルを英樹に返した後、2人は別れた。

「さて、俺も勉強を再開するか。」

そう言つて英樹は2階に上がって行こうとして、ふと足をとめた。

（あれは、梓のブレザー？

忘れていつちまったのか・・・。）

英樹はそれを拾い上げ、綺麗にたたんだ。

（ポケットなどに私物がなければ、綺麗にして返すか。）

それを梓にメールで伝えた。

S i d e : 梓

（ん？ 英樹さんからメール？）

家に帰り、お風呂で体を温めたあと、携帯のメールを確認した。

「えっと？

「ブレザーを忘れたようだから、綺麗にしてから返そうと思ったんだが、

私物とかポケットに入れっぱなしじゃなければの話だけど。 どうする？」

って……。確か、生徒手帳はカバンに……。」

英樹からのメールを見た後、カバンを探り、生徒手帳を見つけ出した。

「よかった。 中に入れてある写真も無事だ。

……。 うん、そ、それじゃあ英樹さんをお願いしよう。」

写真を確認した後、梓はほんのり顔を赤らめながら英樹に返信した。
生徒手帳に入れてある写真は、軽音部員全員と、英樹のみが写っている写真だった。

S i d e : 梓 了

第6話 「再生」 了

第6話 「再生」(後書き)

てなわけで、英樹の想いが復活するというものでした。
それと、書いてて思ったのは、

漣とムギは梓の想いに気付いています、
本文には英樹の想いばかりですね。

やっぱりダメっぽ・・・orz

それから、瀧エリのファンの皆様、
勝手にオリキャラと結ばせちゃってごめんなさい。

では、次の7話で、また。

誤字脱字、感想、願います。

第7話 「ダイエット」(前書き)

どうもです。

デジ。ンストーリー ロ。トエボリユー。ヨンの発売日です。

まあ、そんな事はどうでもいいですね。

今更ですが、15000Hit、ありがとうございます。

とてもうれしいです。これからも精進致します。

では、7話をどうぞ。

第7話 「ダイエット」

けいおん！Fragment

第7話 「ダイエット」

「軽音部は今、大変危機的な状況にある。」

「ああ。」

「ええ。」

「すみませ〜ん、掃除で遅れまし・・・た？」

あの、どうかしましたか？」

律と漑、そしてムギが深刻に話している時に入ってきた梓は、不穏な空気を感じ取り、恐る恐る聞いてみた。

「梓、ちよつとこつちにおいで。」

律の手招きに恐怖を覚えながらも、梓はそれに従う。

「な、なんですか？」

「お前、夏休み前より（自主規制）センチ、お腹が出てきたぞ。その言葉に、梓は飛び上がりそうになる。」

「そ、そんな事ありません！」

「そうかな？」

あたしは以前よりなんだかふくよかになった気がするぞ。」

言いながら、律は梓のお腹周りに触れる。

「ヒッ!？」

「平気だと言っのならアレに乗ってみる。」

「えっ? ア、アレは!？」

「そう。 ただの体重計だ。」

(ただの!？ っていうか、何でそんなものが部屋に?)

「大丈夫よ、梓ちゃん。」

怖いのは、最初だけだから。」

「そうだよ、梓。」

律だけでなく、ムギと澪までもが彼女を体重計に乗せようとしている。

梓は先輩たちに気圧され、意を決して体重計に乗る。

「こ、これはっ!？」

「ほお、(自主規制)キロか。」

「以前測ったのはいつだ？」

「な、夏休み前です。」

「何キロ太ったの？」

「そ、それは……。」

ムギの質問に言い淀む梓だが、律が彼女の左肩に手を乗せる。

「ちなみに、私は、夏休み前と比べて、（自主規制）キロ太った。」

「り、律先輩!？」

「私は（自主規制）キロだ。」

「み、澪先輩……。」

「私は、（自主規制）キロよ。」

「ムギ先輩まで。」

全員が夏休み前と後でいくら増えたかを申告する。

「皆さん……。」

私は（自主規制）キロ増えました。」

「「「あ、梓^{ちゃん}……。」「」」

梓も申告し、4人が更に結束を固めた。

「やつほ、皆あ、お待たせ♪」

そこに唯が何も知らずに現れた。

「ムギちゃん、今日のおやつは何？」

「ごめんなさい、今日はおやつを持ってきてないの。」

「ええ！？ そんなぁ・・・。」

「唯！　しよげてないで、とつとと練習するぞ！」

「な、なんと！？」

「律ちゃんとは思えないお言葉が・・・。」

「黙らっしやい！」

「唯、お前にはわからんだろうが、
あたしたち女にはやらなきゃいけない事があるんだよ。」

「律ちゃん・・・。」

「つて、私も女だよ！？」

「つべこべ言わずにやるんだよ！
準備しろ！　唯！」

「は、はいー。」

「ん？　今日は珍しく練習開始が早いな。」
「しばらくして、英樹がやってきた。」

「よし、少し休憩するか。」

「私もうフラフラだよ。」

「唯ちゃん、しっかりして。」

「おやつを抜いただけじゃないですか。」

「あ、英樹先輩、遅かったですね。」

「零。悪いな、和と一緒に書類整理をしていてな。」

「お兄ちゃん。」

「うおっ！？　どうした？」

唯が涙目になりながら英樹に抱きつく。

「今日はおやつがなくて・・・。
それですつと練習続きなの。」

「別にそれくらいいいじゃないか。
それに、ここを卒業したらおやつなんて食べてる暇がないかもしれないぞ。」

「今から慣れておくのも悪くはないさ。」

「そ、そっか。それが律ちゃんの言ってた、やらなきゃいけない事だね！」

（「「そうだ！」なんて、言えない・・・。」
唯の信じきっている眼に、律は顔を反らす。

―次の日の軽音部―

「澪先輩、私、私……。」「

「ど、どうしたんだ？ 梓？」「

「実は昨日、部活を終えて家に帰ったら母が……。」「

「梓、今日はあなたの好きなタイ焼きを買ってきたわ。好きなだけ食べていいわよ。」「

「そ、それじゃあ、1つだけ。」「

「そう言っただけでしたら、止まらなくて……。」「

「なんつーベタな……。」「

「す、すみません。」「

「謝る事なんてないよ、梓。」「

「私だって、私だって……。」「

「おめえもかよ！？」

「律は泣いている澪と梓にツッコム。」「

「でも、こういう事ってよくあるわよね。」「

「まあ、それもそうだな。」「

「と、2人が話していると、扉が勢いよく開いた。」「

「今日のおやつは何でしょう！」「

扉を開け放った唯が、開口一番聞いてくる。

「ごめんなさい、最近、家から持ってこられるようなおやつが無くて・・・。」

「そっかー、それならしょうがないね。」

「（（（あっさり信じた！？）（（（

「贅沢言つもんじゃねえぞ。」

英樹は扉に問題がないか確認しながら言う。

「あれ？ 何で軽音部に体重計があるの？」

「さわちゃんじゃないか？」

「山中先生、何でそんなものまで・・・。」

「まあ、あの人ですからね。」

「おもしろそー。」

「私、乗ってみよう。」

「（（（おもしろそう！？ どこが！？）（（（

唯の発言に、梓たちは驚く。

「どうした？ お前ら。」

「い、いえ、なんでも・・・。」

「こ、これはっ!？」

「どうしたんだ? 唯!」

唯が驚愕し、皆が注目する。

「また少し痩せちゃった。」

「「「「・・・。」」」」

「お前は本当に太りにくいな。」

「お兄ちゃんも乗ってみてよ。」

「何で俺が・・・。」

「いいじゃん。」

唯に根負けし、体重計に乗る。

「以前とまったく変わらん。」

「どれどれー?」

英樹の測定が終わったので、皆で覗き込んで見る。

「（（（身長が170ぐらいなのに、体重が40キロ後半!?!）（（（

「それにしても、最近、4人ともなんか疲れてないか?」

「「「「そ、そんな事・・・。」」」」

英樹の指摘に、4人が視線を逸らす。

「そうか？　ならいいんだけど・・・。
頼むから倒れたりするなよ。　心配だからな。」

英樹は本気で心配の言葉を口にする。

そこへ、さわちゃんが入ってきた。

「皆、断食の体験してみない？」

「いきなり何言ってるんですか？　先生。」

「いや、ここ最近、ちよつとね。」

そう言って、さわちゃんが漣、律、ムギ、梓を見る。

「「「「っ！？」」「」「」

「4人がどうかしたんですか？」

「何でもないわよ。」

「断食って・・・。　おもしろそー。」

「唯、本当にそう思うか？」

「私、昔からそういう修行に憧れてたんだー。
座禅とか、滝に打たれたりとか。」

「よし！　軽音部の一環としてやろう！」

律の言葉に、皆が頷く。

「どこら辺に軽音部の一環になる部分があるんだ!？」

英樹のツツコミに、誰1人として反応する者はいなかった。

――断食体験 当日――

「それで、今回の断食はどれくらいの期間、やるんですか？」

「今から、明日の朝までの1日だけ。」

さわちゃんが説明しながら、割り当てられた部屋に行く。

「さて、この部屋よ。」

と言って、彼女が見せた部屋はかなり広かった。

「……。 1部屋？」

「ええ、1部屋よ。」

「何故？」

「友達と来る予定だったから1部屋しか借りてないのよ。」

英樹は部屋の入り口で突っ立っており、さわちゃんが説得している。

「それじゃあ、俺は帰ります。」

「待ちなさい。」

「な・ん・で！ 何で1部屋なんですか！」

「2人で行くのに2部屋取る訳ないでしょう！」

「そんな！ だったら何で先に言ってくれなかったんですか！」

「言ったら来なかったでしょう？」

「当然ですよ！」

「そんな思い切り答えなくても……。」

英樹とさわちゃんが言いあっているのを見た梓が嘆息する。

「他に空気がないか聞いてきます。」

「さっき私が確認したけど無いって言われたわ。」

「……。」

「別にいいじゃない。 たかだか1日程度、皆と一緒に寝たって。」

「嫌ですよ！」

「男の人と……一緒に……。」

澪が顔を真っ赤に染める。

「澪だってああなっちゃってますし。」

「問題ないわよ。」

「大いに有りでしょうが！」

「でも、私お兄ちゃんと一緒に寝るの久しぶりだなあ。」

「……。」

「寝たんですか？」

唯の爆弾発言に、英樹が冷や汗を大量に掻く。

「8年前だけどね。」

「何だ、ここ最近じゃあないのか。つまらん。」

幼少期だと知り、律は呟く。

「唯と寝てる時に抜け出そうとしては、

唯が俺の寝巻をいつも掴んでて抜け出せなかったし、何故か憂までもが……。」

過去を思い出しながら、英樹はうなだれている。

「大変だったんですね。」

梓が本気で同情する。

「でも、英樹さんなら何もしませんよ。」

「そうだな。」

「澪ちゃんも、構わないよね？」

「えっ！？　で、でも・・・。」

言い淀む澪を取りあえずほっとき、唯は梓に聞く。

「あずにゃんは？」

「まあ、別にいいですけど。」

（何でだっ！？　何でこうなったんだ・・・。）

英樹はがつくりしてしまった。

断食を開始して、数時間が経過し、夜になった。

「そうだ、寝る時の並びはどうする？」

唯が人生当てもんゲームをしながら誰ともなく聞いた。

「適当に選べばいいっしょ。」

「そうね。」

「それにしても・・・。」

「「「「「お腹空いた・・・。」」」」」」

「まだ始まったばかりよ。」

「だってー。」

「しょうがないじゃん。」

「まあ、これで少しは・・・ねえ？」

さわちゃんが遷、律、ムギ、梓を見る。

「」「」「っ！」「」「」

「ほえ？」

「何なんだ？」

「さて、唯ちゃんの言った並び順だけど・・・。
こんな感じでいいかしら？」

「先生が決めるんですか！？」

「英樹君が真ん中になるようにしたわ。」

「却下です！」

「しょうがないわねえ。」

それじゃあ、これでどう？」

「賛成」

唯が両手を挙げて喜ぶ。

「あずにゃんも、いいよね？」

「えっ！？ ま、まあ、いいですけど……。」

「いや、だけどな……。」

その並びは、英樹の右隣に唯、反対側に梓というものだった。

「英樹先輩は……嫌……ですか？」

言い淀む英樹に、梓が少し頬を赤く染めて、上目遣いに見てくる。

「お兄ちゃんは、あずにゃんを裏切るの？」

「いや、別にそういうわけじゃあ……。」

「わかったよ。」

英樹は諦め、従う事にした。

「よかったね、あずにゃん。」

「ま、まあ。」

「って、私じゃなくて、唯先輩の方が嬉しいんじゃないですか？」

「もちろん私も嬉しいけど、あずにゃんも嬉しいだろうなあって思
って。」

「どうしてですか？」

梓が唯に訊ねる。

「澪ちゃんから聞いたんだ。」

「あずにゃんが、お兄ちゃんの事好……もごー!？」

「唯！ 言わないって約束だろ！」

「ご、ごめん。」

漣は小声で唯に訴える。

「漣のやつ、唯にも話しちまったのか……。」

「律ちゃんも漣ちゃんから聞いたの？」

「ああ。 おもしろ……じゃない。」

「楽しそうだったから、協力してる。」

「言い直さなくてもいい気が……。」

「もう電気消すぞ。」

英樹は全員に確認してから、消灯した。

あれからしばらく、皆で遊んでいたが、やはり空腹には耐えられなかったためか、早々に寝る事にした。

「ねえお兄ちゃん、手、握ってもいい？」

しばらくして、唯が聞いてきた。

「いきなりなんだよ。」

「久しぶりにいいかなーって。
唯は笑顔になりながら言う。」

「久しぶりにつて事は、昔もあつたんですか？」

梓が反対側から聞いてくる。

「うん。私、小さい頃に怖い夢を見た時は必ずお兄ちゃんの手を握って寝てたんだ。」

お兄ちゃんの手、あつたかつたから、とっても安心できたんだ。

「

「そうなんですか・・・。」

その言葉を聞いて、梓は何かを考えだした。

「そつえばあつたな、そんな事。」

憂もよくねだつてきてたつけ。ん？」

そこまで話した時、唯が握っている手とは反対の手に誰かの温もりを感じた。

「梓？」

英樹が気になって梓の方を向くが、彼女はこちらに顔を向けようとはしなかった。

「憂が言つてたのが気になって、確認してるだけです。」

「・・・。好きにしろ。」

英樹はしばらく黙していたが、許可した。

（しかし何で、確認する必要があるんだ？

それにしても、梓の手もあたたかいな。

できれば俺はこの温もりと、梓と共にいたい。

でも、やっぱりまだ「好きだ」とは言えないんだよな。」

梓への想いを募らせたがしかし、未だに決心をつける事は叶わなかった。

英樹はいくらか考えた後、今は静かに寝る事にした。

（憂の言っていた通り、英樹先輩の手、あつたかいな。

この手の温もりがずっと一緒だったらいいのに。）

梓はそこまで考えて、顔を赤くする。

（そんなの無理だよね。

でも、何でもこんな事考えるんだろう・・・？

何故だか英樹先輩の事を考えると、ずっと一緒にいたいと思う。

離れたくないって考えてしまう。

だけど・・・それは叶わない夢だよね。 英樹先輩はもうすぐ卒

業しちゃうし。）

そう思って、梓は寝る事にした。

英樹への想いと、胸が締め付けられるような痛みには気付かないようにして・・・。

すれ違う2人の想いは伝わる事無く闇に消え、断食の体験は終了した。

しかし、それは薄たちのダイエットが終わったわけではなかった。

あれからしばらくの日数が経った。

「というわけで、今夜から泊まりで、私の家でパーティーをしようと思います。」

放課後の軽音部で唯が声高に宣言する。

「なにが「というわけで」なのかはわからんが。これはまた、えらくいきなりだな。」

「せっかくの連休なんだから皆でお泊りしようって話になって、で、それが今日からなの！」

「皆の都合は考えたのか？」

「ろちもん！ 皆にはあらかじめ確認したよ。」

「俺は確認されてないけど……。」

「お兄ちゃんには、サプライズって事で。」

「何故!?!」

「なんとなく。」

「おいおい……。」

英樹はうなだれる。

「大丈夫だよ、お兄ちゃん。」

憂が、「私たち妹の誘いなら断らないよ。だってお兄ちゃん、シスコ」・・・もがつ!？」

「頼むからそれ以上は言わないでくれ。というか、俺はそんなんじゃない。」

「えっ!？」 英樹先輩ってシスコじゃあなかったんですか!？」

「違う!」

律の発言に、英樹が猛反対する。

「「「違ったんですか。」」」
漣たちも驚いている。

「お前ら・・・。」

「お兄ちゃんがシスコじゃないって事は、私たちの事は大切じゃないって事!？」
唯が英樹の腕を振りほどいて言う。

「いや、別にそういう意味じゃ・・・。」

「英樹先輩、妹の事はどうでもいいみたいだぜ?」

「ヒドイですね。」

英樹の言葉を、律と梓が遮る。

「帰る。」

英樹はこれ以上話すのが面倒になり、荷物を持って部屋を出た。

「早っ！」

「っていうか、まずかったな、今は。」

「もう、皆のせいでお兄ちゃんが帰っちゃったじゃん。」

「唯先輩が呼べば来るんだから、いいんじゃないですか？」

「梓ちゃん、ヒドイわね。」

「それじゃあ、行こっか。」

唯が皆に言って、部屋を出る。

「「「「おじゃまします。」」」」

その夜、4人が唯の家に訪れた。

「皆、こっちこっち。」

「皆さん、どうぞ。」

「ありがとうね、憂ちゃん。」

「失礼します。」

「憂、こんなに大勢で大丈夫なの？」

「うん」

「何か手伝って欲しい事があったら言って。
力になるよ。」

「ありがとう、梓ちゃん。」

でも、手伝いなら平気だよ。 今助っ人が来てるから。」

梓は、憂の言葉に首を傾げた。

「誰だろう？」

「って、英樹先輩！？」

「あ？ 梓か。 料理中にあんま話しかけんな。」

「あ、すみません。」

「じゃなくて！ 何でここに居るんですか！」

キッチンで料理をしている英樹に聞く。

「何でって・・・。」

「唯が来てくれって言うから。」

「だったら、私たちと一緒に学校を出ればよかったじゃないですか。」

「いや、律とお前に発言を遮られた時に、

憂から安売りしている食材を買ってきて欲しいってメールが来た

から。

早く学校を出て、そのままスーパーに向かわないと安売りに間に合わなかったから。」

「そういう理由だったんですか……。」

「それでは皆さん、どうぞ遠慮なくお食べください。」

「いただきまーす♪」

「……い、いただきます……。」「……」

唯は明るく言ったが、他の4人は対称的に暗かった。

（こんなに食べたら、太ってしまう……。）
漣が頭を押さえる。

「おいしい♪」

あれ？ 律ちゃん、食べないの？」

「えっ！？ い、いや、食べるよ。」

「梓ちゃん、これもどうぞ。」

「あ、う、うん。」

憂から料理を分けられ、梓が戸惑う。

「さすが憂ちゃん、相変わらず料理上手ねえ。」

「さわちゃん！？ 何でここにいの！？」

「何でって・・・。」

「そりゃあおいしい料理を食べるためよ！」

「誇って言う事じゃないかと・・・。」

「そして澪ちゃんにコスプレさせるためよ！」

「絶対ヤダッ！」

「かわいいのに・・・。」

「相変わらず騒がしいな。」

英樹は皆のやりとりを横目に見ていた。

「唯、少し遊ばねえか？」

「何で？ 律ちゃん。」

「いや、なんか、量が多い気もするし。」

「確かに、作りすぎちゃいましたね。」

「そっか。 それじゃあ、少し遊ぼうか。」

唯がゲーム機を取り出す。

「お兄ちゃん、悪いんだけど、今から買い物に行ってきてもらっていい？」

夜遅くになって、憂が言ってきた。

「ん？ 構わないぞ。」

「えっと、これがリストだから、よろしくね。」

「はいよ。」

お前ら、こんな遅い時間まで起きてて平気なのか？」

「大丈夫だよー」 明日も休みだし。
唯がモニターを見ながら言う。

「あつそ。 んじゃあ、まあ、行ってくるわ。」

「・・・。 あ、皆さん、もしかして、ダイエットしてます？」
英樹が家を出た後、憂が唐突に言った。

「「「「っ！？」」「」」」

4人が驚いて憂を見る。

「すみません。」

でも、なんだか最近様子が変わって、お兄ちゃんが言っていたもので・・・。」

「してます。」

律ががつくりとうなだれる。

「そうだったんですか・・・。」

でも、皆さんの方法だと、リバウンドしてしまうかもしれませんよ？」

「・・・リバウンド！？」「・・・」
4人がビクツとする。

「だから、少しでもバランス良く食べながらも、少しだけ量を減らせば、

リバウンドしにくくなりますし、今の体型だったら痩せなくてもいいと思いますよ。」

「・・・^{ちゃん}憂・・・。」
4人が感動する。

「なーんだ、律ちゃんたち、ダイエットしてただけなんだ。言ってくればよかったのに。私も協力するよ。」

「よーし、それじゃあ、もう少し食べるか。」
律の言葉に、皆が頷く。

「戻ったぞー。」

「あ、おかえり、お兄ちゃん。」

買い物袋を提げた英樹を、憂が迎える。

「あれ？ 皆今も食べてるのか？」

英樹が食事を取る唯たちを見る。

「やっぱり、残すのはマズイかなあって思って。」

「フーン、でも、こんな夜遅くに食べると太るぞ。」
英樹の発言に、皆が固まる。

「お兄ちゃん！」

「えっ！？ な、なんだよ？」

憂のいきなりの大声に、英樹は驚く。

冒頭に戻る？

第7話 「ダイエット」 了

第7話 「ダイエット」(後書き)

突然ですが、次の8話と9話は主軸がスパイラルになります。

9話の最後で一応唯達が出てくる予定ですが、
本当にちよびつとなので、興味が無い方は、
暇つぶしに読むか、読まないで結構です。

さて、ここで悩んでいる事が1つ。

前回にも書いたかと思いますが、

次のけいおん！の小説を零ルートにするか、
それとも、アニメに沿った、恋愛無しにするか、
と言う事です。

では、次の8話、スパイラル主軸の物語までさようなら。

第8話 「開幕」(前書き)

20000Hit、ありがとうございます。
そのタイミングに似つかわしく無い話ですが、
気になる方はどうぞ。

第8話 「開幕」

けいおん！F r a g m e n t
第8話「開幕」

S i d e : |

蠟燭1つの灯りの中で、少年は写真立てを手にした。
そこには、幼い頃の自分と、死別した弟と妹の3人が笑顔で写っていた。

「もうすぐで終焉が始まるよ、志歩^{しほ}、真夜^{しんや}。」

少年は届かないとわかっていても、2人に告げずにはいらなかった。

何故なら、もうすぐ復讐が始まるからだ。

自分の愛おしい存在を、ただ危険だからという理由で殺された、彼の復讐が……。

「開始は3日後。

あの人が実験室に入れば、すぐに始まる。」

少年はそこまで言って、明日の学校の準備を始めた。
制服には、英樹たちのと同じ校章があった。

S i d e : | 了

―立体駐車場　2階―

「理緒、これはここでいいのか？」

「OKだよ。」

「香介、清隆から伝達。」

「ああ？　なんなんだよこんな時に。」

「アイズ、そっちはどうだ？」

「今終えたところだ。」

「だとよ、理緒。」

「了解。」

今は使われていない立体駐車場。

郊外からも程遠いそこで、ブレード・チルドレンと英樹は爆破の準備をしていた。

何故夜中に行うのかといういと、仮にも解体作業を行うのだ。

日中に行えば、否応なしにかなりの人に注目される。

そこで、夜中の内に準備をし、既定の時間に爆破させるのだ。

「これで全て設置完了だね。」

「よし、あとは・・・。」

英樹がそこまで言った時、何かが動いた。

「！」

「どこだ？」

「3階に続くフロアの中央の柱だな。」

亮子、香介、英樹がそちらに気を向ける。

3人の背後を、理緒とアイズが確認する。

「もしかして・・・。」

ハンターか？」

英樹は誰ともなく聞いた。

「・・・だろうな。」「・・・」

残りの4人が声を揃えて言った。

「勘弁してくれよ・・・。」

英樹がうなだれた、その時。

柱に身を隠していたハンターがいきなり発砲する。

「オイオイ。」

「いきなりだねえ。」

香介と亮子は散開して、ハンターに向かう。

「こつちもだよ。」

「面倒だな。」

理緒たちの方からも、どうやらハンターが来ていたようだ。

「今のところは2人か。」

「たった2人で来るか？」

英樹と香介は身を隠しながらこの先を予測した。

「とりあえず、ちゃっちゃと終わらせるぞ。」

「はいよ。」

銃撃が止んだその刹那、香介がハンター目掛けて麻醉銃を発砲する。

しかし、ハンターはそれを容易く避け、反撃しようとする。

「させるか！」

それよりも早く、英樹がハンターの銃を蹴り飛ばす。

「チッ！」

「ウオツと。」

だが、ハンターはガンマナイフを瞬時に取り出し、英樹に斬りかかる。

英樹は防戦一方に見えるが、相手が大振りなつたその瞬間、足を払う。

倒れた後、すぐにナイフを持っている手を強めに蹴った。

「危なかった。」

「英樹！ まだ来るよ！」

安堵の息を漏らした英樹に、亮子が注意を促す。

「とりあえず、そいつはコレで捕らえときな。」

「了解。」

亮子から渡されたロープでハンターを縛る。

「歩、他にハンターはどれくらいだ？」

「確認できる数は今のところ10人だな。」

「多っ！？」

「しょうがないな。」

今はやるしかない。」

言うが早いか、アイズが増援にきたハンターに麻醉銃を発砲する。

「てりゃっ!」

「亮子ちゃん、次は右側から回り込んで!」

「それにしても、ここ最近、ハンター共によく見つかるなあ。」

「同感!」

全員は次々にハンターを気絶させ、捕らえていく。

「皆、気をつけろ!」

1人、厄介な奴が来た!」

歩が珍しく、焦りの声を上げる。

「厄介な奴って……」

あんな風に大きい奴?」

英樹が闘っていたハンターを倒し、相手を見据える。

「みたいだな……」

香介もその男の体軀を見て尻込みする。

「ブレード・チルドレン……」

人間の未来を壊す、忌むべき存在……」

そこまで言葉を発した後、ライフルをアイズに向け、発砲する。

「チィッ!」

アイズはそれをすかさず避ける。

「コイツッ！」

「この！」

香介と理緒が麻醉銃で応戦するが、その身からは想像できないほど俊敏にそれをかわす。

「マジか・・・。」

「よくもまあ、あんなに俊敏に動くねえ。」

英樹は驚いており、亮子は毒づいた。

「しかし、これ以上アイツに構っていると、他のハンターがどう動くかわからないな。」

「そうだね。」

「ここは、接近戦で手早く仕留めたいところだけど・・・。」

チラッと、亮子が相手を見やる。

「あの巨体＋防弾チョッキを何枚か重ね着しているみたいだしね。」

「試しにアレをやってみるか。」

英樹は亮子に提案する。

「『兇叉』（きょうさ）ってやつかい？」

「ああ。」

英樹の目が真剣であることを亮子は見て、笑った。

「信じるつても悪くないね。」

「んじゃあ、歩、全員に指示を出してくれ。」

「わかった。」

「来ないのか？　ならばこちらから一気に制圧するぞ。」

中々姿を現さないブレード・チルドレンに対して、ハンターが痺れを切らす。

「今だ！」

歩の指示に従い、理緒が懐中電灯を向ける。

「ぐう！？」

突如、目に光を当てられたハンターが怯む。

その刹那、英樹がハンターの懐に肉薄し、3回攻撃する。

「やったか？」

香介が物陰から顔を覗かせる。

しかし、ハンターは何故か倒れない。

全員が相手の反撃に備えるが、その時、ハンターがその巨体を倒した。

「おおっ!？」

「すごい・・・。」

香介と理緒が驚く。

「それより、こんな奴をどうやって捕らえるんだよ?」

英樹が肩で息をしながら聞く。

「どうやら、兇叉は彼にとってはまだ荷が勝ち過ぎていたようだ。」

「清隆に任せりゃあいいんじゃない?」

「それはヒドイぞ、浅月。」

「うお!？ お、脅かすなよ・・・、清隆。」

香介がびつくりする。

「まあ、このハンターは私がなんとかしておこう。」

「ところで英樹くん、さっきの技って、どういうのなの?」

「ああ?」

さっきのは『兇叉』って言う、中国拳法の技だ。

貫通力の高い勁3発を両脇と腹部に打ち込む技なんだ。

一撃一撃では効かない浸透勁のラインを体内の一点に重ねること
で、

集中点の破壊力を飛躍的に増大することができる技だ。
これはガンマナイフの原理と同じようなもんだよ。
詳しくは某最強の弟子物語の28巻を読んでくれ。」

「最後のは何・・・？」

「一応、念のためにな。」

「それより、最近ハンターの動きが目覚ましいものになってないか
？」

「どうやら、情報がどこからか漏れているようだな。」

「ウォッチャーの中に裏切り者がいるかもしれないね。」

「フム、それも有り得るな。
それもこちらで調査する。 お前たちはもう戻れ。」

「それじゃあ、俺は兇叉使って疲れたから、お先。
明日も学校だからな。」

英樹は手をヒラヒラと振りながらその場を後にした。

3日後。

（清隆からは連絡無しか。結局、まだわからないのか。）

英樹は椅子に座ったまま身体を反らした。

「わっ！」

突如1人の少年が英樹を脅かそうと、いきなり現れた。

「・・・。」

「えっと・・・。」

英樹がまったく微動だにしないので、戸惑う。

「うわっ！」

「おわっ!？」

しかし、いきなり英樹が大声を発したため、少年の方が驚いた。

「アハハ。」

「英樹、てめえ。」

「たける 毅琉、そんなに驚く事ねえだろ？」

「いきなりやられりゃあ、誰でも驚くわ！」

彼の名は天狼てんろう 毅琉。たける

英樹とは2年生からの付き合いだが、話が合うため、とても仲が良
い。

「で、何か悩んでんのか？」

「そう見えるか？」

「俺には、な。」

「フーン。」

「「フーン」って……。
自分の事だろ？」

「別に悩んでないと言えば、悩んでないし。
悩んでると言えば悩んでるし。」

「なんだそりゃ？」

「どっちもどっちって事。」

そんな話を話していると、授業の始業チャイムが鳴った。

「おっと、それじゃあ、俺はこれで。」

「居眠りするなよ。」

（しかし、これ以上ハンターに先手を取られるのはマズイな。
俺が耐えられん。）

「起立。」

日直が教師が来たので号令をかける。

（とりあえず、今は授業だな。）

考えるのを止め、授業に集中する。

だが、英樹はもちろん知る由などなかった。

1つの復讐劇が幕を開ける事も、自分が武器を手にする日が近づいている事も。

（毅琉の奴、寝やがった……。）

授業開始から30分後、英樹が毅琉を見た。

（まあいいか。）

英樹が再びノートに板書を書き写そうとした時だった。

ドオンと轟音が響き、教室が、否、学校のほとんどが大きく振動した。

「な、何だ？」

「今のはいつたい？」

悲鳴やらが飛び交う教室で、英樹は至って冷静だった。

急いで窓から周囲を見回す。

すると、5階の教室から火が噴いていた。

「マジか……。」

「どうしたんだ!? 英樹!」

毅流が寄ってくる。

「あそこは……第2実験室だ!」

「第2実験室?」

「天狼、灘宮! 早く避難しろ!」

教師の声に、2人は従う。

「はい。おい毅琉、行くぞ……って……。
どこ行つた?」

英樹が辺りを見回すが、毅琉の姿はどこにもない。

昇降口から出て、クラスのメンバー確認をしている空迅^{くうじん} 怜奈^{れな}に聞
く。

「怜奈!」

「英樹！ どこ行つてたのよ！」

「悪い。」

それより、毅琉は？」

「天狼？ そういえば、まだ見てないけど。」

「くそっ！」

「あつ、ちよつと英樹、どこ行く気！？」

「第2実験室だよ！ 毅琉を探してくる！」

怜奈の制止を無視して、再び校内に戻る。

「毅琉！」

第2実験室へと続く廊下から叫ぶが、返事はない。

だが、第2実験室の入り口から、倒れている毅琉の姿をとらえた。

「毅琉！ しっかりしろ！」

「……。」

声をかけるが、全く反応しない。

（呼吸はしているが、気絶している上に頭部からの出血がある。
すぐに病院に搬送した方がいいな。）
瞬時にそこまで考え、急いで外へと出た。

そこで、怜奈が駆け付けた。

「英樹！」

「怜奈。」

「毅流は大丈夫なの？」

「早めに搬送した方がいい。」

毅琉を救急隊員に任せ、英樹は清隆に連絡した。

「清隆、この事件はお前が担当するのか？」

清隆が勤務する箇所は、この区域も担当していた。

「ああ。」

「そうか。」

事件が解決したら一報を頼むぞ。」

「わかった。」

会話を打ち切り、英樹は炎に包まれている箇所を見上げていた。

次の日、英樹は最初に病院を訪れ、毅琉に面会しようとした。

「面会謝絶か。」

残念ながら、会う事はできなかった。

特にする事もないので、今はなんとなしに現場に来ていた。

（やっぱり立ち入り禁止だよな。）

「KEEP OUT」のテープが貼られた壁を静かに見ていた。

「灘宮、ここは立ち入り禁止だぞ。」

「清隆。」

「とは言え、こちらはお前に聞きたい事があるのだが。」

「聞きたい事？」

「ああ。第一発見者はお前だからな。」

もう1人の女生徒、空迅怜奈には聞き辛いしな。」

「わかったよ。」

でも、俺には捜査権が無いんだから、情報を漏らすなよ。」

「残念ながら今回の事件はお前も否応なしに関わる事になるぞ。」

「何だよ？」

「その内話すさ。」

「ここが爆破事故のあった第2実験室だ。」

「フム。」

さて、被害者についてだが。

名前は一条^{いちじょう} 砲雅^{ほうが}。

桜ヶ丘高校の薬学の専攻教師。
死因はもちろん爆死だな。」

「爆発の原因は？」

「実験中の事故だろうな。」

「だったら俺が関わるのはありえないだろうが。」

「そうだ。」

気になる点は、この爆発物の成分結果だ。」

「どれ？」

清隆から資料を受け取り、目を見開く。

「これは……。」

「気付いたか？」

「この結果はどう考えても妙だ。」

「ああ。」

「本来は化学実験でやる事のない危険な組み合わせが検出されている。」

「デトネーションの原理だ。」

「なるほどな。」

「デトネーションとは、ニトログリセリンなどの爆薬に、強い打撃や急熱を加えると、激しい爆音を伴って爆発する現象の事だ。」

「となると、『内部の犯行』だろうな。」

英樹は静かに言った。

「外部の人間がこの実験室に入って薬物を入れ替えて、一条先生に対して、自分でデトネーションさせるのは難しいからな。」

「そうなるな。」

清隆は英樹の表情を見ながら言う。

「で、『神』のお前なら大体的見当がついているんじゃないか？」

「まあな。」

「誰だ？」

「いいのか？ 辛い結末になってしまいかもしれんぞ？」

「構わないよ。」

英樹は立ち上がりながら言った。

「こういう事にはとっと慣れておいた方がいいだろ？」

「無理はするなよ。」

それと、お前をこの捜査に付き合わせた本当の理由なんだが。」

「なんなんだ？」

「一条先生はハンターだ。」

「なんだとっ！？」

「これで犯人がかなり絞られるな。」

「犯人は、ブレード・チルドレンの可能性が高いって事か。」

「そうなるな。」

「そのブレード・チルドレンがこれで終わりにすると思うか？」

「どうだろうな。」

「可能性は無きにしも非ずって事か。」

アイズ達にわかっているブレード・チルドレンに確認は取っているんだろうな？」

「もちろんだ。

だが、未だに特定はできていない。

しかし、一条先生とここ最近頻繁に会っていたハンターは特定できた。

こちらは植物学の権威、二階堂教授だ。」

「だったら、会いに行こうぜ。」

「残念だが、今は出張中で無理だ。
あと10日は待たなければな。」

「長いな。
だがまあ、しょうがないか。」

英樹は溜息をついた。

10日後、自分が1人の少年と闘うとも知らずに。

事件の発生から11日後、英樹は毅琉が退院したと聞いて、彼の自宅へと向かった。

「あれ？ 英樹、どうしたんだ？」

「退院したんなら言えよって、言いに来た。」

「それだけのためにわざわざ？」

「いや、もう1つ。」

そっちの方が重要なんだけど・・・。」

英樹が言い淀むのを見て、毅琉は自宅へと誘う。

「入れよ。」

「すまん。」

「で、話つてのは？」

毅琉は紅茶を飲みながら聞いた。

「爆発事故の時の事なんだけど。」

「ああ、あの時のか。」

えっと、お前と窓から身を乗り出して、第2実験室が現場だと知った俺は、

一条先生が実験を行って聞いていたからすぐに向かったんだ。」

「なるほど。」

そつえば、お前と先生は仲良かったもんな。」

「ああ。」

で、現場に着いた時には既に手遅れだったから、
致し方無くその場を去ろうとしたら、2回目の爆発が起きて、そ
れで気絶したんだ。」

「納得。」

退院後の体調はどうだ？」

「すごくる快調さ。」

今日の午後にも出掛ける予定があるしね。」

「そっか。」

それじゃあ、準備する時間とかも必要だろうし、俺はそろそろ失
礼するわ。」

「おう。またな。」

英樹は毅琉の家を後にして、数時間後、歩と一緒に二階堂教授の自
宅へと向かっていた。

「鳴海、動いて平気なのか？」

「ああ、特に問題は無いよ。」

「そっか。」

つと、ここだな。」

「みたいだな。」

「そんじゃまあ、早速。」

ピンポンとインターフォンを鳴らす。
少しして、男性の声が聞こえた。

「はい。」

「すみません。連絡した、鳴海と灘宮です。」

「どうぞ。」

部屋は玄関を上がって右に曲がって、突きあたりの部屋です。」

「わかりました。」

行くぞ、英樹。」

「はいよ。」

二階堂教授の自宅に入り、指定された部屋へと向かう。

Side:—

二階堂教授が客人を部屋に招き入れた。

「すまないね、勝手に他人を招いてしまって・・・。」

「構いません。」

丁度いい方々のようですし。」

俺は笑った。

何しろ、教授と客人の会話が俺にまで聞こえ、相手を誰だか知ったからだ。

（相手は鳴海歩と灘宮英樹。

なら、計画に狂いは生じないはずだ。　続行するか。）

そこまで考えた時、俺は立ち上がり、教授に向かって懷から取り出した拳銃を向ける。

「な、なにを！？」

「理由など簡単な事です^{わけ}よ。」

だが、引き金を引く前に2人が入ってきた。

別に構わないのだが。

「お前っ！　何をしている！」

歩が入ってきて開口一番、叫んだ。

「っ！？　何でお前がここに……。

“ 毅琉 ” ！」

英樹の驚愕する言葉に、俺は、天狼毅琉は顔に笑みを浮かべた。

「遅かったな。　神の弟、鳴海歩。

そして、我が友、灘宮英樹。」

S i d e : 毅 琉 了

第8話 「開幕」 了

第8話 「開幕」(後書き)

・・・。

とりあえずごめんなさい。 英樹がもう、ね・・・。

つかこれ、別々で書いた方がよかったんでしょうね。

でもまあ、英樹にとって軽音部員という仲間が

特別であるという事になるべく引き立てるには

こうした方がいいかなあと・・・。

それも、これでちゃんと描ける自信は無いのですが。

今回は唯達が出てきませんでした、

次の話の最後にちよっぴりだけ出てきます。

けいおん!のゲーム、9月30日発売みたいですわね。
買うかどうか迷いますわ・・・。

第9話 「共に歩く未来（みち）」（前書き）

てな訳で、ブレード・チルドレン編が終了です。

そういえば、けいおん！！のOPで不思議に思った事が1つ。
さわちゃんと和、唯達が抱きついた時に反応なかったけど・・・。
マネキン？

どうなんでしょうか。 見間違いかな。

第9話 「共に歩く未来（みち）」

けいおん！Fragment

第9話 「共に歩く未来^{みち}」

「毅琉！ どうしてお前がここに・・・。
しかも、何で拳銃を二階堂教授に向けている！」

「簡単な事さ。」

毅琉は笑みを浮かべながら、自分の身体の肋骨のある部分を軽く叩いた。

「っ！ まさか・・・。
ブレード・チルドレン。」

「御明答。
そしてそのブレード・チルドレンが銃口を向ける相手は限られてくる。」

「ハンターか。」

歩が教授の方へとゆっくりと近づく。

ダン！

「っ！」

「ヒッ！」

毅琉が威嚇射撃を行い、歩を止める。

「ブレード・チルドレンがハンターを殺すのは至極当然の事だろ？
なのに何でそれを止めるのさ？」

「毅琉！ ブレード・チルドレンの未来は約束された！
鳴海の論理を信じる！」

「下らないね。」

あんなのは所詮幻想だ。

そんな事じゃあ、何も救えないし、変わらない。」

「ブレード・チルドレンが変わろうとすれば、変わる事を信じれば
叶うはずだ！」

「それでも俺は信じない道を選ぶよ。

先に逝ってしまった、妹たちのためにね！」

再び銃口を教授に向け、発砲する。

しかし、英樹が毅琉の腕を掴んで弾丸を逸らす。

「やっってくれるね！」

「うぐっ。」

毅琉は蹴りを入れて英樹を退けるが、歩が教授を避難させる。

「チッ！ っ！」

「止める！」

2人を追おうとするが、そこに英樹が立ち塞がる。

「フン、止められるかい？ 君1人で。」

「やってやるよ。」

「あつそ。」

なら、さつさと終わらせてやる！」

言いが早いのか、鋭い蹴りを繰り出す毅琉。

それを捌き、接近する英樹。

「拳鎚打ち。」

「おつと。裏拳！」

振り下ろされる拳を回転してかわしながら反撃する英樹だが、毅琉もあっさりとかわす。

「手刀横顔面打ち。山突き！」

（くっ！ 早い！）

次々と繰り出される技を、英樹は焦りを覚えつつも、なんとかかわしていく。

「やるね。」

拳をかわして距離を取った英樹を、毅琉は褒める。

（だけど、徐々に追い込んでいる。その内確実に仕留る！）

「こなくそ！ 双掌打！」

掌底を思い切り毅琉の顔面目掛けて放つ。

「遅いよ。」

「しまった！？」

だが、毅琉はそれをかわし、振り上げた腕を、鞭のように強く振り下ろす。

「喰らえっ！ 烏龍盤打！」

「っ！」

なんとか毅琉の攻撃を紙一重で英樹はかわした。

毅琉の技ははずれたが、フローリングを簡単に破壊した。

「なんつー功夫クシフだよ……。」「

英樹は毅琉の功夫の威力に愕然とする。

「よくよけたね。」

正直、仕留める自身はあったんだけどな。」「

「毅琉、どうして、俺と鳴海がここに来る事をわかっていたんだ？」

「それは、一条がウオッチャーのパソコンにハッキングして、清隆や、君たちの動きを見ていたのを、俺もハッキングして見ていたってわけだ。」

「ハッキングなんてできたのかよ・・・。」

「ハンターを殺すために必要なスキルを手に入れただけさ。でも、英樹が居ると思わなかったよ。映像を見た時は驚いたなあ。」

「毅琉、何故ハンターを狙う？」

「復讐だよ。」

「復讐・・・？」

「そう。妹の志歩と、弟の真夜。

2人は爆死した一条と、さっきの二階堂に殺されたんだよ！」

「くっ！」

再び猛攻を開始してきた毅琉の攻撃を、英樹はなんとかかわしていく。

走る拳、空を切る鋭い手刀、早く繰り出される蹴り。

英樹は徐々に追い詰められ、顔から、腕から、足から血がでる。

「どうした！ 君はそんな程度じゃないだろう！」

「生憎と不調なんでね。」

「そう。」

「なら、あつちを優先させてもらおうかな。」

「っ！？」

毅琉は突如、窓の方を示した。

そこには歩と二階堂教授がいた。

「させるか！」

「その行動はミスだね。」

毅琉に跳びかかった英樹だったが、それを逆手にとられ、窓を叩き割るように投げられた。

ガシャーン！

「英樹！？」

歩が驚く。

「さて、今度こそ死んでくれ！」

「止める！」

英樹は傷だらけの身体に鞭打ち、それを防ごうとし、弾丸が肩を掠める。

「ウツ……。」

「……。」

まさかそいつを庇うとはね、英樹。」

「英樹！」

「でも、君の頑張りは無駄なんだよ。」

言いながら、彼は時計を見た。

「まさか！？」「」

歩と英樹は1つの答えを導き出す。

「ウ、ウグウツ！？」「」

それと同時に二階堂教授がもがき苦しむ。

「教授の紅茶に毒を仕込んだのか！」

歩の指摘に、毅琉は笑う。

「そ。まさか、あっさり飲むとは思わなかったんだけどね。」

植物学の権威だつて言うから、植物毒は難しいと思ってたのに。」

「二階堂教授！」

「さて、そろそろ俺はこれで退散させてもらっよ。」

これ以上はマズイだろうからね。」

毅琉はそう言って駆け出し、その場を後にした。

「大丈夫か？ 英樹。」

「体中傷だらけだけど、ほとんどが浅いから平気だろ。」

毅琉が去り、教授が死亡した後、連絡を受けた清隆たちが到着した。

英樹は傷を手当されながら答える。

「毒は何が検出されたんだ？」

手当を終え、清隆に訊いた。

「どうやらトリカブトのようだな。」

「あいつ、どこからそんなもんを……」

で？ これからどうするんだよ？」

「向こうの出方を見る。」

「今の天狼がどう動くかはわからないしな。」

「あつそ。」

歩と清隆の推理には建前上、同意しておく。

だが、内心では毅琉は自分で止める事を決意していた。

（問題はアイツがどこに行ったかだけど、皆目見当もつかん。）

「それと、お前はしばらく傷の手当に専念しろ。
間違っても1人で止めるなど考えるなよ?」

「考えてたら?」

「いたしかたない。勝手にしろ。」

清隆が大仰に溜息をつく。

「一応、何かあったら連絡はするけど、
なんらかの決着がついていても怒るなよ。」

「ああ。」

英樹は立ち上がり、自宅へと戻った。

3週間後。

学校は休校を止め、再び授業が始まったが、そこに毅琉が姿を現す事は無かった。

毅琉が動かない事が英樹には退屈に感じられた。

はやる気持ちもいつの間にか消え失せ、勉強や軽音部に精を出していた。

しかし、そんな日々にも唐突に終わりが訪れる事を、英樹はわかっていた。

帰宅してしばらくの後、英樹宛てに小包が届いた。

なんとなくだが、差出人の名前から中身の予想がついた。

「拳銃かな？　お、当たった。」

差出人は天狼毅琉。

中身は拳銃と紙切れが1枚。

「決着は近いな。」

えっと、「9月26日の（日）、午前11時に桜ヶ丘タワーの最上階。」か。」

英樹は予定を反芻しながら別の紙に書き写す。

「拳銃は必ず持ってこい。」か。」

その後、清隆に連絡しようかと思ったが、当日にすればいいやと思い直し、止めた。

「それに、これは俺と毅琉の戦いだからな。」

9月26日、午前9時30分。

清隆と歩にメールを済ませ、目的地に向かう。

しかし、ここから桜ヶ丘タワーまでは歩いても30分で到着する。

何故彼がこんなにも早く家を出たかと言うと・・・。

（やっぱり、監視してた奴らが追ってくるか。）

拳銃が届いた次の日からだっただろうか。

自宅の周りが何人かの人間に囲まれていた。

（ハンターかな？

俺の跡をつけて毅琉を殺すつもりだろうな。）

そう考え、英樹は人気のない裏路地へと入って行った。

（追ってきたのは3人か。

顔を見る限り、アレは一条とコンタクトを取っていた連中で間違いなさそうだな。）

英樹は物陰に潜みながらハンターを監視した。

（ま、ほっとしても平気だろ。

どうせ、タワーに辿りついても毅琉は『殺せない』からな。）

そして、物音を立てずにその場を去った。

（残り60分か。

で、ハンターの方は多分6人ぐらいかな。）

そこに、毅琉から電話が入った。

「よう。まだ生きてるか？」

「もちろん。あれから犯行もしてないよ。」

電話の向こうの毅琉は上機嫌だった。

「悪いけど、 unnecessary 客人も中に入るかもしれないから。」

「ハンターにつけられてるのかい？」

「ああ。何人が片付けてから行くかもな。」

「そう。無茶しないようにね。」

毅琉が不安げに注意する。

「そいつはどうか。
でも、なんとかなるんじゃないの？
お前に鍛えられたし。」

「二階堂の所での事か。」

「あんなので成長できれば苦労しないよ。」

「そうかもな。」

「待ってるよ。
必ず来てくれ。」

「わかってる。
遅れても怒るなよ。」

それを最後に、英樹は電話を切った。

「さて、行くか。」

S i d e : 毅琉

毅琉は静かに切れた携帯電話を見ていた。

「必ず来い。そして、俺を『殺せ』、英樹。
俺はその為に君を呼んだんだからな。」

2人が再開するまで、残り45分と迫っていた。

Side：毅琉了

「グハアッ！」

「頼むから俺らの邪魔をするのは勘弁してほしいぜ。」

英樹は跡をつけてきていたハンターを確認できた奴らは全員伏した。

（後は頼むぞ、清隆、歩。）
連絡を済ませ、目的地へと向かった。

――桜ヶ丘タワー――最上階――

「そんな事をして、自分の未来は見えるのか？ 毅琉。」

「無理だろうな。」

毅琉は双眼鏡から目を離し、英樹の方へと振り向く。

「10時45分か。少し早かったな。」

「それでもハンターを相手してたから遅刻するかと思ってたんだが。」

「お前はいつでも遅刻は許さないってやつだったな。」

「だったっけかな？」

「そうだよ。」

毅琉はソファーに座しながら手元にあった資料を英樹に渡した。

「お前、こんな『特異体質』を持ってたなんて、知らなかったよ。」

「ある意味、お前らブレード・チルドレンと同じだ。」

「最近はいつ頃発症したんだ？」

「えっと、中学3年生の時かな。」

「どうやって止めたんだ？」

英樹は資料を適当にばらまき、欄干に寄り掛かった。

「悠斗に気絶させてもらった。」

「それが一番手っ取り早いから。」

「それ以外に方法は？」

その質問に、英樹は自分の頭部に拳銃を当てた。

「殺されるしかないかな。」

「それはまた、辛いな。」

「で？ お前は どうして 一条と二階堂を殺したんだ？」

「前にも言った通り、妹と弟の復讐さ。

俺は生まれて間もなく、ブレード・チルドレンの血統を欲しがった親に捨てられたんだ。

それを拾ってくれたのが、犬星家^{けんせいけ}だよ。」

「そして、その犬星家には、既に2人の男女のブレード・チルドレンがいた。」

「その通り。」

妹の志歩と、弟の真夜がね。

2人はブレード・チルドレンの運命に対して、恐れなど抱いてはいなかった。

だけど、俺が10歳の時に2人は理科の実験中の不慮の事故という扱いで死んだ！」

「お前が殺した2人のハンターによって。」

「そうだ！

志歩たちの身体からは毒物が検出されたのにも関わらず、その授業で扱ったものだから不注意で死んだと誰もが思っ、そのまま捜査は打ち切られた。

その後、犬星家は俺に危険が及ぶのを避ける為、天狼家へと養子にだしたんだ。」

「なるほどな。」

お前の事が対して知られてなかったのはそのためか。」

「でもまあ、俺は教授共を殺せた。」

高校生になって一条を見た時は驚いたよ。

しかも二階堂は教授にまで成り上がった。

まったく、世の中も最悪だよな。」

俺たちブレード・チルドレンの事は国家機密なんて……。
これじゃあ、訴えられるものも訴えられないじゃないか。」

毅琉は顔に微笑を浮かべながら言った。

「そうだな。理不尽すぎる。」

英樹もそれに笑った。

「でも、だからこそあいつのを傷つけても平気なんだよな。」

そう言つて、エレベーターから1人の男が出てきた。

「ハンターか。全部片付けて無かったのか。」

「途中で連絡を受けた奴じゃないか？」

2人は至つて冷静だった。

「どつちが片付ける？」

「じゃんけんで決めるか。」

「「じゃんけん・・・ぽん。」」

グーとチョキ。

英樹の勝利だった。

「良かったよ。」

もしお前が勝ってたら、殺させないためにお前を邪魔したかもな。

「

「それは有り得るかも。」

英樹、苦しくなったら言えよ。 バトンタッチだ。」

「へいへい。」

左手をヒラヒラと振りながら、ハンターと対峙した。

「小僧、我らの崇高なる計画を邪魔立てするか！」

「三下が吠えるなよ。」

それに、人殺しの邪魔をして何が悪い？」

相手の眼力にまったく臆する事無く、英樹は言った。

「だいたい、お前らだって俺の邪魔をしてくれたじゃねえか。」

その報復だよ。」

「ブレード・チルドレンは忌むべき存在だ！

私は、ブレード・チルドレンがいずれ世界を壊すかもしれぬ存在だと確信している！」

「馬鹿馬鹿しいな。」

俺は、例えどんな人間だろうと変われると信じている。
やはり相容れぬか。 毅琉を殺したければ、俺を殺せ。」

「よかるう。 覚悟っ！」

ハンターが勢いをつけて英樹に突っ込む。

突きを、蹴りを簡単にいなし、反撃する。

「そらあっ！」

「ウグウ。」

「へえ、英樹、以前よりやるようになったね。」

傍観していた毅琉は楽しそうだった。

「一気にケリつけるか。」

そう言つてハンターから蹴りが十分届く所まで距離を取る。

（ん？ 何の変哲もない猫足立ちだな。）

毅琉は英樹の足の形を見る。

（ふむ、右足の蹴りか。）

ハンターもそう考え、注意をしていた。

「喰らえ！」

そして、英樹が『左足』で蹴った。

「グハッ！」

「左足！？」

毅琉が驚く中、ハンターは倒れた。

「エレベーターに乗せて最下層に送るか。」

倒したハンターをエレベーターに無造作に入れ、毅琉に向き直った。

「さて、毅琉。次はお前と決着をつける。」

「その前に、さっきの蹴りを教えてくれないか？」

「ああ。『ガマク』か。」

あれは古流空手の身体操法の1つだ。

脇腹の普段使わない箇所の筋肉を使って、体の重心のみを自在に変化させて、

相手に間違った流れを読ませる方法さ。」

そこまで言って、英樹は毅琉の方を向いた。

「こんな風にな！」

軸足と思っていた右足で蹴りが迫ってきたため、毅琉は咄嗟に顔を庇ったが、

そこに攻撃が当たる事は無かった。

「何で止めた？」

「俺たちの戦いにこんな事をする意味がないからな。」

「そっか。」

「じゃあ、俺の頼みを聞いてくれるか？」

「何だ？」

神妙な顔つきの毅琉に、英樹は訊いた。

「俺を殺してくれ。」

「は？ 何で俺がそんな事しなきゃなんねんだよ。」

「簡単なことだ。」

俺が生きている限り、ブレード・チルドレンに未来は無い。

俺はスイッチが入りかけなんだよ。」

「……。」

英樹はただ黙しているだけだった。

「教授を2人も殺したんだ。」

しかも、神の弟の理想論に俺は反している。

さっき言ったようにブレード・チルドレンに未来は無い！」

「アッハハハ。」

毅琉の話を聞いた英樹は笑った。

「何がおかしい！」

「いや、だってお前が変な事を言うから。」

「変な事？」

「そうだよ。スイッチが入りかけなんてのはあり得ない。」

「何でそんな事を言いきれる！」 毅琉は憤慨する。

「お前が教授2名を殺したのは復讐心からだ。そうじゃなきゃ、俺を殺しているはずだぜ。だって、二階堂の件の時、お前は銃を所持していたのに、俺に対して使わなかった。」

それに、武術で確実に討てる時に討たなかった。それが証拠だ。」

「それは絶対じゃない！」

しかし、毅琉はそれを頑なに認めなかった。

「確かにな。」

でも、そう考えないと遣る瀬無いんだよ。俺はお前に生きていて欲しいんだからな。」

そう言って、毅琉が手渡そうとしていた銃を返す。

「だが、それでもお前が死ぬという未来を選ぶのなら……。」

英樹は懷から小包で届いた銃を静かに取り出し、毅琉に銃口を突き付けた。

「お前も銃を抜いて俺を殺し、お前の未来を勝ち取れ。 天狼毅琉！」

「確かにその方がいいかもな。
それに、いくらお前でも・・・無抵抗の相手は撃ちにくいだろう
しな！」

毅琉が英樹の補足した箇所から飛び出し、英樹に向けて発砲する。

だが、英樹はそれをかわして、柱の陰に隠れて毅琉に発砲した。

その行動を先読みしていた毅琉も英樹とは対角に位置する柱に身を
潜めた。

（英樹、やっぱりお前は優しいな。

だからこそ、この決定的な場面でも迷いが生じる。

俺を生かしておけば、いつかは俺のスイッチが入り、

大切な仲間であるアイスたちブレード・チルドレンに対して反対
勢力が増幅する。

だが、それを避けるためだと言ってもお前は俺を殺せない。

それが、お前の敗因だ。

お前が俺を殺せざるを得ない状況は簡単に作れるんだぞ。

俺に迷いは無い。

俺はもう、生きている事に疲れたからな。）

しばしの静寂の後、毅琉が言った。

「行くぞ、英樹。

勝負だ！」

言うが早いか、偶然にも2人は互いに相手に向かって柱から飛び出
した。

そして、毅琉は英樹に向かって自分の銃を放り投げた。

（英樹、迷いのあるお前に丸腰の俺は撃てない。それが最大の隙だ！

お前は銃を投げた俺に対応できない！

その隙に俺は間合いに入ってお前の銃を奪い取る！

楽勝・・・・・・・・。）

だが、英樹はそんな毅琉の考えを打ち崩す行動を取った。

それは、自分も銃を投げるといふ事。

「っ！」

毅琉は驚きながらも英樹の投げた銃を取り、英樹もまた、毅琉の投げた銃を取る。

しかし、突然の事だったために、毅琉は体勢を崩し、立て直した時には英樹が銃を自分に向けていた。

無論、毅琉も英樹の方に銃口を向けている。

「な、なんでお前まで銃を投げてんだよ！」

「お前が投げると読んでいたからだよ。

お前は俺に迷いがあると考えて、意表を衝く行動に出るはずだ。それこそ、自分の銃を相手に投げるなんてのをな。」

「だったら、このまま撃ち合ってみるか？」

お前は俺を殺せないから、銃を弾き飛ばすぐらいしかできないだ

ろうけど、

それよりも先に、俺はお前を殺すぞ。」

「だとしたら、このゲームは俺の勝ちだな。

毅琉、お前は俺に殺されたかったはずだ。

俺が死んだらその望みは潰えるぞ。」

「仕方がないさ。

お前が俺を殺したくはないと言った以上はな。

英樹を殺したら、俺も死ぬよ。」

「って事は、このまま早撃ちか？」

「そう。

俺の勝ちだ、英樹。」

毅琉は不敵な笑みを浮かべた。

「残念ながら、それは甚だ見当違いだ。

毅琉、お前の負けだよ。」

冷酷な顔つきで、英樹はポケットから何かを放り投げた。

毅琉の背後で金属音がいくつかが響いた。

「俺が投げた銃は、予め最初の1発以外は抜いてあるんだよ。

お前が俺を殺す事はできない。」

毅琉は驚愕し、銃の引き金を引いた。

だが、それが発砲される事は無かった。

「そ、そんな・・・。」

「俺の勝ちだな。」

毅琉、素直に鳴海に従ったかどうか？」

「だが・・・。」

「確かにお前の言うとおり、いつかはスイッチが入るかもしれない。でも、それまでの人生ぐらい、笑って生きろよ。」

死ぬなんて事はいつだってできる。だが、死んだら何もできない。」

俺はもう死ぬからあとはよろしく、なんて卑怯じゃねえか。」

「そう・・・だな。」

「諦めそうになったら連絡しろ。」

助けられたら助けてやるよ。俺らは仲間だからな。」

毅琉を立ち上がらせてエレベーターで1階に下りた。

そこには、歩とアイズがいた。

「そんじゃあ、コレの処理と、毅琉の事頼むわ。」

英樹はアイズに銃を手渡し、歩に毅琉を任せた。

「毅琉、俺だってあの特異体質を持っていながら笑って生きているんだぜ。」

お前も俺に負けないように笑って生きろ。」

「どうしてそこまで笑っていられるんだ？
軽音部の子たちが支えてくれているからか？」

「そうだ。」

あいつらや直衛たちがいるから、俺は笑っていられる。
前を向いていられる。 特異体質とも戦っていける。」

「俺にはそんなやつがないよ。」

「何言ってるんだよ。」

さっきも言っただろ？ 俺たちは仲間なんだぜ。
辛い時は支えてやるよ。

これからは、他のブレード・チルドレンもいるしな。」

それだけ言って、英樹はその場を去った。

外に出てしばらく歩くと、誰かが英樹の名前を呼んだ。

後ろを振り返ると、そこには唯と憂がいた。

「買い物の帰りか？」

「うん。 お兄ちゃんは？」

「適当に街をぶらついているだけ。」

「何か買えばいいのに。」

「そんなのに使う金はない。」

まあ、それは置いといて、お前らの荷物、持ってやるよ。」

英樹がそう言うと、唯が自分の後ろに向かって言う。

「皆ー、お兄ちゃんが私たちの荷物を持ってくれるって。」

「皆？　って、まさか……。」

「……助かります」「……」

そこには、漣達軽音部員の全員がいた。

「やれやれ……。」

ほら、持ってやるからととと帰……。」

「よっしゃー！」

英樹先輩が持ってくれるから、もう少し他の店に行こうぜ。」

「名案ですね。」

「どこがだっ！」

「次はあそこのお店に行こうか。」

「そうね。」

皆が和気藹々としている姿を見て、英樹は微笑する。

「英樹先輩、どうしたんですか？」
梓がひよっこり顔を出す。

「いや、俺は幸せなんだなって思ったただけだ。
お前らと一緒に居られるのが、今の俺の一番の幸福だからな。」

（毅琉、俺は幸せ者だ。

こいつらと一緒に居られるだけでな。

俺達人間は皆『欠片』だ。必ず誰かと繋がる形を持っている。
だから、お前も・・・一緒に歩いて行こうぜ。）

第9話 「共に歩く未来^{みち}」 了

第9話 「共に歩く未来（みち）」（後書き）

今回の終わりの部分で英樹が言っていた箇所が、彼にとつて特別な仲間というのをさしています。

ようやくけいおん！FのFragmentの意味を出せました。

さて、今回出てきた英樹の特異体質の件は、次回明かしますが、はつきり言つて、意味不明の所が……。 （オイ

次は、英樹と梓の仲が少しだけですが、多分進展する・・・はずです。

それともう1つ。

ただいま別のけいおん！を執筆中なのですが、

途中でどころどころ変更した部分があるので、

ちよつと奇妙な箇所が残つてゐるか。

最初は澪ルートの予定だったのですが、このけいおん！Fを書いてる時、「恋愛、無理じゃね？」って事で、（多分）諦めました。

では、次は修学旅行＋特異体質編です。

第10話 「互いの支え」(前書き)

てなわけで、修学旅行＋特異体質編です。

無理矢理こじつけたのが丸わかりなのですが、スルーしてやってください。

誤字脱字の指摘、感想、お待ちしています。

今日は大学の試験なのに勉強してねえ・・・orz

第10話 「互いの支え」

けいおん！F r a g m e n t

第10話「互いの支え」

S i d e : 英樹

（ここは・・・、いたい。）

俺は今、雑沓する街中にいた。 いや、俺だけじゃなかった。

俺以外には、中学校の制服を着た男女が5人いた。

（悠斗、怜奈、直衛、深鈴・・・。 それに、俺？）

皆が英樹と関わりのある者たちだった。

（この先の展開はわかる。 またか・・・。）

英樹はこの夢を幾度となく見てきた。

だが、これは決して夢の中の話に収まるものではない。

5年前に、この夢を見るきっかけがあったのだ。

（そうだ。 この後俺たちは不良に絡まれて、皆でそいつらを撃退したと思った。）

そんな事を思い出しながら、流れを見守る。

正にその通りに夢が展開される。

（だが、俺が相手をしたやつだけ起き上がって、俺を攻撃してきた。その時、深鈴が俺を庇って倒れた。

俺のせいで・・・。

だから俺は許せなかった。弱い自分が、深鈴を攻撃したアイツらが・・・。

そんな風に怒りに捕らわれて、アイツらを思うままに攻撃した。）

夢の中の英樹もその通りに攻撃をしていく――

（その後、直衛が俺を止めてくれた。）

――はずだった。

しかし、夢の中の英樹を止めるものは誰もいなかった。

（止める！ それ以上続けたら・・・。）

俺は自分を止めるために叫ぶが、声はまったく響かない。

そして、夢の中の英樹は不良を殺した・・・。

俺は自分の手を見た。その瞬間、自身の手が血潮に染まった。

「ハアハア・・・。」

夢から覚めた英樹は汗を随分とかいていた。

再び自分の手を見るが、血は全くついていなかった。

（よかった・・・。）

夢なのだから当たり前なのだが、どうしても確認しておきたかった。

（頭、イテエ・・・。）

頭痛に英樹は頭を押さえ、リビングに行き水を飲む。

（ここ最近、随分と頻繁にあの時の夢を見る機会が増えているな。）

床に倒れ込むようにして座る。

（こんな特異体質とブレード・チルドレンに関わっているのに、
梓を想うなんていいのか？）

英樹の迷いが再び全身にくまなく広がっていく。

（今、考えててもしょうがないか。）

そう思い、自室に戻って睡眠を再開する。

S i d e : 英 樹 了

次の日の軽音部で、英樹が皆に聞く。

「さて、来週から俺ら3年生は京都に修学旅行に行くんだが、皆、何か欲しいお土産はあるか？」

英樹の言葉に、唯がバツと手を挙げる。

「ハイッ、金閣寺の置物とかがいい！」

「マジ？ あたしてつきり食い物を頼むかと思った。」

「ムッ、失礼だよ律ちゃん。」

私、律ちゃんほど食い意地悪くないよ。」

律の言葉に、唯がエヘンと胸を反らす。

「ホォー、そうかそうか、この口がそんな事を言うのか。」
それを聞いた律は、これみよがしに唯の頬を伸ばし、遊ぶ。

「ひよ、ひよへんふあふあい〜（ご、ごめんなさい〜）。」
唯は涙を流しながら許しを請っている。

「それで？」

律は何か要望はあるのか？」

英樹はムギが淹れてくれた紅茶を持ちながら聞いた。

「ん〜、英樹先輩が選んだものなら何でも。」

「それが一番困るんだけど……。」

「だって……。」

あたしたちも何があるかわからないですし・・・。
「律は苦笑いしながら言う。」

「じゃあ、唯以外は生八つ橋でいい？」
英樹が皆を見回しながら言う。

「……OKです。」「……」
頬をさする唯以外がそう答えた。

「や、やっぱり私も八つ橋。」

「わかったよ。」

――新幹線内――

「氷狩、お前は何枚チェンジ？」

「2枚。」

修学旅行1日目。

新幹線で移動中に、英樹の班はトランプでポーカーをしていた。

ちなみにメンバーは英樹を含めて5名。

氷狩凍夜、あらいたけふみ騎龍直衛、あまぎりゆうと新井嶽文、あまぎりゆうと天霧悠斗＋英樹だ。

「ショウダウン。」

「「ツープア。」」

「悪い、スリーカード。」

「だあー、ざけんなよ。」

また嶽の勝ちかよ。」

凍夜が頭を抱える。

「20本勝負の総合計勝利数で1位は嶽文、2位は直衛、3位は俺（悠斗）、4位は直衛か。」

「次何する?」

直衛は英樹以外に聞いた。

「そろそろ到着するから、支度しようぜ?」

「だな。凍夜、英樹を起こしてくれ。」

「へーい。ほら、英樹もつすぐ到着するから。」

「うーん? ああ、悪い。」

英樹は寝ぼけ眼をこすりながら伸びをする。

「誰が1位になった?」

「俺。」

「嶽、運がいいよな」

凍夜がぼやく。

「一生分の運、使い切ったんでないの？」

英樹が嶽文を振り返る。

「さすがにそれはねえよ。」

嶽文がせせら笑う。

「わかんないぜ？」

悠斗が脅しめいたように嶽文の肩に手を乗せる。

「止めろっ！ お前が言うとしゃレにならん。」

「ん？ 直衛、メールか？」

英樹は話に混ざらない直衛を見て聞いた。

「ああ、エリから。」

「フーン。 やっぱりメールぐらいは来るよな。」

「何だ？ 軽音部からは来てないのか？」

「ああ。」

「寂しいな。」

直衛は意地の悪い目をして英樹を見た。

「まさか。」

英樹は嘲笑った。

「これぐらいで寂しいなんて。」
が、英樹の顔が翳る。

「寂しいなんて……。」

「元気出せよ。」
しよぼくれる英樹を、直衛が励ます。

「オーイ、英樹、直、行くぞ。」

凍夜が出口に向かいながら2人に言う。

「了解。」

――金閣寺――

「ホントにスゴイなあ。」

悠斗が金閣寺を見て、感嘆の息をもらした。

「あの金、持って帰ってえ。」

凍夜が犯罪めいた事をもらす。

「凍夜、向こうで金粉買えよ。」

「いいよ、嘘だから。」

「知ってるけどね。」

嶽文が凍夜と話している横で、直衛は写真を撮っていた。

「あれ？ 英樹は撮影しないのか？」

自分と同じように、写真好きな英樹が全く撮らないのを見て、直衛は聞いた。

「ん？ 金閣寺は飽きた。」

「飽きた！？ 何で？」

「夏休みの間にいろんな所に行ったからな。そのついでに沢山撮影したからな。」

「いいなあ、バイク持ちは。」

「お前もいい加減免許取ればいいのに。」

――華蔵の滝――

「悠、あそこで修行してきてくれ。」

凍夜が悠斗を滝の最下層に連れて行くこととする。

「凍夜、怜奈を連れてどこに行くんだ？」

英樹が凍夜に聞く。

「あんたは人を確認しないで何をしようとしてんのよ!」

怜奈が凍夜を蹴り飛ばす。

「グハアッ!？」

「まったく。英樹、今の蹴り、どうだった？」

「殺すならもう少し、素早く蹴れ。」

「そんな事すると思う?」

「少し。」

英樹の言葉に、怜奈が蹴りを、突きを繰り出してくるが、それとごとくかわす。

「このお!」

「お前ら何やってんだ?」

そんな様子を見た悠斗が訊ねてくる。

「悠斗! いつ怜奈と入れ替わったんだよ!？」

凍夜がガバツと起き上がる。

「え? お前に手を掴まれた時に、近くにいた怜奈と……。」「悠斗が説明する。」

「怜奈も断ればよかったのに。」

英樹はまだ怜奈の攻撃をかわしながら言う。

「しょうがないでしょう、急な事だったんだから。それより、少しは私のために喰らいなさいよ。」

怜奈は更に速度を上げてくる。

「反撃していいのならな。」

「ダメっ!!」

「直衛、止めなくていいの？」

嶽文が英樹と怜奈が争っているのを見ながら直衛に聞く。

「あの2人を止められるのは、お前と悠斗ぐらいじゃねえか。」

「メンドイ。」

嶽文の言葉に、直衛は携帯でメールを打ちながら言った。

「おいおい。」

嶽文は呆れた。と、英樹と怜奈の間に、男女が1人ずつ入る。

「怜奈、もう止めなよ。」

友人の閃堂深鈴せんどうみすずが怜奈を止める。

「深鈴うゝ、英樹がイジメル。」

「はいはい。」

「3年1組、移動するぞ。」

担任の声が響き、全員移動を開始する。

―旅館―

「疲れた。」

部屋に到着して開口一番、悠斗が言った。

「もう寝るか。」

英樹も悠斗同様に、倒れ込むようにして、部屋に入った。

「なかなか広いな。」

嶽文は2人を踏むようにして部屋に入る。

「ムギユ。」

「ウグ。」

「嶽、殺すなよ?」

「ウグウ。」

「ムギユウ。」

「とか言いながらお前も踏むなよ。凍夜。」

「やめろ……。」

「お前が一番強く踏んでるんだが・・・。」

「え？ 何か問題でもあった？」

（ウゼエ。）

白ける直衛を2人が睨む。

「それで？ この後はどうするんだ？」

直衛がお茶を注ぎながら誰ともなく聞いた。

「19時まで自室で待機だよ。」

英樹が携帯を確認しながら答える。

「嶽、何か暇つぶしある？」

「凍夜こそなんかないの？」

「悪い、何も。」

「俺も無いや。ん、メールだ。」

「いいな、彼女持ちは。」

「そうだろ。けど凍夜もいると思ってたんだけど。」

「いないのって、俺と、悠と、英樹だよな。」

言いながら、凍夜が2人を見る。

「ZZZ、ZZZ、ZZZ、ZZZ」

悠斗はぐっすりと寝ており、英樹は携帯を閉じているところだった。

「ハハハ。」

嶽文が乾いた笑い声を出す。

「英樹、お前は彼女とかつくんないのか？」

「ああ？ メンドイ。」

凍夜の問いかけに、英樹は平淡に返した。

「メンドイだと！？ 想像してみろ、彼女とのハッピーライフを！
いつも笑いの絶えない会話、華やかな姿、優しき微笑み、
どれをとってもスバラシイじゃないか！」

「そんなのはただの理想だよ。」

凍夜の力説とは対称的に、英樹は冷ややかだ。

「それに、彼女なんて仲が良くなきゃ、ただ金を使わせる兵器みたいなもんだよ。」

「お前はホントにツマンナイ奴だな。」

「よく言われる。」

「言われるなら自重しろよ……。」

嶽文が呆れていた。

「英樹、結局軽音部員からはメールは？」

「0件。」

「だったらこっちからメールしたら？」

「何て送ればいいかわからん。」

「オイオイ……。」

直衛は苦笑いした。

「ところで、さっき「彼女をつくるのがメンドイ」って言ったけど……。」

軽音部の子とは付き合わないって事か？」

直衛が不思議がって聞いてくる

「そういうわけじゃないよ。」

できれば、仲の良いやつと付き合いってだけ。」

英樹はそれだけ言って、横になった。

Side: 梓

「そつえば梓ちゃん、お兄ちゃんにメール送った？」

放課後、今日は軽音部が休みなので、憂と一緒に帰っている。

「ううん。」

何てメールすればいいかわからなくて……。」

「そっか。」

澪さんたちも同じような事言ってたなあ。」

「英樹先輩からは？」

「ううん、1通も来てない。」

憂が苦笑いする。

「でも、多分お兄ちゃんも梓ちゃんたちと同じ気持ちなんだと思うよ。」

「えっ？」

「だからなかなかメールがこないんじゃないかな。」

「そっか。」

憂の言葉に、梓が納得する。

（今夜にでもメールしてみようかな……。）

Side: 梓 了

「それじゃあ、明日は7時起きだからもう寝るわ。」 悠斗が早くも布団に潜り込む。

「まだ21時だぞ。」

凍夜が悠斗を揺する。

「ウゼエッ！」

「グフッ!？」

いつまでも揺すってくる凍夜を、悠斗は裏拳で仕留めた。

「英樹はまだ寝ないのか？」

「もう少し星を見てるよ。」

「それじゃあお先に。」

直衛と嶽文もそれぞれ床についた。

「……。」

電気を消した後、英樹は1人夜空を見上げ、明りの小さい星を見つめた。

その時、携帯が静かな闇を斬り裂くように着信音を奏でた。

（メールか。）

携帯を開いて、相手を確認する。

梓だ。

（「夜分にメールしてすみません。
特に話題が無いのですが、先輩がどうしてるかなと思ってメールしました。」）

（……。少しは楽になったな。）

英樹は自嘲しながら返信した。

（俺ももう寝るか。）

梓に返信して、床に着いた。

Side：梓

「あ、英樹先輩からだ。」

メールを送信してから、返信があるまで、梓は少し不安だった。

（この時間に送って返信がくるかな……。）
そう思ったからだ。

「えっと、

「まだ寝てなかったから大丈夫だよ。

梓が1番最初に俺にメールをくれた。

他の部員たちからはまだ。

まだ1日目だけど、梓に、皆に会えなくて少し寂しい気もする。
早く会えるといいな。」か。

寂しい……。私も、なんだかそんな気がするな。」

夜空を見上げながら、梓は呟いた。

Side：梓　了

——軽音部部室——

「というわけで、今日お兄ちゃんが帰ってきます。」
唯がバツと拳手する。

「だから私たちが最寄駅まで迎えに行こうと思います！」

「……はい？」

唯の言葉に、4人が首を傾げる。

「あの、何でそんな事を？」
梓がオズオズと唯に聞く。

「だって、お兄ちゃん疲れているだろうから、私たちで出迎えれば
きっと元気が出るよ。」

唯は目を輝かせながら力説した。

「逆に余計に疲れさせるんじゃないか……。」
漣が言うが、律が提案してくる。

「よしっ！ 澪と梓のダブルネコミミメイドで出迎えよう！」

「何でっ！？」

澪と梓がおもいきりツツコム。

「いいわね。」

ムギがニコニコ顔で律の案をすすめる。

「そうとなれば早速準備よ！」

「さわちゃん！？ いつからここに！？」

「細かい事は気にせずに準備するわよ！」

「絶対いやだー！」

2人は部室から全力で逃げようとする。

「唯ちゃん、律ちゃん、ムギちゃん、捕らえなさい！」

「ラジャー。」

数分後・・・。

「やっぱりお兄ちゃんを迎えるんだったら、普通の服がいいね。」

「よかった。」

漣と梓は同時に息をついた。

「見たかったのにな、2人のネコミミメイド。」
さわちゃんが残念そうな目をしていた。

「英樹さんもお喜びになると思いますよ。」
ムギが微笑みながら言う。

「でもまあ、さすがにあの格好で行くのはな・・・。」

「だね。」

それじゃあ、1度家に戻ってから、駅で合流しよう。」

唯が言って、全員は解散した。

――駅前――

「おい、みんなあー。」

唯が漣たちのところにやってきた。

「ギリギリだな。言いだしつぺなのに。」
律が嘆息しながら言う。

「えへへ。」

あれ？ あずにゃんは？」

唯が辺りを見回す。

「梓なら先に迎えに行ったよ。」

漣が駅の出口を指しながら言った。

「それじゃあ、全員揃ったし、私たちも行きましょう。」
ムギが言って、皆歩き出した。

（英樹先輩、どこかな？）

梓は3年生の団体から少し離れたところにいた。

と、英樹の姿を見つける前に、誰かが梓の肩を乱暴に掴んだ。

「キャツ!？」

「ねえ、君かわいいね。俺たちと遊びに行かない？」

「っ!？ 嫌です！ 放してください。」

「やめろっ!!！」

梓が不良に捕まるが、そこに英樹がすぐさま現れた。

「ああん？ なんだてめえは？」

「その子の先輩だよ。」

「ふうん、助けたかったら実力でやってみせろよ！」
不良の1人が英樹にパンチをしてくるが、英樹はそれをあっさりとかわし、反撃する。

「山突き！」

英樹は空手の技で相手にたたらを踏ませ、遠ざける。

「野郎！」

2人目がかさずくるが、英樹は敵の攻撃がくる前に、蹴りをいれる。

「後ろ回し蹴り！」

今度は蹴りだけ。

「ちくしょう！」

梓を捕まえていた男は、ナイフを持って、英樹に迫る。

だが、それをかわし、相手のわきにあて身、手を持ちかえて小手返しを喰らわせ、そのまま倒れ込む相手の後頭部に手刀打ち、同時にひざで一撃を加える。

「梓、大丈夫か？」

英樹はあっさりと3人を倒し、梓に駆け寄る。

「英樹・・・先輩・・・」

梓は今にも泣きそうだった。

だが、背後から何かが迫ってきた。

「っ！？　しまっ・・・」

「てめえ！！！」

だが、英樹は梓を遠ざけた時、ある事を思い出す。

（これは……。『あの時』に似ている。）

それが、英樹の回避するという判断を遅らせる。

そして、不良の1人が両拳で英樹の後頭部を殴った。

「ひつ、英樹先輩！」

梓の叫びが、駅にこだまする。

「へ、へへへ。これでくたばれてんだ。」

不良が笑いながら英樹を見下す。

が、英樹は起き上がった。

だが、その目に生気がないように梓には思えた。

「おい、直衛。アレ、マズイぞ。」

悠斗が英樹を見て言う。

「『トラウマ』か！」

直衛は急いで英樹のもとへ駆けだす。

「。。。。。」

英樹は一番近くにいた不良に迫る。

「く、来るな！」

不良は近くにあった鉄パイプを振り回すが、英樹はそれをかわしながら、一気に懐に入り込み鳩尾に肘を思い切り叩き込んだ。

そして、膝をついたままの者を、上から踏み付ける。

それに逆上した残りの1人が英樹に迫る。

「野郎っ！」

その相手の攻撃を利用して後ろに回り込み、そのまま回転しながら手刀を思い切り後頭部に見舞う。

「死ねえっ！」

「危ない！」

が、間一髪のところでは悠斗が不良を助ける。

「英樹、もう止める！」

直衛は英樹を押さえ込む。

「放せ！ てめえっ！」

「落ち着け！ 大丈夫だから。」

英樹はなおも暴れるが、悠斗が英樹の後頭部に一撃を与え、気絶させる。

「ふう。 とりあえず病院に運ぼう。」

「ああ。」

直衛の言葉に、悠斗が頷く。

「じゃあ、不良の方は私たちでやっつくわ。」
怜奈の言葉に2人は任せた。

「君たちも来るかい？」

直衛の視線の先には、梓と唯たちがいた。

――病院――

「先生、英樹はどうでしたか？」

医師が出てきて、開口一番、悠斗が聞いた。

「問題なかったよ。 今日1日安静にしていれば、明日には目を覚
ますだろう。」

その医師の言葉に、全員が安堵した。

「それじゃあ、俺は翔影さんに連絡してくるから。」

「ああ、頼むよ、悠斗。」

悠斗は英樹の兄、翔影に連絡するため、外に出た。

「さて、悠斗が連絡している間に、英樹の事を話しておこうか。」

そう言つて、直衛は椅子に腰かけた。

向かい側に、梓たちが座する。

「えっと、まず先の英樹のアレは、トラウマからくる、一種の精神暴走みたいなものかな。」

「トラウマ・・・ですか？」

「うん。」

直衛は静かに語りだした。

「英樹があんな風になったのは、今からだいたい5年前かな。」

当時、英樹は俺と悠斗、それに怜奈と深鈴って女の子と一緒に武道を習つてて、

全員が不良に絡まれた時、それぞれ相手をして倒したと思ったんだけど・・・。

英樹が相手をした奴がしぶとくてね。背後から英樹を襲つたんだ。

けど、それを深鈴が助けて、彼女は出血して気絶してしまったんだ。」

直衛はそこまで一気に話し、息をついた。

「助けてくれた深鈴が自分のせいで・・・。」

その時、『スイッチ』が入ってしまったんだ。」

「さっきみたいな、暴走のスイッチですね。」

澁の言葉に、直衛は頷いた。

「ああ。その後はさっきのように相手を殲滅しようとする。」

今回は多分、このトラウマと意識の混濁によってスイッチが入ったんだと思う。」

「「「「「。」「「「「」

直衛の言葉に、全員がうなだれる。

そこへ、悠斗と1人の男性が現れた。

「翔影さん！」

直衛が立ち上がり、彼を迎える。

「話は悠斗から聞いたよ。

それで、英樹は？」

「今は落ち着いて寝ているそうです。」

「そうか。」

だが、翔影は浮かない顔をしていた。

（あいつは、たとえ不良側に非があっても、傷つけた事にまた苦しむだろうな。）

前回もそうだったように・・・。

「ところで、彼女たちは？」

「ああ、軽音部の子たちです。
英樹の後輩。」

翔影の質問に、直衛が答える。

「初めまして。

灘宮英樹の兄、翔影です。」

5人が背筋を伸ばす。

「そんなに固くならなくて結構ですよ。」

翔影が苦笑いする。

「実は、あなた方に頼みたい事があるんですが。」

「何でしょうか？」

漣が訊ねる。

「今回の件で、英樹から離れないでやってほしいんです。」
と翔影は言った。

「というと？」

梓が翔影の言葉を聞いて、何故かと訊ねる。

「英樹がこの体質を言わなかったのは、多分あなた方と一緒に居たいと思ったからです。」

あいつは、皆さんがこの体質を恐れて離れて行くのが怖いんです。
昔から、表には出しませんが、寂しがり屋なものですから。」

その翔影の言葉に、「もちろんです。」と、梓が即座に答えた。

「私はこれからも英樹先輩と一緒にいます。」

「梓……。」

澪が彼女を見る。

「私もっ！ お兄ちゃんとは一緒にいます。」
唯が続き、律たちもそれに倣う。

「ありがとう、皆さん。」

翔影は彼女たちに深々と頭を下げた。

――病室――

昨日から1日経ち、時刻はお昼にさしかかろうとしていた。

「英樹先輩……。」

梓が英樹の顔を静かに見つめる。

その時、英樹がうつすらと目を開けた。

「あず……さ……?」

「英樹先輩!」

「すまなかつたな、皆。」

こんな大事な事、黙ってて。」

英樹は静かに言った。

「ホントですよ。 どうして言ってくれなかったんですか!?!」
梓が涙目になりながら声を荒げる。

「ん? ああ。」

怖かつたんだ。 この体質を話して、皆と一緒に居られなくなる
のが……。」

英樹は俯く。

その理由は正に、翔影の言った通りだった。

「でも、そんな心配はもう必要ないですよ。 英樹先輩。」

「え?」

律の言葉に、英樹がきよんとする。

「私たちは、これから英樹さんと一緒に居ますよ。」
ムギが笑顔で言う。

「皆……。」

ありがとう。」

英樹もまた、皆の笑顔に答えるように、顔をほころばせた。

「それじゃあ私、何かお飲み物を買ってきます。」

しばらくの談笑の後、ムギが席をはずす。

「ムギ、私も行くよ。」

そう言って、漣も立ち上がった。

その後、2人が戻る前に、唯と律が「トイレに……。」と言って病室をあとにした。

「……………」

急に2人きりになって、英樹と梓は困っていた。

だが、英樹がふとあることを思い出し、梓を自分のベッドの近くに来るように言った。

「何ですか？」

「昨日の事なんだけど……。」

英樹は少しずつ話した。

「昨日、不良に捕まって助けた時、泣きそうだったよな？」

英樹の言葉に、梓が顔を赤くする。

「そ、そんな事ありません！」

梓の言葉にしかし、英樹は取り合わなかった。

「あの後、泣いたか？」

「え？」

英樹の言った事がよくわからず、首を傾げる。

「だから、俺が運ばれた後、ちゃんと泣いたか聞いているんだ。」

「い、いえ。泣いて・・ません。」

梓が昨日感じた恐怖を思い出し、目に涙を浮かべる。

それを見て、英樹はほほ笑んだ。

そして、愛おしい彼女を静かに抱きしめた。

「辛い事を思い出させてゴメンな。」

でも、一応、泣いた方がいいと思って。

あとで、俺のいない所で泣かれても助けに行けないからな。」

「ヒック、グスッ。」

梓はいつの間にか嗚咽を漏らしていた。

「今は俺がここにいて、お前を支えられる。」

涙をこらえるのもたまにはいいさ。

でも、その内こらえるのが当たり前になって、俺みたいに泣けなくなるぞ。

辛い時に泣けないなんて、それ以上に悲しい事はないだろ。」

その優しく、暖かい言葉に、梓は涙が枯れるまで泣いた。

英樹はそんな彼女を支えるように、何も言わず、ただ静かに抱きしめていた。

第10話 「互いの支え」了

第10話 「互いの支え」(後書き)

鮮血

「てなわけで、恒例の座談会です。」

英樹

「恒例って……。」

何でいきなりこんな事するんだよ？」

鮮血

「97%のノリで。」

英樹

「面倒な奴だ。」

鮮血

「さて、今回の終わりで英樹と梓、急接近でしたね。」

英樹

「そうなのかねえ。」

鮮血

「あの雰囲気で告白しないなんて……。」

他の作者様の主人公達に何か言われるよ？」

英樹

「しょうがないだろ。」

あそこは梓を安心させるのが最優先だと思ったんだから。

それより、トランキライザー(精神安定剤)の部分は全部消した

のか？」

鮮血

「まあ、読者さんに上手く伝えられるか不安だったからね。そんなことより、いよいよ終局が見えてきたよ。」

英樹

「そうなのか？」

鮮血

「うん。」

残り通常回を3話やって、番外編と特別編で
けいおん！Fは終了します。」

英樹

「で、次回は？」

鮮血

「文化祭編です。」

ちなみに、恋愛要素は0%。」

英樹

「終局が近いのに！？」

鮮血

「あれは好きな話だし、やらないとその次の12話に繋がらないんだ。」

それでは、これで。

誤字脱字、感想、お待ちしてます。」

第11話 「文化祭」(前書き)

鮮血

「けいおん!!」の17話の梓の歌詞、もう最高でした。
律ちゃんから書き直し令が出ましたが、アニメで歌って欲しいです。

それでは今週も参りましょう」

唯 澪 紬 梓 鮮血

「け」「い」「お」「ん!」「Fragment」

律

「1 2 3 4!」

OP ♪♪♪♪

英樹

「こんな始まり方聞いてないし!」

第11話 「文化祭」

けいおん！F r a g m e n t

第11話 「文化祭」

英樹の特異体質（精神暴走）の件から数日後。
英樹が退院してすぐの事だった。

「そうか。 まだ唯の風邪は治らないか。」

英樹は憂から聞いた情報を反芻した。

「うん。 文化祭まで間に合うかどうか・・・。」
憂は暗い顔をする。

「まあ、間に合う事を願うしかないな。
わかった。 ありがとうな。」

英樹はそれだけ言って、憂と別れた。

——軽音部部室——

放課後、漣たちは部室で文化祭の練習に励んでいた。

「梓、なんとか行けそうか？」

「はい、大丈夫です。」

澪の言葉に、梓が頷く。

「じゃあ、英樹先輩がくるまでもう少し練習しよう。」

と、そこへ、

「やつほ。」

唯が現れた。

「風邪は大丈夫なの？」

ムギが心配そうに唯の顔を窺う。

「あつ、風邪か。ゴホッゴホッ。」

唐突に咳をだす。

「わ、わざとらしい・・・。」

「まあ、それなら大丈夫って事だよな。」

梓と澪がその様子を見て苦笑いする。

「よしっ！ 唯も来た事だし、最初からあたしたちのみのところを通してやるぞ。」

律の言葉に、皆が頷く。

♪♪
♪♪

「ジャーンと。」

英樹の参入する曲目以外を弾き終わる。

「「あれ?」「」

漣、律、ムギが不審がる声を出す。

「どう思う?」

漣が2人に聞く。

「わからないけど・・・。」

「たまたまじゃないか?」

ムギと律も、困惑の色を隠せない。

「もう1度やってみよう。」

♪♪
♪♪

「・・・。」

唯・・・。」

「は、はい。」

漣が唯につめよる。

「完璧でありすぎる！　今までこんな感觸無かったのに！」

「唯のリズムキープが正確すぎるんだ！

何があつた？」

漣だけでなく、律までもが唯につつかかる。

「な、何も・・・。」

唯は困惑している。

「月が・・赤いわ・・・。」

ムギは空を静かに見上げている。

しかし、梓だけは違った。

「いいじゃないですか。

完璧に合っているのならそれで。」

その言葉に、皆が冷静になる。

「そうね。」

「なんか混乱しちゃったよ。」

「律さんも紬さんも気にしすぎだよ。」

「「えっ？」」

だが、その言葉に場の空気が一気に変わる。

「律さん？」

「紬さん？」

唯はしまったと思って、焦る。

「あ、い、いや、その……。」「

そこに決定的な追撃がくる。

「もういいんじゃない？ 『憂ちゃん』。」「
さわちゃんだ。」

「いたのかよ！

って、「『憂ちゃん！？』『

皆が驚く中、さわちゃんが立ち上がる。

「皆の目はごまかせても、私の目はごまかせないわよ。

唯ちゃんより、胸が大きいじゃない！」「

さわちゃんが唯の姿をした憂に詰め寄る。

「な、なんのことやらさっぱり……。」「

慌てる憂に、さらに梓が追撃してくる。

「じゃあ、私のあだ名、言ってみて。」「

「あ、あ、あずさ2号！」「

焦燥にかられた憂は突拍子もない答えを述べる。

「に、偽物だ。」

全員が納得したが、憂はまだ頑なに否定する。

「い、いえ、私は本当に平沢唯です。」

体がまだ、本調子じゃないから・・・。」

「遅れてゴメンな、皆。」

そこへ英樹がやってきた。

「お、お兄ちゃん。」

憂は英樹を味方につけようとしたが、

「あれ？ 憂、何でお前は唯の格好をしてるんだ？」

「「「あつさりとみやぶった!？」」「「「」

憂はがつくりとうなだれた。

「ごめんなさい。」

シユンとうずくまる憂が謝る。

「それにしてもそっくりだったな。まったく気付かなかった。」

澁の言葉に、ムギ、律、梓が頷く。

「英樹さんはどうしてわかったんですか？」

全員が簡単に納得した。

「このまま唯には休んでもらった方がいいのか……。」

「オイ。」

律の冗談とも思えない発言に、漣がツツコム。

「やつほ。」

そこへ扉を開けて入ってきたのは、紛れもなく唯だった。

「うお、激しくデジャヴ！」

律が立ち上がり、唯のそばへ駆け寄る。

（律、デジャヴの使い方、違うんじゃないか？）

英樹は思うが、口にしないでおく。

「ごめんねえ、心配かけちゃって。」

皆も唯の周りに駆け寄る。

「大丈夫なの？」

ムギの心配そうな顔に、唯が気丈に振る舞うが、

「うん、さっき起きたらね、なんか調子良くて、それで……。」

フエックシ……！」

唯が大きなくしゃみをする。

「きたねえ……。」

ああ、あたしにもティツシュ。」

「あつ、ギー太！　こんなところにいたんだね。」

唯がふらつきながらギー太のそばにより、持ち上げようとするが、
「うっ、お、重い……。」「

そう言つて唯はギー太に潰された。

倒れた唯をソファーに寝かせ、ムギと憂が静かに見守る。

「熱、全然下がってないじゃないか！」
漣が唯の方を見る。

「ごめんね。
やっぱり本番は私抜きでやって。」

唯が皆を気遣つて言う。

「嫌です。」

しかし、梓は肩を震わせながら言った。

「唯先輩抜きでやるくらいなら、出場を辞退した方がマシです！」
そう言つて、踵を返した梓を、漣が止める。

「梓、待つて！」

いつもと違う大きな声で呼び止められ、梓は立ち止った。

「唯、本番まで軽音部にくるな。」
漣の言葉に、英樹が頷く。

「そうだな。」

本番までに完璧に風邪を治して、皆で本番を迎える事。
それまで、諦めるなよ。」

「梓もちゃんと練習しとくように。」

唯がいなかった時のためじゃなくて、今後のためにも、な。
漣は静かに梓に言った。

「今は私たちにできる精一杯の事をやろう。」

——文化祭 当日——

「……………」

「唯ちゃん、こないね……………」

ずっと窓から外を見ていた梓に、ムギが静かに言う。

「メールにはなんて……………」

「絶対間に合わせてみせるって……………」

「……………」 おさらいしとくか？

唯抜きの演奏も。」

律がスティックを弄りながら言う。

しかし、梓は頑なにそれを断った。

「嫌です！」

やっぱり唯先輩抜きの演奏なんて……。」

その時、扉が開いた。

和だ。

「どうしたの？」

「……。」

和の言葉に、しかし誰も何も答えなかった。

「軽音部、出演者、全員準備完了、と。」

「和……。」

和のはからいに、零は目を見開いた。

和はほほ笑みながらとある昔話をしてくれた。

それを聞いた律たちは意味がよくわからなかった。

「えっと、つまり？」

「夢中な事があると、唯はそれだけしか見えないって事。」

「本当に、昔から変わってないな。」

和の話に、英樹も思う所があるのか苦笑した。

「だから、きつと風邪の事なんか忘れちゃうわ。」
と、その時再び扉が開いた。

「「「「あつ……。」「」」」」

皆が期待を込めてそちらを見た、が、
「ウーイス。」

「空気読めえっ——！」

現れたのはさわちゃんだった。

「な、何よ？ 突然……。？」

私は今まで、皆の衣装を改良してたつていうのに……。」「

さわちゃんはいきなり怒られ、不機嫌になる。

（（（（（そのやる気を他にまわして欲しい……。）））））

5人は呆れた。

「そしてこれがその衣装よ！」

さわちゃんが振り向いた先にいたのは、
「どうも〜。」

衣装を着た唯がいた。

「唯!？」

「来てたのなら真っ先にここに来い!」
驚いたままの律をよそに、漑が怒った。

「じ、ごめんなさい。

あずにゃん？」

一瞬凹むが、涙を懸命にこらえる梓を見て、心配する。

「最低です。

皆、こんなに心配してたのに。

本当に最低です……。」

そう言つて、梓は唯に背を向けた。

「ちゃんと埋め合わせしてやれよ？」

梓が一番お前の事を心配してたんだからよ。」

英樹の言葉に、唯が驚く。

「あずにゃん……。」

唯は梓に近づき、背後から彼女を抱きしめた。

「心配掛けてごめんね。

私、皆と一緒に精一杯頑張つて、最高のライブにするからね。」

「……。

もう、特別ですよ。」

そう言つて梓が振り返った瞬間、唯は梓にキスをしようとしていた。

バチンッ。

そんな音が部室に響いたあと、唯の左の頬に手形があった。

「ホントに、私の事心配してくれてたの・・・？」
唯が英樹に聞く。

「もちろん。」

今のはただの照れ隠しだろ。」

「……………」

梓はわずかに頬をほころばせていた。

「皆、そろそろ時間だから移動して。」

和の言葉に、皆が従うが、

「あれ？ ギー太は？」

唯の言葉に、律が答える。

「何言ってたんだ？」

憂ちゃんが持つて帰ったぞ。」

唯がハツとする。

「そ、そうだった！
どうしょ。」

「仕方ないわね。」

私のギターを使いなさい。」

慌てる唯に、さわちゃんが自身のギターをさしだす。

「さわちゃん・・・。」

でも私、ギー太以外のギター弾けない・・・。」

「・・・だろうな。」「」

唯の発言に、律と漑、ムギは至極当然のように頷く。

「いたしかたない。

俺のバイクで・・・。」

「2人乗りは校則で禁止されているわよ。」

「すまん、唯。走って取ってこい。」

――平沢宅――

「あつた。

行くよギー太!」

和に何分ほどおしているかを聞いたあと、唯はギターを取りに来た。

（そういえば、入学式の時もこの道を走ったっけ。）

唯は走りながら去年の自分を思い出す。

（「なにかしなきゃ!」って思いながら、「なにをすればいいんだろう?」って思いながら、

「このまま、大人になっちゃうのかな?」って思いながら。）

唯は息も切れ切れだが、決して走る速度を遅めることはなかった。

（ねえ、『私』。『あの頃の私』、心配しなくてもいいよ。

すぐにみつかるから！ 私にも出来る事が！ 夢中になれる事が！

大切な……。大切な……。大切な場所が！）

やっとの思いで唯が会場に駆け込んだ時、丁度1曲目が終わった所だった。

そして、唯はステージに上った。

「皆、ホントにごめんなさい……。

よく考えたら、いつもいつも、ご迷惑を……。

こんな、大事な時にまで……。」

「帯くらい、ちゃんと結べ。」

英樹は泣きじゃくる唯の帯を静かに結んだ。

「皆、唯が大好きだよ。」

律は笑顔でそう言った。

「皆さん、改めまして、放課後ティータイムです。

今日は私がギターを忘れてしまっってこんな事になってしまいました。た。

目標は武道館とか言っって、私たちの軽音部は始まりました。

ギターを買うために皆でバイトしたり、放課後に皆とお茶したり、ムギちゃん家の別荘で特訓したり、入部してくれる1年生を探したり、

脇目も振らずに練習に打ち込んできた、なんてとても言えけど・・

・。

でもここが、今いるこの講堂が、私たちの武道館です！
そこまで喋って、唯は一息ついた。

「最後に思いつ切り歌います！ 『ふわふわ時間』！」
そう言って、彼女たちは各々の軽音を紡いだ。

「軽音、最高っ！」 歌い終えた唯は精一杯叫んだ。

第11話 「文化祭」 了

第11話 「文化祭」(後書き)

鮮血

「いや、やっぱりいいね。この話は。
ところで、文中にあったけどデジャヴの使い方が違っつてホント？」

英樹

「正確には違っつてだけ。
本来は、『まだ1度も経験した事が無いのに、
以前どこかで経験した事があるように感じる事』なんだ。
今回の場合は恐らく、憂のあとに唯が現れた事が似てたから
使われたんだろうけど、本当はまだ経験してない事を経験したと
感じる事だから。」

鮮血

「細かいね、君は。
でももう、これが定着しきってるんだろうね。
さて次回ですが、文化祭の次の日の片付けのお話です。」

英樹

「片付けかよ……。
サボりたいな。」

鮮血

「サボったら進展しないだろうが！
次回は梓とドキドキな展開があるんだよ？」

英樹

「屑作者が！

一々大げさなんだよ！ 読者様を無駄に期待させるな！」

鮮血

「そうだね。 読者あつての作品だもんね。

改めて次回の話ですが、英樹と梓の仲が進展しますよ。

こないだ遼祐くんにヘタレと言われましたがそれを返上します！
それと、英樹が軽音部の皆を強く叱らない理由もちよつとだけ。」

英樹

「どうせいつもの御都合主義と、無理矢理こじつけたんだろ？

しかし、あと少して終焉か……。

それではまた来週。」

第12話 「近づく距離」(前書き)

鮮血

「昨日、けいおん!!の新OP、EDが発売しましたね。
なのに買う為のお金が無いつて・・・。

まあ、他に使う予定があるので元々難しかったのですが。
それでは参りましょう。」

直衛 凍夜 怜奈 深鈴 悠斗

「け」「い」「お」「ん!」「Fragment」

嶽文

「1、2、3、4!」

英樹

「何でお前らが!？」

憂

「50000PV、6000ユニークに達しました。

本当にありがとうございます。

それでは、けいおん! Fragment、第12話「近づく距離」
どうぞ。」

第12話 「近づく距離」

けいおん！Fragment

第12話 「近づく距離」

文化祭終了の次の日、桜ヶ丘高校は文化祭の後片付けをしていた。

「片付けなんてメンドー！」

3年生の教室から悲痛の叫びが轟いた。

「るっせえなあ。」

「他の人たちに迷惑だから止めてよね。」

凍夜の叫びに、英樹と怜奈が冷ややかな目を向ける。

「だってよー、正直なところ、こんな事しなくてよくね？」

「何で？」

凍夜のぼやきに、深鈴が反応する。

「最後の文化祭なんだからさ、片付けないでそのままにして、いつまでも楽しんでいたいじゃん！」

「いつまでも感傷に浸っている暇があるのかよ。」

「お前は将来が定まっていいいな。」

「いやいやいや、まだ就職しねえから！」

「でも、英樹が科捜研に勤めるようになったら、検挙率もつなぎの
ばりだね。」

「深鈴、さすがにそれは言い過ぎでしょ……。」
怜奈が嘆息する。

「そんな事ないよ。」

英樹の知識があれば可能だし、凶悪犯に対峙してもあの時みたい
に……。」

そこまで言って、深鈴は口を閉ざす。

「ご、ごめん、英樹。」

「気にするなよ。あれは俺の体質の問題だよ。」

「お前ら、サボってないで手伝えー。」

獄文が暗くなった空気を戻すように言った。

「椅子に座って読書してるやつに言われたくねえ。」

「右に同じ。」

「悠斗が座っておけって言っから。」

「座りながらでもいいからやれって言っただよー！」

「ケチ。」

「いいからやれ。」

「騎龍、これはどこに置けばいい？」

「とりあえず教卓の上に頼む。」

「失礼します、英樹先輩、居ますか？」

「英樹？ あそこ。」

「あれ？ 和、何か用か？」

「先に文化部の片付けを行って言ったじゃないですか。」

「ああ、まだ時間があるからいいかなあと思って。」

「でも、唯が「早めにやる」って意気込んでましたけど……。」

「あれって、本気だったのか……。」

「みたいですよ。」

「すまん、ありがとう。」

英樹はそう言って、教室を出た。

「と言うわけで、軽音部が使用したものは全部片付け終わったな。」

「だねー。」

「よし、それじゃあ、ムギ、頼む。」

「はい」

律の提案に、ムギが頷く。

「で、何故お茶を？」

「休息です、休息。」

「いや、でも、クラスの片付けは・・・。」

「・・・面倒なのでゴメンです。」

「ハモった!？」

(こいつら裏でタイミング合わせてんのか?)

「・・・そんな事出来るわけじゃないですか。」

「毎度のごとく普通に地の文を読むか!」

「いや、やっぱり部室は落ち着くね」

「梓、初めての文化祭はどうだった？」

澪の質問に、お菓子を食べていた梓が顔を上げる。

「唯先輩の演奏が……。」

「それはもう止めてー……。」

「でもまあ、俺は満足だったな。」

2年生の時は特異体質の検査で出られなかったから、全員で出れたのは嬉しかったな。」

「よかったね、お兄ちゃん♪」

「ですね。」

「ああ、「最後」に相應しいものだったな。」
その言葉に、皆の顔が翳る。

「そっか。」

「最後」でしたね。」

静寂を最初に破ったのは梓だった。

「なんか、その事忘れてました。」
律が申し訳なさそうに言う。

「構わないさ。 そんな事気にせず、精一杯やってくれたんだから。桜ヶ丘高校での軽音はまもなく終焉を迎えるだろうが、俺の中で軽音が終わるわけじゃない。」

かなり難しいだろうけど、時間があれば顔を出すつもりだしな。」
英樹は笑顔で言う。

「また、会えますよね？」

ムギが不安げに聞いてくるが、

「もちろん。ちゃんと会えるさ。」

休日返上でお前らと会うのも悪くない。」

英樹は明るく努めた。

と、そこへ和が顔を出した。

「皆、何やってるのよ。」

「あ、和ちゃんも一緒にお茶しようよ。」

「ごめん、やめとくわ。」

唯の申し出をやりわりと断る。

「でも、お茶飲んでるって事は、片付いたの？」

「うん。」

「そう。」

だったら、他の部の片付け、手伝ってちょうだい。」

「「ええー!?!」」

「終わったんでしょ？　だったら別にいいじゃない。」

「教室の片付けとどっちがいい？」

英樹が訊いてくる。

「内容によりますね。」

「簡単な作業だったら。」

「えっと、機材を別の所に運ぶだけ。数もそんなに多くはないから。」

「んじゃあ、とつと終わらせるか。」
律が立ち上がり、皆がそれに倣う。

「確かに数はそれほどでもないな。」

機材を運びながら、英樹は言った。

「でも、こんな倉庫に入れておいて平気なんですかね？」

梓は機材を指定された倉庫に置きながら訊いた。

「一応、ここを掃除する時があるから、平気なんじゃないかしら。」

和が備品チェックをしながら答える。

「残りの数は少ないから、俺がチェックしとくよ。」

お前は他の仕事に移れ。」

「それじゃあ、すみせんが願ひします。
多分、この後は生徒会室に居る事が多くなるので、そこへ。」

「わかった。 あんま無理すんなよ。」

「はい。」

和が去った後、梓の方を向いた。

「梓も適当な所で切り上げていいぞ。」

「大丈夫です。」

そう言つて、梓は次のを取りに行つた。

「あ、唯先輩、私が運んでいるので最後ですから、先に戻つていいですよ。」

「本当？　ありがとう、あずにゃん。」

「よいしょ。」

「これで全部か？」

「はい。そうです。」

「じゃあ、後は最終チェックを……。」

そこまで言った時、扉が独りでに閉まった。

「あ？」

「え？」

2人はあまりに突然の事に茫然とした。

「これってもしかして……。」

「ああ。閉じ込められたみたいだな。」

「ど、どうしましょう、英樹先輩！」

「いや、どうしようって言われてもなあ……。
困ったな。」

まさか、遼祐の仕業か？」

「誰ですか！？」

「え？ 多分、将来俺の義弟になる奴。」

「将来って……。」

「唯との拳式、いつだったっけ？」

「相手は唯先輩!？」

英樹はしばらく思案するが、いい案が出てこない。

「とりあえず、突っ立っててもしょうがないから座るか。」

そう言っ、英樹は空いてる場所に腰をおろした。

「そうですね。」

梓も何も打開策が無いのか、英樹に倣う。

「英樹先輩は寂しくならないますか？」
静寂の中、唐突に梓がポツリと言った。

「皆と一緒にいられる時間が尽きようとしている事に、か？」

「はい……。」

梓は寂しくなるのが怖いのか、その声に覇気は無かった。

「そりゃあもちろん寂しいさ。」

俺は2年生からだったから、皆と一緒にいた期間は短かったし。でも、それでもこればかりはな。

悔いの残らないように過ごすなんてのは絶対に無理だ。

だからこそ俺達は今を精一杯やる必要がある。

俺はできる限り精一杯やったつもりだ。

だから、胸張って卒業する。」

英樹は笑顔で言った。

その笑顔が虚像かどうかを見抜ける程、梓は彼の事を知らない。

それが非常にもどかしいと、梓はそう思った。

「そうだ。」

英樹は何を思ったのか、和に渡されたチェック用紙を扉の僅かな隙間から少しだけ出した。

「何してるんですか？」

「こうして少しだけ出しておけば、誰かが気付くかもしれない思っ
つてな。」

あとは、固定すればいいんだけど……。

まあこれでいいかな……。」「

英樹はそこにあつたダンボールで用紙を押さえた。

「あとは気長に待つしかないな。」

「そうですね。」

2人は再び座り、助けがくるのを待った。

「キャッ！」

唐突に梓が悲鳴を上げ、英樹に抱きついた。

「あ、梓、どうした？」

「あ、頭に何か冷たいものが……。」

「ん？」

ああ、ただの水滴だよ。

多分、昨日の夜に降った雨の雨漏りじゃないかな。」

英樹は梓を安心させるように言った。

しかし、梓はなかなか離れようとはしない。

（梓のやつ、どうしたんだ？ 何故離れない！？）

英樹は焦るが、何をどうすればいいのかわからず、とりあえずそのままの形を保つ。

（つて、そんな事でいいのか！？ だが無理に梓を離すのもヒドイし……。）

そこまで考えた時、梓が静かに言った。

「少しだけ……。少しだけこのままで居させてください。」
梓の声はどういう訳か震えていた。

英樹には理由がわからなかったが、彼女のためなら構わなかった。

「わかった。」

そう言つて、英樹は彼女の温もりを感じていた。

英樹に抱きついている間、梓はこんな事を思っていた。

（何でだろう・・・？）

英樹先輩といつもみたくなくなる事を考えたら、すごく辛い気持ちになる。

私は、もっと英樹先輩と一緒に居たい！）

だが、梓はその気持ちを、想いを伝える事に、何故か抵抗を覚えた。それは英樹が考えた事と同じように、『今の形』が壊れるのが怖いからだった。

やがて、梓は英樹から体を離れた。

「すみません。」

なんか、取り乱しちゃったみたいで・・・。」

「気にする事無いよ。」

落ち着いたのなら別にいい。」

その時、扉の隙間に挟んだ用紙を誰かが外から引いた。

それを見た英樹はすかさず扉の側に駆け寄った。

「誰か外にいるのか？」

「お、お兄ちゃん！？」

「その声は、憂か。すまないがこの扉を開けてくれないか？
どうやら閉じ込められたみたいなんだ。」

「わかった！ あ、もしかして梓ちゃんもそこに？」

「ああ、いるよ。」

「梓ちゃん、直ぐに鍵をもらってくるから、もう少し待っててね。」

「憂。」

「ありがとう。」

その後、憂は鍵を取りに行った。

「とりあえずこれで一安心かな。」

「はい。」

憂が戻ってくる前に、英樹は備品の最終チェックを行い、そろそろ来てくれるだろうと思った時、梓と共に扉の近くに移動した。

「キャッ！」

「梓！ ウォッ！？」

その時、梓が転倒し英樹が彼女を助けようと手を伸ばすが、思いの外梓の引っ張りが強かったため、英樹も転倒してしまった。

なんとか梓と床の間に入り、彼女が怪我するのを阻止した。

「大丈夫・夫か・・・？」

「一お・・・うは・・・。」

しかし、互いの顔が相当近くにあったのは誤算だった。

「「……………」」

互いに何も言えずにいたが、梓が焦って立ち上がろうとする。

「す、すみません。

直ぐに……………え？」

しかし、何故か英樹は反射的に梓の腰に手を回した。

「あ……………」

いや、その……………すまん。」

英樹は梓に謝るが、彼女を離そうとはしなかった。

それどころか、梓の方も自分から離れようとはしない。

永遠とも思えたその瞬間はすぐに終焉を迎えた。

「お兄ちゃん、梓ちゃん、大丈夫……………夫？　って、何やってるの？」

「憂！？

っ！　眩しい！」

英樹は咄嗟に憂の方を見たが突然の陽射しに目を閉ざす。

「何やってるの……………？」

憂の声が冷ややかになっていく。

「何って……。」

ただの事故だ。」

だが、英樹は至って冷静に答えながら、梓を離す。

「……。」

すると、梓は何も言わずにその場を走り去る

「梓ちゃん!」

憂の制止も聞かずに。

「憂、悪いんだけど、梓の事頼むわ。」

「でも、こういうのはお兄ちゃんが追いかけた方が……。」

「今の俺じゃあアイツを更に傷付けるだけだ。」

お前も薄々はわかつているんじゃないのか?」

「わかったよ。」

「ありがとうな。えっと、何を伝えてもらうか……。」

「大丈夫 お兄ちゃんが伝えたい事はだいたいわかるよ。妹だも
ん。」

「いつまで経っても憂には頭が上がらないな。」

憂が梓を追いかけたのを見届けてから和に書類を渡しに行った。

「なにやってるんだろう、私。」

梓が走り疲れて立ち止まっていると、背後から誰かが追いかけて来た

「憂……。」

「ごめんね、お兄ちゃんじゃなくて。」

「そ、そんな事思っていないよ。」

「ならいいけど。お兄ちゃん、結構心配してたよ。」

その言葉に梓はカッとなる。

「嘘っ！もしそうだったら何で追いかけて来ないの？」

憂は予想もしなかった大きな声にびっくりする。

「じ、ごめん……。」

「やっぱり梓ちゃんもそう思うよね。」

しかし、憂は苦笑いしただけだった。

「え？」

「だって、本当に心配だったら追いかけるはずだもんね。

でも、お兄ちゃんや梓ちゃんを更に傷付けるのが怖くて追いかけて来なかったの。」

「どういう事？」

憂の言った事がいまいち理解出来なかった梓が聞いてくる。

「私たち、血が繋がっていないけど、とっても仲がいい兄妹でしょ？
そんな私たちを見て、喧嘩した事無いのかな？ って思った事は無い？」

「あるけど……。」

「もちろん兄妹なんだから喧嘩ぐらいあったよ。

でも、あれは相当酷かったなあ。」

憂は空を見上げながら話し始めた。

「7年前かな。 今じゃあ大した理由じゃないって言うのに、
小さい頃にそんなちっぽけな理由で喧嘩したの。」

お兄ちゃん、小さい頃から言う事が結構キツかったんだ。

それに私とお姉ちゃんが怒って家を飛び出しちゃって……。

だけど、お兄ちゃんは一生懸命に私たちの事を探してくれたの。

大雨が降ってきて、私たちが見つかるまで止めなかった。

しかも私たちを見つけた後、風邪を拗らせちゃったって言うのに、
私たちにずっと謝ってた。

「ヒドイ事ばかり言ってごめん。」って。」

憂の口から語られる過去に、梓はただ黙しているだけだった。

「仲直りしてからわかったの。」

お兄ちゃんの言葉は確かにキツイけど、ただ素直になれないだけなんだって。

だけど、「それを知らない人に対しては傷付ける事しかできない刃にしかない」

って、お兄ちゃんもわかっているから、梓ちゃんを追ってこれなかったの。」

「そうだったんだ・・・。」

「梓ちゃん、とりあえず今日は帰ろう。」

明日、落ち着いたら仲直りしなよ。」

「うん。」

梓は憂の提案に静かに頷いた。

S i d e : 英樹

その夜、英樹は自己嫌悪中だった。

（まさか梓を抱きしめようとしてしまうなんて・・・。）

英樹は闇の中で先の事を思い出す。

何故あんな事をしたのかは大体見当がつく。

『梓の温もりを失いたくはなかったから』だ。

（何考えてんだか。

梓は別に俺とは先輩と後輩ってだけなのに・・・。）

それでも、梓の温もりは自分にとって、かなり大切だと感じた。

まさか自分が独占欲の強い人間だとは思っていなかったが。

（マズイよな。 どうすればいいんだ？

とりあえず、明日会ったら謝ろう。 それ以外になんにも思いつかんし。）

なんとか明日の梓への対応を決め、眠りについた。

Side：英樹 了

Side：梓

一方の梓も全く寝付けないでいた。

（英樹先輩、どうしてあんな事・・・。）

先輩、あと少ししか軽音部にいないんだよね。 なんか、寂しいな。。。。）

そこまで考えた時、梓はハッとした。

（私、何で英樹先輩の事ばかり考えるんだろう。。。）

その答えを探りながら、夜は更けていった。

S i d e : 梓 了

第12話 「近づく距離」 了

第12話 「近づく距離」(後書き)

鮮血

「いや、抱きしめちゃいましたねえ、英樹くん。」

英樹

「くっ……。」

何であんな事させたんだ！」

鮮血

「ん？ 何かな、あんな事って？」(↑ニヤニヤ

英樹

「デメエ、わかってて言っているだろ。」

鮮血

「さあ？

何の事やら、さっぱりわかりません。」

英樹

「この野郎……。」

つまり、その……。」

あ、梓を抱きしめた事だよ。」

鮮血

「はい、声が小さい。」

もう1回言いなさい。」

英樹

「単なる虐めだろ、これ！」

鮮血

「まあ、私からの虐めはここら辺にして、後は誰かが弄るのを期待しようか。」

それにしても、進展とか言った割には告白しなかったね。
このヘタレ。」

英樹

「あれでもヘタレ扱いなのか！？
頑張った方だと思っただけ……。」

鮮血

「遼祐くんから言わせれば、告白しなかった時点でヘタレだろうね。
それに、せつかく2人きりになれたのに何もしないし。」

英樹

「前者はともかく、後者は当たり前だから！ 皆普通何もしないから！」

鮮血

「我儘だなあ、まったく。」

君がそこまで言うならそういう事にしといてあげるよ。」

英樹

「え！？ 俺が間違ってるの！？」

鮮血

「で、英樹が皆に対して強く怒らない理由はあんな感じですよ。
英樹は皆を傷付けるのがとても怖いと思っているので、

梓との仲が進展しないのも少なからずこれに関係しています。

関係が急変したり、その影響によって、

相手を傷付けたらどうしようと考えるからです。

ここまで恐怖するようになったのは、トラウマによる精神暴走と、今回の話で明かされた、唯と憂との事です。

英樹の場合は、この考え方に、他作品で見られるような辛い過去を加えると、

元々の弱い精神に更に負荷がかかるため、

性格がかなりぶれそうなので止めました。」

英樹

「で、次回が通常回の最終回か。」

鮮血

「そうだね。」

最終回だけど、簡単に告白して終わり、なんて事にならないから。それだと物語が無茶苦茶短くなっちゃうし。」

英樹

「そんなんだから御都合主義になっちまうんだよ。」

鮮血

「ま、否定はしないよ。」

さて、次回はいよいよ最終回です。

内容は、この12話の次の日から始まります。

ま、結ばれるかどうかは・・・ね？」

英樹

「何その煽り！？

ふられるの、俺！？」

鮮血

「で、その最終回の次には、番外編と称して後日談＋ライブハウス編を。特別編として、英樹の卒業式編をお送りします。それでは最終回、「合わさる欠片」でお会いしましょう。」

英樹

「答えるよ、オイ！
あ、感想、誤字脱字、お願いします。
逃げるな、鮮血！」

最終話 「合わさる欠片」(前書き)

鮮血

「けいおん！、原作ももう終わりみたいですネ。

無茶苦茶悲しい！

さて、最終話です。

御都合主義が見られますが、暖かい目で見守ってください。」

英樹&梓

「それでは、けいおん！F r a g m e n t、

最終話「合わさる欠片」、どうぞ。」

最終話 「合わさる欠片」

けいおん！F r a g m e n t

最終話 「合わさる欠片」

S i d e : 梓

次の日の朝、梓は自分の体調に違和感を覚えた。

（なんか、身体が重いし、熱もあるみたい……。夜遅くまで考え事してたからかな？ そんな訳無いか。）

梓の思った考え事というのは、昨日の事である。

昨日、何故英樹はあんな事をしてきたのか、と言う事だ。

結局、その答えは導き出せなかったが。

「梓？ そろそろ起きたら？」
そう言つて、母が入つて来た。

「お母さん、今日はなんか熱っぽいから学校は休む。」

「確かに少し熱いわね。」
母が額に手をあててくれる。

「でも困ったわね。
お母さんもお父さんも今日から明日の夜まで仕事で傍に居られないんだけど。」

「大丈夫だよ。 私自身でなんとかするから。」

「そう？ 何かあったら電話してね。 無理しないようにね。」

「うん。 ありがとう。」

母が部屋を出た後、憂に病状をメールした。

Side：梓 了

「で？ 俺に頼みたい事ってのは何だ？」

放課後、英樹は憂に呼ばれて1年生の教室の前にいた。

「その、昨日の今日だから頼み辛いんだけど・・・。」

「それが何か聞いているんだが。」

「今日、病欠した梓ちゃんにこのプリントを届けて欲しいの。」

「・・・。」

「あからさまに嫌な顔しないで、これをきっかけに仲直りしてきなよ。」

（相手は病人なのだが・・・。）

憂の言葉にも一理あるのはわかる。

「わかったよ。行ってくる。」

「ありがとう、お兄ちゃん。」

（ご両親のどちらかに渡せばいいよな。）

しかし、英樹はまったく梓に会う気は無かった。

――中野宅――

「ここだな。」

梓の家に到着した英樹は、早速インターフォンを押した。

（さっさと済ませて帰ろう。）

だが、その考えを打ち破る人物が出てきた。

「あ、英樹先輩」

「梓！？」

（まさか梓が出てくるなんて予想外だ。）

とは言え、いつまでも立たせておくのもマズイし、上がらせてもらうか。」

「とりあえず、立ってるのも身体に負担だろうし、上がっても平気か？」

「はい どうぞ。」

梓はそう言って、部屋にまで英樹を上がらせた。

（しまった！ さっさとプリントを渡せば良かったじゃないか！
まあここで渡せばいいか。）

そう思つて、鞆からプリントを出そうとした時、グーと梓のお腹がなった

「……。」

しばしの静寂の後、「お昼から何も食べてなくて……。」と梓が言った。

「なるほど。」

「じゃあ、お粥でも作るよ。台所、借りていいか？」

「そ、それじゃあお願いします。」

梓は、以前と違って迷惑だからなのなんなのとは言わなかった。

「さて、作るか……。」

英樹は意気込んで料理を開始しようとする。

だが、作り始める時になってから再び思い出した。

「またプリントを渡すの忘れた……。」

まあいいか。」

もはや気にも留めずに、英樹は早速お粥作りを開始する。

「梓、入るぞ。」

出来たお粥を持って、英樹は部屋をノックした。

「どうぞ。」

部屋に入り、お粥を置く。

梓が食べ終わったのを確認してから、英樹はプリントを渡した。

「それじゃあ、食器を洗ってくるから、梓は寝とけ。」

梓が食事を終えたので、食器を持って部屋を後にしようとするが、それを梓が呼び止めた。

「あの、非常に頼みにくい事があるんですけどいいですか？」

「何だ？」

「その……。」

えっと……。」

「うん？」

「断食した時みたいに、手を握っていて欲しいんですけど……。」

「それくらいなら別に構わないけど。19時ぐらいまでいるから。」

「

そう言つて、至極当然のように手を差し出す。

（理由が無くて手を出すなんて……。

でも、やっぱりあったかいなあ。）

そんな事を考えながら、梓はまどろみに包まれた。

数時間後。

梓は目を覚ましたが、英樹が側に居ない事に驚く。

「あつそ。 さて、俺はそろそろ失礼するわ。」

「え？ 何ですか？」

「何でって、ご両親のどちらかがもうすぐ帰って来るんじゃないのか？」

「明日の夜まで帰って来ませんけど。」

「え？ 明日の夜？」

「はい。」

「マジ・・・？」

「憂から聞いてないんですか？
ちゃんとメールに記したんですけど。」

「憂はなんて返してきたんだ？」

「両日とも英樹先輩に看病してもらってって。」

（聞いてないし！ まあ、看病程度なら別に構わないか。）
英樹はとりあえず、梓の看病を最優先にする事を決めた。

「えっと、それじゃあ、1度家に戻っていいかな？」

兄さん達の夜食とか作らないといけないし、制服のままでし。」

「もちろん構いませんよ。」

「寂しくなったらメールでも電話でもしてくれていいぞ。」

「そんな事しませんよ。子供じゃないんですから。」

「さっき、側に居て欲しいって言ったじゃないか。」

その言葉に、梓が再び顔を真っ赤にする。

「さっさと行ってきてください！」

「ボフッ。」

そして、再び枕を投げつけた。

――灘宮宅――

英樹は梓の家を出て、すぐに自宅に戻った。

「さてと、夕飯はきんぴらごぼうと、豚汁でいいか」

着替えを早急に終えて、風呂掃除などの家事を手早く済ませる。

「よし。あとは兄さんに知らせておけばいいよな。」

さて、梓の所に戻るか。」

兄に今日は後輩の看病で遅くなる、と言う事をメールで伝え、家を出る。

――中野宅――

「梓、戻ったぞ。」

許可を得てから部屋に入ると、梓がこちらをジト目で見てきた。

「どうした？」

「いいえ、別に。」

「あつそ。」

不機嫌な理由を言わないので、英樹はこれ以上の詮索しなかった。

（家を出る前にあんな事言ったのに何で平気なんだろ？
やっぱり私の事なんかどうでもいいから言えたんだよね・・・。
なんか、辛いな。）

梓は暗い自分を見られなくなかったので、布団をかぶった。

「夕食はなんか消化のいいものと、生姜湯でいいか？」

「あ、はい。」

その後、梓の分の夕食を作り、洗い物を済ませた。

「さて、問題はその後だな。」

俺はどうすればいいんだ？」

「どうすればって、それは英樹先輩の自由じゃないですか。」

「まあ、家に帰るでも構わないんだけど、お前の病状が心配だから。」

「えっ！？　じゃあ、泊まりがけ、ですか・・・？」

「いや、さすがにそれは・・・な。」

お前にもご両親にも迷惑だろうし、俺は何もしないけど梓が不安だろうし。」

「でも、信じてます。」

「は？」

梓の言葉に、英樹がすっとんきょうな声を上げる。

「何もしないって言うのは目に見えてますし、それに、何より英樹先輩を信じてますから。」

「・・・。」

「あの、何でも言わないんですか？」

「いや、なんでもない。　気にするな。」

「そう言われたら逆に気になります。」

英樹は梓の詮索を適当にはぐらかす。

（梓が信じてくれていて嬉しいなんて、口が裂けても言えない。）

「じゃあ、1度自宅に戻って掛け布団を取って来るわ。」

「それくらい、私の家を使えばいいじゃないですか。」

「人の家の物を使うのには弱冠抵抗があるんで勘弁。」

「わかりました。」

「なんかあつたら電話でもしてくれ。」

それを聞いた梓は、近くにあったクッションに手をかける。

またおちよくつてくるだろうと思つたからだ。

しかし、英樹は何も言わずに玄関まで行つた。

その行動にホツとした梓だったが、不意に英樹が言った。

「寂しくなつたらな。」

「っ！」

すぐにクッションを投げるも、英樹は既にその場を離れていた。

「人の気も知らないで・・・／＼／＼／＼／＼／＼／」

梓は顔を赤くして愚痴るが、想いを伝えられない自分をはがゆく感じた。

「梓、戻ったぞ。」

インターフォンを押して梓に中に入れてもらう。

だが、家の中に入った瞬間にクッションを投げつけられた。

「ボフッ!？」

「さっきの分です。」

クッションを投げつけた梓は、楽しいのか、笑顔だった。

「まだ完治してないんだから、療養してろよ。」

これ以上俺を心配させるなよ?」

「大丈夫ですよ。」

英樹先輩が看病してくれているんですから。」

「そう言ってくれるのはありがたいんだけど、
万が一倒れてみる。ご両親にあわせる顔が無いよ。」

「それもそうですね。」

英樹の言葉に、梓が納得する。

「さて、寝る場所なんだが、何かあった時のために部屋の近くでい
いかな？」

「それだつたら、私と同じ部屋の方がいいんじゃないあ・・・？」

「いや、それは・・・。」

さすがに無理だと言おうとしたが、それを梓が遮る。

「何もしないんだつたら、平気ですよ。」

確かにそうは言ったが、それでは思いつ切り梓ファンを敵に回すだ
ろう。

できればそれは全力で避けたい。

「やっぱりそれはちよつと・・・。」

「って、あれ？梓？」

しばらく考えて梓の意見を棄却しようとしたが、梓がいなくなつて
いた。

「神隠しにでもあったのか？」

とりあえず彼女の部屋に行くと、丁度出てくるところだった。

「英樹先輩、私の部屋に敷いておきましたから。」

「なんとっ!？」

あまりにも素早い作業に驚愕する。

「いや、梓。」

「やっぱり止めないか？」

「大丈夫ですよね？」

「はい……。」

ここは梓に従っておいた方が得策と考え、諦めた。

「それじゃあ、英樹先輩、お休みなさい。」

「ああ。お休み、梓。」

その後、梓に大敗した英樹は、仕方なく彼女の部屋で寝る事にした。

（梓が寝付いたら抜け出そう。）

英樹はそう考えていたが、寝ぼけているのかわざとなのかはわからないが、梓が英樹の手を掴んだ。

（抜け出せない……。）

唯と憂のようなパターンに陥り、結局その後も梓の手を振りほどく事が出来ず、

彼女の部屋で一晩を過ごさざるを得なくなったという。

（困ったなあ……。）

英樹は梓の寝顔を見る。

彼女はとても気持ち良さそうな顔をしており、英樹は笑みをこぼした。

（ちょっと失礼して。）

梓の寝顔の可愛さに衝動をかられ、人差し指で彼女の頬につつく。

ぶにぶにしている可愛かった。

（って、何やってんだ俺は……。）

こんな事する前に決着（ケリ）告白（着けないとな）
そう考え、再び梓を見る。

その寝顔を見て、『もつと、ずっと、傍にいたい。』

不安の混ざる不確かな決意を秘め、英樹は眠りに着いた。

翌日、英樹は半ば無理やり梓の手を振りほどき、朝食の支度を開始する。

そこへ梓が寝ぼけ眼で起きてきた。

「おはようございます。」

「おはよう。眠気覚ましにシャワー浴びてこい。昨日掻いた汗もついでに流せ。」

「はい。」

その後朝食を取っていた梓は、元気になった旨を英樹に伝えた。

「元気になったんだったら、今日はどうする?」

今日は日曜日で丸1日休みだ。

「英樹先輩は予定は・・・?」

「俺は何も無いよ。」

その言葉に梓は喜色を浮かべた。

「せっかくの日曜日ですし、一緒に出掛けませんか?」

「構わないよ。行きたい所を梓に任せていいのなら。」

「それじゃあ、早速準備してきますね。」

至極当然のように褒められ、梓は照れる。

「それで、何を話していたんだ？」

「えっと、一昨日、倉庫で何であんな事したのかなあと思って。」

（ぐっ。いきなり核心をついた質問だな。

適当にはぐらかすか。何か梓の気を逸らせられるものは・・・。

）
梓の温もりを失いたくはなかったからとは簡単には言えず、周囲を見回す。

すると、タイ焼き屋の屋台が目に入った。

（あれだっ！）

英樹は即断し、梓の手を握る。

「あ、梓。タイ焼き、食べるか？」

英樹は簡単にはごまかせないかもしれないと思っていたが、

梓はいきなり英樹に手を握られた事に少し混乱し、それを承諾した。

「い、いいですよ。」

（よしっ！ 任務、完了。）

某機動戦士の翼の名を冠するバスターライフルを2丁装備した機体のパイロットの如く、その台詞を心の中で思う。

タイ焼きを食してから街にくりだし、アクセサリーショップに入る。

「英樹先輩は・・・。」

「こっいつのが似合いそうですね。」

「まあ、それなら俺も好みではあるけど。」

2人で相手に似合うものを探していると、見知った顔がそこに現れた。

「英樹くん？」

「え？ あつ、義姉さん、兄さん。」

そこに現れたのは、翔影と詩織だった。

「何で兄さんたちがここに？」

「久しぶりに2人でデートしようと思って。」

「病院以来だね。梓ちゃん。」

「はい、こんにちは。翔影さん。」

「その子は英樹くんの彼女？」

詩織の質問に、英樹と梓は顔を赤くする。

「ああ。そのようだな。」

「兄さん!？」

翔影が真っ赤になった2人の代わりに答える。

「何でそんな風に言うんだよ!」

英樹の憤慨に、翔影は不思議そうに答える。

「いや、以前病院で英樹から離れないで欲しいと、軽音部の皆さんに言ったら、

その子が一番早く「もちろんです。」と答えたから、
てっきりそうなのだと……。」

「ウウ……。」

梓はその時の事を思い出す。

「拳式する日程が決まったら連絡してね」

「まだ、そこまでの仲じゃないよ!」

「じゃあ、さっさと告白しないと、他の男に盗られて泣くはめになるわよ。」

詩織が楽しく笑っている。

「梓ちゃん、英樹の事をよろしくお願いします。」

「ふえっ!？」

え、ええつと……// // // // // //

翔影にそんな事を言われ、梓は慌てふためく。

「それじゃあ、今度は結婚宣言の時に会いましょう」
詩織と翔影はそう言って、店を出た。

「……………」

2人は顔を赤くしたままではあったが、英樹が梓に言う。

「と、とりあえず、次の店に行くか……………」

「そ、そうですね。」

英樹と梓も店を出て、次の目的地に向かう。

一応普通の会話ができるまでには回復した2人は、猫カフェへと足を踏み入れる。

「ふーん、ここがねえ……………」

「友達の純に教えられたんです。」

英樹は梓ほど興味はなかったが、接客を担当する人物を見て驚く。

「いらっしやい…………ませ…………？」

（怜奈！？）

そこには、（この店の決まりなのだろうか？）ネコミミを付けた親友、空迅怜奈がいた。

「2、2名様ですね。どうぞ、こちらへ。」

「英樹先輩、行きましょう。」

「あ、ああ。」

梓に促され、店内へと進む。

「ただいま、当店では仔猫が大人気ですよ。」

「わあー。」

「じゃあ、私たちもそれで。」

「かしこまりました。」

怜奈の後ろをついて行き、専用スペースへと入る。

「かわいいっ」

梓が仔猫に夢中になっている時、怜奈が英樹の首根っこをつかむ。

「この事、誰にも言っんじゃないわよ。」

「わかってるよ。」

英樹は怜奈の行動にも慌てずに対応する。

「英樹先輩、その方とお知り合いですか？」

「そうだよ。」

同じクラスのやつ。」

「初めまして。空迅怜奈です。」

「中野梓です。」

梓が礼儀正しく挨拶するのを見て、怜奈が英樹に言った。

「英樹が女の子と2人きりで外出するとはねえ。」

「悪いか？」

「ううん。意外だなあと思って。」

梓ちゃんは、英樹と付き合ってるの？」

（本日2度目・・・。）

英樹は呆れる。

「い、いえ。まだ・・・。」

「？」

「ふーん。」

最後はボソリと言ったため、英樹には聞こえなかったが、怜奈は耳ざとくそれを聞きつけた。

「そんな悩める梓ちゃんに、こんなプレゼント。」

「なんですか？」

怜奈は梓にだけ見えるように携帯電話で撮影した写真を見せる。

英樹はいつの間にか自分の頭の上に乗った仔猫を相手にしている。

「美人・・・ですね。」

「そうでしょう。」

怜奈が見せた写真には、美人とも、かつこいとも言える女性が写っていた。

「別に、英樹の元カノとかじゃないから安心してね。」

「お、思ってますよ。」

怜奈の言葉に、梓は慌てる。

「実はこの女性、『女装した英樹』なのよ。」

「はい・・・？」

「去年の文化祭で英樹に罰ゲームでやらせたんだけど、それがかなり好評だね。」

「しかも、この写真を持っていると、異性との恋愛が成就するのよ（嘘）。」

「そんなまさか。」

梓は苦笑する。

「ま、確かにそれは無いけどね。」
怜奈はあっさりとそれを認めた。

「何、勝手に人の傷を抉っているんだよ！」
そこへ英樹がいきなり横槍を入れる。

「いいじゃない、別に。」

「憂ちゃんも喜んで受け取っていたし。」

「憂が!？」

「。。。。」

梓が驚く中、英樹は顔を逸らす。

「憂ちゃん曰く、「兄を弄るのに使います」との事よ。」

「怜奈、余計な事を言っな！」

「英樹先輩、憂に弄られているんですか？」

「時々、かな。。。。」

「時々あるんですか!？」

「ま、私と深鈴も時々使うけどね。」

「止める。。。。」

英樹は過去を思い出しているのか、悶絶する。

「梓ちゃんにもあげる」

「それじゃあ、遠慮なく。」

怜奈が梓に写真を転送する。

「それじゃあ、そろそろ時間だし、お暇させていただくか。」
英樹が仔猫を遠くに下ろし、梓と怜奈の方を向く。

「はいはい」

「じゃあ梓ちゃん、今日中に英樹に告白しちやいなさいよ。」

「えっ！？　で、でも・・・。」

怜奈の言葉に、梓が顔を赤くしながら慌てる。

「大丈夫よ。絶対だね。」

猫カフェを外に出た時には、既に日が沈み始めていた。

「梓、この後はどうするんだ？」

「・・・。」

英樹の質問にしかし、梓は中々答えなかった。

「梓？」

「最後に・・・　最後に近くの見晴らし台に行きます。」

「風が気持ちいいな。」

見晴らし台に到着した2人は、一身に風を受けていた。

（ここで、告白できるかな・・・。）

英樹はそう考え、深く息をついて気持ちを落ち着かせる。

「梓。」

「英樹・・・さん。」

だが、互いに互いを呼び、戸惑う。

「梓からどうぞ。」

「え、えっと、それじゃあ・・・。」

英樹にすすめられ、梓はオズオズと口を開く。

「英樹・・・さん。」

梓は不安なのか、体が少し震えていた。

それを懸命に耐え、英樹に自分の気持ちを伝える。

「私、英樹さんの事が好きです！
付き合ってください！」

それは、2人が相手に伝えられなかった想いであり、聞きたかった言葉だった。

英樹は、それが自分の願望が作り出した幻聴かとも思ったが、梓の本気さが見て取れたので、自分も彼女の気持ちに答えた。

「俺も梓の事が好きだ。」
言いながら、梓を静かに抱きしめた。

「英樹さん……。」
囁いた梓の声は、静かだったがはっきりと聞こえた。

そして日が完全に沈みきる前に、2人は最後の距離を詰め、唇を重ねた。

互いに『好きだ』という想いを込めて――

最終話 「合わさる欠片」 了

最終話 「合わさる欠片」(後書き)

鮮血

「ほい、なんとか結ばれたね。」

英樹

「お前、結ばせない気だったのか？」

鮮血

「そんな訳ないでしょうが。」

しかし、最後は皆を出し過ぎたな……。」

英樹

「まあそうじゃなかったら、

皆に背中を押されずに何も変わらなかったかもな。
感想板で応援してくれた皆も、本当にありがとう。」

鮮血

「でもまだ完全に終わった訳じゃないから。」

英樹

「ああ、番外編と特別編だっけ？」

鮮血

「そ。」

ただ、どちらもデートとか喧嘩とかは無いよ。
ちよっとしたすれ違いはあるけど、
そこから大きく喧嘩したりとかは無いから。
私がデートとか喧嘩とかが書けないので。

「次回の更新は恐らく、土曜日か日曜日になるかと。」

英樹

「それではこれで。」

「次回の番外編（後日談＋ライブハウス編）でまた。」

鮮血

「誤字脱字、感想、是非お願いします。」

「私が英樹を弄らなかったので、弄ってもらっても結構ですよ。」

英樹

「そのしめ、おかしくないか!？」

番外編 「2人のドタバタとライブハウス」(前書き)

鮮血

「つてな訳で、番外編です。」

英樹

「それより、何で番外編は13話の次の日の話なのに、こんなに日が空いたんだよ!」

鮮血

「ちよつとした変更をしたので・・・。
それでは、どうぞ。」

番外編 「2人のドタバタとライブハウス」

けいおん！Fragment

番外編 「2人のドタバタとライブハウス」

英樹と梓が互いに告白した次の日

「お兄ちゃん。」

英樹は休み時間に憂から声をかけられた。

「おう。 憂、あず・・・」

しかし、梓は英樹の姿を目にした瞬間、一目散に逃げ出した。

「・・・さ。」

まあいいか。

おはよう、憂、純。」

「おはようございます。」

「お兄ちゃん、梓ちゃんと喧嘩したままなの？」

「いや、仲直りしたんだけどなあ。」

どこかでまだ怒っているのかな？」

「でも、梓は顔が赤かったみたいですけど。」

もしかして先輩と梓って、付き合ってたりにして。」

純が冗談のつもりで言うが、英樹は返答に戸惑う。

（どうする！？ ここで正直に話すか！？

しかし、それだと梓の機嫌を損ねるかもしれないし……。だが、梓が何か悩んでいるのなら、2人を通じて助ける事ができる。）

英樹は頭の中で、懸命に葛藤する。

その間なんと、『たつぷり30秒』だった。

「どうなの？ お兄ちゃん。」

憂が何故だか興味津々に聞いてくる。

（正直に話すか。）

「確かに付き合っているよ。」

昨日、互いに告白した。」

「昨日!?!」

「ああ。」

「なんだ。」

だったら、梓が逃げ出したのって……。」

純がそこまで言った時、英樹はハッと何かを閃いた。

「そうか。」

梓が逃げ出したのは、

昨日、俺が知らず知らずの内に傷付けたから破局しようと思って、あんなつつけんどんな態度を……。」

「「違うよ!」」

2人が全力でツッコム。

「ハァー。」

破局するまでの最短時間としてギネスにでも申請するか。」

「お兄ちゃん！ そんなネガティブになっちゃダメだよ！」

「すまない。」

何故だかこんな思考を……。」

英樹は頭を押さえながら言う。

「ただ単に恥ずかしいだけだよ。」

しかも、昨日恋人になったばかりなら尚更。」

「まあ、確かに俺もそうは思ったけど……。」

何も逃げ出さなくても……。」

「とりあえず、梓の緊張は私達がなんとかします。」

純が自信に満ちた表情で言う。

「それじゃあ、梓の事を頼む。」

（梓、英樹先輩に愛されてるなあ。）

「憂もよろしく頼……。」

って、何で泣いているんだ!？」

「だって、形だけとは言え、兄妹だよ？」

嬉しいに決まってるじゃない。」

「憂……。」

憂の言葉に、英樹も顔を綻ばせる。

「2人が婚約したなんて、とっても嬉しいよ。」

「誰と誰が!？」

「え？ お兄ちゃんと梓ちゃんでしょ？」

「いや、婚約はしていな・・・」「ご結婚、おめでとございます。」
・・・

英樹の言葉を遮り、純までもがいらん祝福をしてきた。

「違うっての。」

英樹は至って冷静にツツコム。

ここで全力でツツコんだとしても、あまり意味をなさない事を軽音部で学んだからだ。

純は単なる悪ノリだったが、憂の方は若干本気だったらしい。

「ハァー。」

恥ずかしくて、つい逃げ出しちゃった。

英樹先輩、怒ってないかな？」

梓は自分のクラスに戻り、机に突っ伏していた。

「まさか、こんな事で変な事考えてないよね。」

破局されたとか……。まさかね。」

英樹の考えなぞ露知らず梓は笑うが、そう考えたのは事実だ。

「あーずーさ！」

「ニヤツ！？」

「英樹先輩から聞いたよ。」

「な、何を？」

「先輩と婚約したんでしょ？」

「婚約！？ してないから！」

「なんだ。つまんないなあ。」

憂々、照れ隠しで嘘ついてた訳じゃないみたいよ。」

「そっかあ。」

「憂もそう思ってたの！？」

「うん。」

「で？」

昨日告白したみたいだけど、どこまでいったの？」

「ふえ！？」

「一昨日の一件から、どう進展したの？」

「キスはもうした？」

「それから……。」

「ねえねえ……。」

憂と純が次々と質問してくる。

「止めてよ！」

「恥ずかしい……。」

「いいじゃん。あたしはそういうの聞きたいし。」

「憂、なんとかしてよ！」

梓は純からの質問に耐えられなくなり、憂に助けを求める。

「梓ちゃんが、（形だけだけど）私のお姉ちゃんに……。」

「ちよっ!？」

勝手に決めつけないでよ！ 婚約してないし！」

「え？　じゃあ、先輩とは結婚する前にその内破局するって事？」

「なあああ……!!!」

私は英樹さんと破局なんて絶対にしない！」

「「おおーっ。」」

梓の発言に、憂と純が拍手する。

（言質、取られた……。）

真っ赤になった梓は、再び机に突っ伏した。

「へえー。　じゃあ、軽音部の１年生の子と付き合ってるのか。」

昼休み。

英樹は屋上で直衛と組み手をし終え、休んでいた。

ちなみに、今は深鈴と怜奈がやっている。

「まあな。」

なあ、やっぱり直衛も気恥かしかったりした？」

「そりゃあまあ。」

だって、友達から恋人になるんだぜ？」

「そういう風に区切ってるからだろ？」

俺は別に梓を特別に見てる訳じゃないし。」

「でも、その子の気持ちも考えてあげなさいよ。」
組み手を終えた怜奈が言う。

「わかってるよ。」

「いや、わかってないと思うよ。」

英樹、そういうのが理解できないタイプだし。」

深鈴の見解に、英樹は答える事ができなかった。

「なんとかするよ。」

「「「なんとかするじゃなくて、絶対にしろ！！！」」」

「はい……。」

放課後、梓と一緒に部室に行こうと思ったが、

これこそ梓を更に恥ずかしがらせるだろうと思い、1人で部室へと向かった。

だが、「「あ……。」」見事な事に途中で梓とバツタリ出くわしてしまった。

「一緒に行くか？」

「はい。」

（どうやら、憂と純が緊張をほぐしてくれたみたいだな。）

（うう……。）

憂と純にからかわれて、疲れた。

それに、顔には出ずに済んだけど、2人のせいで余計に緊張しちゃうよ／＼／＼／＼／＼／＼／

「あれ？」

「どうしました？」

（部室の小窓に布がかかっている。

まさか・・・。）

「梓、悪いけど先に部室に入っていてくれるか？

教室に宿題を置いてきちまったのを思い出した。」

「わかりました。」

英樹は踵を返して階段を下りるが、教室へと向かわずに折り返し地点に身を潜める。

梓が扉を開けて数瞬の後、クラッカーを鳴らす音が聞こえた。

「やっぱり、唯達が何か仕掛けていたか。」

英樹がホッと安堵の息を漏らした時、後ろからクラッカーを鳴らされた。

「おわっ！？」

「おめでとうございます、英樹さん。」

「ムギか。」

びっくりした。」

「英樹さんなら気付くと思ったので。」

「お前には敵わないな。
さて、いつまでも梓をほっとくわけにもいかないな。」
そう言っ、階段を上って部屋に入る。

パァーン！

「英樹先輩、梓との婚約、おめでとうございまーす！」

「なんとっ！？」

律の言葉と、未だにクラッカーが残っていた事に驚く。

「フッフッフッ。」

あたし達が、クラッカーを1つしか準備していないと思ったら大間違いですよ。」

「な、何だってーっ！？」

で？ こんなリアクションで満足か？」

英樹は嘆息しながら聞く。

「どうもです。」

「まったく。」

「お兄ちゃん！

あずにゃんと、お幸せに。」

「先輩、浮気しないでくださいよ?」

「コイツら……。」

「……／／／／／」

英樹は呆れており、梓に至っては顔を真っ赤にして、俯いていた。

「はっ!？」

そうすると、私があずにゃんを「お姉ちゃん」と呼ぶの!？」

「とりあえず、ほっとくか。」

「はい、英樹さん。」

梓の一言に、律が敏感に反応する。

「英樹「さん」ねえ。」

「はっ!？」

律がニヤつく。

「おい、あまりからかうなよ。」

漣が律に釘をさす。

「ぶうゝ、いいじゃん。」

それに、漣だって興味津々だったじゃん。」

「そ、それは……。」

「お前ら、もう練習するぞ。」

「あ、お兄ちゃんが照れてる」

「照れてねえよ。」

「微妙に赤いですよ。」

「くっ！」

ムギの指摘に、英樹が返答に詰まる。

「「照れてる、照れてる」」

「くっ、この・・・。」

「それで、梓は英樹先輩と結ばれてどう思った？」

「漣!？」

「あの、何でそんな事を？」

「歌詞作りの参考にな。」

「俺に安息の地は無いのか・・・。」

「ええつとですね。」

（梓も普通に答えちゃってるし・・・。）

「ねえねえ、挙式にはどんなケーキが出るの？」

「いい加減婚約ネタから離れろよ。」

「そうですよ。」

唯の発言に、英樹と梓がツツコム。

「お兄ちゃんはずにゃんをそういう風に見てないの？」

「んー？」

いや、他に結婚してもいいと思ってるやつはいないからな。
できれば梓と結婚を・・・」

そこまで言って、英樹はしまったと思ったが、もう遅い。

「……ほおー。」「……」

その後はしばらくそのネタを何度も出された。

とある冬の寒さが厳しい日。

律が友人のツテを頼って、ライブハウスに行こうと言った。

「大晦日ねえ。」

「10日後じゃねえか。」

「何も準備してませんよ？」

「でも、私出てみたいよ！」

「私も。」

「好きにしろ。」

「曲目、どうする？」

「せっかくだから、英樹さんも歌ってはどうか？」

「ああ、「Butter-Fly」と「カルマ」か。」

英樹は自分が歌った事のある曲の名を口にする。

今年の新入生歓迎会と文化祭で歌っただけだが。

「あれと「ふわふわ」にしとくか。」

律が候補の曲目を書きだす。

「それじゃあ、練習するか。」

——大晦日——

「ここかあ。」

「そうです。」

ライブハウスに到着し、中に入ると、そこにはデスデヴィルのようなメイクをした女性達が。

「ふむ、俺達の方が浮いてるとはな。」

「律ちゃん！ 漣ちゃんも久しぶり〜。」

「マキちゃん！」

「皆、今回ライブハウスに誘ってくれた、
LOVE CRISISのマキちゃんだよ。」

「よろしくお願いします！」
唯が挨拶する。

「漣も人気だなあ。」

「そうですね。」

漣は、LOVE CRISISのベースの子に羨望の眼差しを向けられて、照れていた。

「律ちゃん、あの男の人は？」

「ん？ ああ、英樹先輩だよ。」

「1年の文化祭の時、いたっけ？」

「いや、あたしが2年の時の新歓と、文化祭の時だけ。」

「へえ〜。」

「でも、実力はかなりだよ。今回は歌も披露してくれるし。」

ミーティングを終え、お茶に入る。

「持ってきてたのかよ。」

「皆の緊張を和らげるためです。」

「俺は先にリハーサルの所に行ってるからな。
遅れるなよ?」

「「「「はい」」」」」

「やれやれ、本当に大丈夫か?」

「皆さんもお茶、どうぞ。」

「それじゃあ。」

「やっぱり、曲名は薄だったんだ。」

最初見た時はもしかしたらって思ったけど。」

「わかつちゃうよね。」

「英樹さんと唯ちゃんは兄妹なんだ。」

「うん。優しいお兄ちゃんだよ。」

と、皆でまったりお茶しながら話していると、英樹が戻ってきた。

「お前ら、リハーサル開始時間過ぎてるぞ！」

「「「「「ごめんなさい！」「」「」「」

リハーサル時に、ちょっとしたトラブル（英樹を除く5名）があったが、

他のバンドメンバーに励まされた事で、落ち着きを取り戻した。

「まあ、なんかやらかすとは思っていたが。」

「お兄ちゃんがまったく慌てなかったのが不思議だよー。」

「一応、俺も緊張したけど、お前らほどじゃなかった事。」

「そろそろ本番か。
大丈夫かな。」

「大丈夫だよ、漣。」

「俺もミスしないように気を付けないとな。」

「2曲とも結構久しぶりですしね。」

「新歓の時の英樹さんの歌声、とっても良かったですよ。」

「梓、ノロケは余所でやってくれ。」

「なっ！？ ホントにそう思ったんですよ！」

「そんなに良かったっけ？」

「うん、もちろん。」

「放課後ティータイムさん、そろそろお願いします。」

「よしっ！ 皆、はりきって行くぜー！」

律が部長らしく5人を仕切る。

「「「おおー！」「」「」

「お、おおー。」

「ハイハイ。」

唯とムギ、そして梓は元気よく、対称的に、漣は遠慮がちに。

英樹は面倒に思ったのか、適当に相槌を打つ。

「いやゝ、盛況だったねえ。」

「零のファンクラブが激増したりして。」

「恥ずかしい……。」

「ええゝ、いいじゃん、ファンが増えるの。」

「俺は御免だな。」

ライブが終了し、休息を取る事にした。

「あの、放課後ティータイムの皆さんですよね？」

「そうですけど。」

そこへ、3、4人の女性がやってきた。

「私達、今回のライブを聞いて、皆さんのファンになったんです。特に、「Butter-Fly」を歌っていた、英樹さんに！」

「大変ですなー。もてる男は。」

「黙れ。」

「よかったら、サインいいですか？」

「いや、字、下手だし。」

「構いません。　お願いします。」

「わかりました。」

内心で溜息をつきつつ、顔に出さずに相手の出したものにサインする。

「すごいね！　お兄ちゃん。」

「勘弁してくれ。　俺はあまり・・・。」

「英樹先輩、梓が・・・。」

「なんとなく気付いてる。」

漣の指摘はもつともだ。

梓が英樹をジト目で見ている。

「だから御免だって言ったのに・・・。」

「フン！」

「ハア！。」

梓に拘ねられて余計に疲れた。」

「だったらさっきのファンの人に癒してもらえばどうですか？」
梓が英樹につっけんどんな対応をする。

「険悪になっちまったなあ。」

「ここから見物ね。」

「私達は席を外した方がいいかな？」

「でも、あずにゃんがどう出るか怖いよ。」

4人はヒソヒソ声で話し合う。

一応、この場に残って様子を見る事にした。

「あんな、見ず知らずの奴には癒されねえよ。」

「鼻の下、伸ばしてたくせに。」

「してないよ。」

「ツーン。」

梓はそっぽをむいたままだった。

「とりあえず、これからもうこういう事があると、
ますます梓が大変だから、何か対策を考えよう。」

ひとまず梓への対策を取りやめ、考え込む。

（さて、どうしたものか。

ん？ これなら、或いは・・・。

いや、でもなあ。これには相当時間がかかるだろうし。止め
とこう。）

英樹は自分の考えを棄却し、再び梓のご機嫌直しを行う。

ちなみに、英樹が考え付いた作戦は、「婚約指輪」だった。

恐らく、普段から唯達に「婚約は？」と言われていたせいだろう。

「はいはい！ 私、名案を思い付いたよ！」

「どんな作戦だ？」

「婚約指輪をすればいいんだよ！」

「ゴフツ！」

唯の発言に、英樹は飲み物を危うく吹きだす所だった。

（おかしいな。

形だけの兄妹なのに、こうも考えが似つくっていうのは、いったい。）

「さ、さすがにそれは……。」

「無理だろ。」

梓も律も否定する。

「でも、将来の為になると思わない？」

「「将来……。」」

英樹と梓の声が重なるが、とりあえずそれは棄却、と言う事になった。

「さて、帰ろう・・・ぜ？」

「どうしたんですか、英樹さん？」

いきなり固まる英樹に、梓は問いかける。

「いや、なんでもない。」

皆、悪いけど先に帰っていてくれ。

ちよつと用件が出来た。」

「あ、少しの間なら近くにいます。」

「いいけど、風邪はひくなよ？」

「・・・・・・はい。」

5人を先に行かせて、英樹は1人の客に歩み寄る。

「何でお前がここにいるんだよ、アイズ。」

「いや、清隆に言われてな。」

お前のバンドの力量を見に来ただけだ。」

「それだけならお前だけで足りるだろ。」

なのに何故理緒達がいる！」

英樹が指さした方向には、物陰に隠れきっていないツインテールがあった。

「ん？」

偶然ラザくと出会ったんだよ。」

「あたしと香介は理緒の付き添いだよ。」

「まあ確かに、理緒だけじゃあな。」

「怒るよ!」

「そういえば、ヒデキ。」

「ん、なんだ?」

「あのツインテールの娘と結婚するそうだが?」

「はあっ!?」

「「「な、なんだって!?!?!」」」

「いや、なんでそうなるんだよ。」

「先程会話をしている時、婚約指輪の話が出たから、だ。」

「まだわかんねえよ。」

「そうか。」

アイズは微笑する。

それを見て、英樹は更に追求する。

「なんだよ?」

「いや、お前の表情を見ると、本気に感じてな。」

「そうなの!？」

「理緒、落ち着け。」

小さい身体を大きく動かすが、香介がそれを制する。

「でもなんでそんな風に思っただよ？」

「お前の表情から簡単に察する事ができる。」

アイズのあまりの冷静さに、英樹は毒気を抜かれた。

その後アイズ達と別れ、外にいた梓達と合流する。

「どうしたんですか？」

「なんだか疲れた顔をしていますけど。」

「仲間に会って、それでちよつとな。」

苦笑し、皆と共に歩きだす。

（アイズは本心からそう思っただけなんだよな。

相変わらず無頓着なのかそうじゃないのかわからない奴だ。

理緒達みたいに、俺を弄る訳でもないし。）

新年は唯の家で迎える事になったので、その道すがら、どうすれば

いいか悩む。

（さて、どうしたもんか。）

「英樹さん。」

一人で考えていると、梓の方から話しかけてきた。

「なんだ？」

「すみません。」

勝手なことばかり言つて。」

「お前のせいじゃないよ。」

「でも……。」

「ちゃんと断ればよかったんだよな。」

「英樹さん、相手を無下に出来ない人ですから。」

「そうやって、俺の事を見てくれるだけで、俺は嬉しいよ。」

「私も、何でもかんでも妬くの、注意します。」

「さあ、今年も残り数分となりました。」
テレビのキャスターが各地域の様子を伝えている。

「そんな時に限って、コイツらは寝ちまったのか。」
英樹は唯達を見る。

漣と律も眠いのか、目をこする。

「お前らも寝たら？」

「大丈夫ですよ。」

「まだまだ……。」

「懸命だな。」

だが、さすがに眠気には勝てないのか、2人ともうつらうつらしていた。

（どうせあまり長く持たないだろうけど……。）

「そろそろ明けるな。」

「お兄ちゃん、早起きだね。」

唯が寝ぼけ眼こすりながら起き上がる。

（ずっと起きてたからな。）

「皆、起こして、あそこに行こうよ!」

「ん? ああ、あそこか。」

英樹は唯が言っている場所に、覚えがある。

確か、家から近い穴場と言っていた。

小さい頃、よく唯と憂の3人で家を抜け出し、帰った時両親に怒られた思い出がある。

「皆、起きて!

初日の出見に行こう! 初日の出!」

「ええ、眠いからいいよ。」

「もう。こんな時に寝ててどうするの!」

「お前が言っな。」

「英樹先輩、ずっと起きてたんすか?」

「さすがに少し寝たよ。(嘘)」

「おつ、そろそろだな。」

「わあー。」

「綺麗・・・。」

「でしょ？　ここ、穴場なんだ。」

「それじゃあ、皆。」

あけまして、おめでとございます。」

「」「」「おめでとございます。」「」「」

（卒業までに、いろんな思い出を作らないとなあ。）

「ところであずにゃん。」

それ、いつまで付けてるの？」

「ニヤッ!？」

昨夜、さわちゃんが付けた虎の耳がまだある事に気付き、びっくりする。

「どうして誰も言ってくれなかったんですか!？」

「いや、中々似合ってたからな。」

「すっごくかわいいわよ。」

「あずにゃん、自信を持って。」

「英樹さん！」

どうして言ってくれなかったんですか!」

「悪い。」

まったく違和感なくて気付かなかった。」

「そんな訳ないでしょ!」

「はいはい。梓、痴話喧嘩は後でな。」

「なあーっ!?!」

「落ち着け、梓。」

英樹になだめられ、落ち着きを取り戻す。

「それより、ちゃんと軽音部を頼むぞ。」

「「「「「はい!」」」」」

5人の力強い言葉に、英樹はほほ笑んだ。

番外編 「2人のドタバタとライブハウス」 了

番外編 「2人のドタバタとライブハウス」(後書き)

鮮血

「いや、出だしはそれなりに弄れてよかった!」

英樹

「ざけんなよ!
なんなんだよ! ああ結婚の件は!」

鮮血

「気にしないの。
誰かが弄らなきゃ、私が弄るしかないんだよ!」

英樹

「何、その下らない理由!?
しかも喧嘩っていうか、すれ違いもあったし。」

鮮血

「まあ実は最初は、ご機嫌直しにデートに誘わせようと思ったんだけどね。」

英樹

「あのなあ、ご機嫌直しの為だけにデートするなんて、梓に悪いだろ。」

デートするなら、本当にそれを目的にしないと・・・。」

鮮血

「君ならそう言うと思ったよ。
本当に梓一筋なんだから。」

英樹

「う、うるさい！」

鮮血

「さて、今回は特別編（卒業式）で、本当の終局です。」

英樹

「いよいよ最後か。」

鮮血

「そ。

で、今回は読者様に1つ提案があります。
それは、英樹と梓への質問です。」

英樹

「なんでそんな事？」

鮮血

「なんとなくに決まっておろう！
まあ簡単に言うと、
2人が付き合い始めてからの中で、
聞きたい事を募集します。」

英樹

「オイオイ……。
で、例えばどんなの？」

鮮血

「そうだなあ。」

例えば、英樹に質問。

「梓にされて、一番嬉しかった事は？」とか。
逆に「困った事」とか。」

英樹

「なるほどね。」

誤字脱字、感想、質問、お願いします。」

特別編 「皆との思い出、愛する人との未来」(前書き)

鮮血

「では、特別編です。」

今回は皆様に、持ち物をお願いします。」

英樹

「持ち物って、何？」

鮮血

「それは、目薬でございます。」

梓

「目薬、ですか？」

鮮血

「そう！」

本文で、『――卒業式 当日――』の文字が目に入りましたら、
目薬をさして、続きをご覧ください。」

梓

「あの、なんでそんな事を？」

鮮血

「嘘でもいいから泣くばいのを流してください！」

英樹

「いや、嘘でもいいのなら『涙を流した』と、
感想板で言ってもらえばいいじゃねえか。」

鮮血

「それもそうだね。

では、皆さんも良かったら御一緒に。

『けいおん！Fragment』」

英樹&梓

「特別編、『皆との思い出、愛する人との未来』。」

「始まります！」

特別編 「皆との思い出、愛する人との未来」

けいおん！Fragment

特別編 「皆との思い出、愛する人との未来」

暖かい陽気が日に日に増えてくる3月。

学校は卒業式にあわせて、着々と準備が進んでいた。

そして、その卒業式の日が近づくにつれ、軽音部にも変化が生じてきた。

「あうっ！」

「唯、さっきもそこを間違えなかったか？」

英樹が指を押さえた唯を見る。

「だ、だってえ〜。」

「「だって」、「なんだよ？」」

「な、なんでもない。」

「なんだそりゃ？」

ほら、指を切っちゃったんだろ？ 傷口を見せてみる。」

「うん。」

「遷、お前も音程がちよくちよく変だぞ？」

「えー？ そんな事は。」

「ちゃんとチューニングしてあるのか？」

「えっと。」

「あ、ずれてる。」

「珍しいな。」

「律、いつもより音が弱いぞ。」

「へっ！？ す、すみません……。」「

「スティックを持つ手のマメ、平気なのか？」

「ふえ？ イタッ！？」

「おいおい。」

「あ、あはは……。」「

「ムギ、お茶がこぼれているぞ。」

「ほ、ホントだ!」

「それに、キーボードの音も一部で間違いがあったぞ。」

「ごめんなさい。」

「いつもより、上の空が多くもあったし。」

「ア、アハハ。」

「梓、その間違いが4回目なんだが。」

「そ、そんなに間違えました?」

「ああ。」

「それに、言ってもまったく直さないじゃないか。」

「すみません。」

「それと、さつきから俺をチラチラ見るのは止める。」

「は、はい……。」

練習が一段落ついたので、ティータイムにはいる。

「お前ら、最近変だぞ。」

「そんな事ありませんよ。」

「いや、絶対におかしい。」

いつもならこの時間は雑談してるのに、それも見受けられない。
何か悩み事でもあるのか？」

英樹の指摘に、皆押し黙る。

「まあ、言いたくないのならいいんだけど……。」

「だって……。」

「ん？」

唯がポツリと漏らす。

「だってお兄ちゃん、もうすぐ卒業しちゃうんだよ。
悲しいよー……。」

「そういう事か。
だけど、皆がいつまでもそんなだと、俺も心配で卒業できないよ。」

頼むから、できるだけいつも通りにしてくれ。俺に悩みの種を残すな。」

「「「「はい!」「」「」」」

「いい返事だ。」

「それじゃあ、俺は先に帰るから。
あまり遅くまでいるなよ?」

英樹は早々に切り上げ、部室を出た。

「はぁ……。先輩、もうすぐ卒業か。」

「うん……。」「

「英樹さんは強いね。
私達に弱い所を見せないなんて。」

「やっぱり、悲しいんでしょうね。」

「私達がお兄ちゃんにしてあげられる事って何かないかな?」

唯の提案に、皆真剣に考え込む。

「無難に送別会とか？」

「でも、盛大なのは好きじゃないって言ってたし。」

「となると、やっぱり演奏しかないのかも。」

「そうですね。」

「曲目、何がいいかな？」

「この際全曲でいいんじゃないか？」

「いつにしますか？」

「卒業式が普通だけど・・・。」

「講堂は使えないだろうなあ。」

「って事は、部室？」

「まあ、私達との思い出の場所だし、それがいいかもな。」

「よしっ！ さっそく練習しよう！」

「」「」「おぉー！」「」「」

「ただいま。」

「おかえり。」

帰った英樹を出迎えたのは、義姉の詩織だった。

「義姉さん、仕事は？」

「今日は非番。」

「遊んでくればいいのに。」

「空いてる友達がなくてね。」

「そう。」

「そういえば、もうすぐ卒業式よね？」

「そうだけど・・・。」

「それがどうかした？」

「英樹くん、やっぱり軽音部の皆と距離が広がるのは寂しい？」

「もちろん。」

「でも、こればかりはね。」

「梓ちゃんと2人暮らしでもすれば？」

「はあ!？」

「そうすれば、寂しくないでしょ？」

「そんな資金無いよ。」

「じゃあ、こっちか向こうさんの家に住むか。」

「しないよ、そんな事。」

「家が近いから？」

「そうだよ。」

「実際に傍にいないとわからない事もあるわよ。私も、翔くんとはそんな感じだったから。

傍に居て、やっとわかった事があつて、
だけど離れ離れになるのが嫌で、今こうしてる。」

「。。。。」

「少しは積極的アプローチしたら？」

「別に急がなくても。。。。」

「そんな考えじゃ、いつまでも結婚できないわよ。」

「いや、梓と結婚するわけじゃないから。」

英樹は呆れる。

軽音部の仲間やクラスの友達、ましてや義姉からも言われるとは。

「でも、英樹くんは結婚したいんでしょ？ 梓ちゃんど。

確かにデートとか、食事とかにも招くし、

電話もよくしてるからいいけど。

結婚は別よ。 したいのなら、それは今まで以上に真剣に考えなきゃ。

近いうちに誘っておかないと、泣き崩れちゃうんじゃない？」

「考えとくよ。」

詩織はまだ何か言っていたが、耳を傾けずに自室に籠る。

（何でもこうも変わらずにはいられないんだろう・・・。）

床に背を向け、仰向けになって寝転がる。

（そんな事より、軽音部の事が気がかりだな。

気丈に振る舞ったとはいえ、心配なわけがない。）

ボーッと考えているうちに、眠気が支配してくる。

（唯、漣、律、紬、梓・・・。）

俺は、皆に何か残せないのか？）

懸命に考えるも、日頃の全員への心配で睡眠不足だったため、突然の睡魔に、英樹は飲み込まれていった。

次の日、部室に向かうと、扉に張り紙がしてあった。

「なんだこりゃ？」

そこには、『英樹先輩、入るべからず。』とだけ書いてあった。

「いきなりなんなんだ？」

しばらく扉の前に立つが、音が聞こえてくる事もなかった。

「真面目に練習してるわけじゃないのかよ。」

嘆息し、取っ手に手をかけるがすぐに引つ込めた。

「止めた止めた。」

今は皆に従うべきだな。

久しぶりに、憂がまだ校内にいたら一緒に帰るか。」

部室から離れて階段を下りるが、折り返し地点でしばらく様子を窺う。

変化があるかもしれないと思ったからだ。

しかし、彼の期待も虚しく、変化が生じる事は無かった。

「寂しい……。」

そう言ってみたものの、当然それに返事があるわけもなく、余計に寂しさが増したただだった。

昇降口を出ると憂が見えたが、友人と一緒にいたので声をかける事はしなかった。

「最近1人が多いなあ。」

訳も無く空を見上げる。

「寂しいのか？」

「あ？」

振り返ると、悠斗がいた。

「別に。」

「嘘つけ。」

「明日って、なんか面倒な時間割だったような。」

これ以上悠斗に詮索されるのは御免だったので、話題を逸らす。

「逸らした。やっぱり寂しいのか。」

「ほっとけ！」

「明日はずっと、卒業式の予定だよ。」

「うわぁ・・・。」

「サボる？」

「無理だろ。」

「わかってんだったら、あからさまに嫌な顔するなよ。」

「ふむ、妹の影響かな。」

「いや、お前の性分だろ。」

「同感。」

「明日が予行って事は、本番はいつ？」

「3日後。」

「ふーん。」

「それがどうかした？」

「いや、多分なんでもない。」

「なんだそりゃ？」

（毅琉の所にも行くか。）

英樹は自宅に戻ると、すぐさま着替えてバイクで毅琉の元へと向かった。

清隆に通された部屋で、親友と再会する。

「久しぶりだな、毅琉。」

「久しぶりって・・・。1週間前にも来なかったっけ？」

「ああ、そういえばそうだった。
なあ、やっぱり卒業式には参加できないのか？」

「そりゃそうだろう。
でも、お前が俺の分も抱えてくれるんだろ？」

「もちろんだ、約束する。」

「それだけで俺は充分だよ。
どんなに暗いトンネルの中でも、お前とラザフォード達がいるから。」

「そういえば、英樹。
ラザフォードから聞いたんだけど、軽音部の子と付き合っているんだって？」

「あいつ、なんでそんな事まで喋っているんだよ……。
っておい、清隆！ どこに電話をしている！」

「フツ。」

「そんなの歩やまどかや理緒達に決まっているだろう。」

「電話をすぐ切れ！」

「H A H A H A。」

「切っても既に1人に電話してしまったぞ。
軽音部の子と拳式を上げるとな！」

「嘘八百じゃねえか！ この千三野郎が！」

「まあいいじゃないか。
どうせその内わかる事なんだから。」

「毅琉……。」

「お前がここで言わなきゃこんな事にはならなかったんだよ！」

「ああ、そうだったね。
いや、ごめんごめん。」

「それにしても、軽音部の皆とは距離が広がっちゃうんだよね。」

「ああ。」

「だけど、俺は皆に何も残せないと思うと、辛くて……。」

「言いながら、英樹は締め付けられる胸を右手で押さえる。」

「俺はそんな事無いと思うけど。」

「どういう事だ？」

「その内わかるよ。」

「あ、そう。」

英樹は納得はいかなかったが、毅琉を信じる。

（以前お前が話してくれただろ？

「軽音部の皆は強い子だ。」って。

なら、その言葉を自分でも信じて、皆を信頼してみなよ。

そうすれば、軽音部の皆が、それに対する答えが出してくれるはずだよ。）

毅琉はそう考えるが、口には出さない。

軽音部の事はまったく知らないが、英樹をここまで強くしてくれた部活だ。

それは、この答えを証明するのに充分だから。

「あと、3日か。」

「だいぶいい感じになってきたな。」

漣が日程を確認し、律が練習の成果を顧みる。

5人は今、さわちゃんの好意で別の場所で懸命に練習していた。

すべては、3日後に卒業する英樹の為に。

「でも、もっと頑張らないと!」

「唯、意気込むのはいいけど、声を嗄らすなよ。」

「わかってます、律ちゃん隊員!」

「扉の張り紙に怒ってないでしょうか。」

「あんなので怒る訳ないだろ。」

「それは梓ちゃんが一番知ってるじゃない。」

「うっ!」

「れ、練習を再開しましょう!」

「そうだな。梓をからかうのはまだ出来るし。」

（お兄ちゃん、喜んでくれるかな?）

唯は空を見上げ、流れる雲を見つめた。

「予行、キツかったー。」

「英樹、ばてるの早いよ。」

「そうよ。」

凍夜ならともかく、何であんたが先にばてるのよ。」

「怜奈、それはどういう意味だ!」

「そのままの意味。」

「ヒドッ!」

「いいんじゃない? 事実だし。」

「英樹までも突っ伏しながらも、俺を批判するのか……。」

「批判はしていない。」

「事実だ、と言ったまでだ。」

「最悪だな!？」

「皆、そこまで言わなくても……。」

「ありがとう、深鈴。」

「助けてくれるのは君だけだ。」

「あまりに本当の事ばかり言つのもどうかと思つよ。」

「君もザックリくるね!？」

「え？
何が？」

「自覚ないのかよ。」

「俺に安息の地は……。」

凍夜がうなだれる。

それを見て、深鈴が慌ててサポートにはいる。

「だ、大丈夫だよ、凍夜。」

安息の地は、きっと見つかるわ!」

「ここにはないって事かああー!!!」

「あ、あれ？」

「うるさいから静かにしてくれ。」

英樹はどうでもいいと言わんばかりに、凍夜を冷めた目で見ろ。

「ん、悪かった。」

凍夜はあつさりと静かになる。

「さっきまでのテンションが嘘だっていうのが、未だに信じられないわ。」

「気にするな、怜奈。
俺も信じられないから。」

「これが普通なんだよ。いい加減信じろ。」

（俺が軽音部に残せる事、何か無いかなあ。）

まだ決まっていけない事を必死に思考するが、まったく思い付かない。

（どうしよう・・・。）

頼りねえなあ、俺。）

――卒業式 当日――

ついにやってきた卒業式の朝。

英樹は携帯電話を確認するが、それに変化はまったく無かった。

「まさか返事がないとはな。」

嘆息しつつ、着替え始める。

昨日の夜、梓にデートをしないかとメールで持ちかけたのだが、彼女からの返事は無かった。

「メールがまずかったのかな。」

やっぱりこういう事は、直接言わなきゃダメか。」

しかし、昨日も部室に向かったのだが張り紙があり、誰にも会う事がなかったのだ。

直接伝えるのは難しいだろう。

「電話にも出てくれなかったし。
いよいよ、ヤバくなってきたか？」

（できればそれは絶対に御免だ。
納得のいく理由があれば別れるけど、勝手にというのは我慢なら
ないな。

ま、アイツに限ってそれは9割がた無いかな。）

「英樹、朝食が出来たぞ。」

翔影の声に我にかえり、1階におりた。

クラスに到着し、適当に挨拶をする。

ここへ来る途中にも、軽音部の誰にも会わなかった。

しかも、憂や和にも。

「疲れた……。」

「まだ始まってないから。」

「卒業式なんて、何であるんだろうな？
別に式なんてしなくていいじゃん。」

「校長の話、かつたるいもんなあ。」

悠斗が苦笑する。

「でも、高校生活がこれで最後か。」

「感慨深いか？」

「いや、まったく。」

「心残りは？」

「大量にあるぜ。」

軽音部の事だけでも、数えきれないぐらいな。」

それを聞いて、いつも通りの英樹なんだと知り、悠斗は少し安心した。

「短すぎるよな。
何もかも。」

「ああ。遣る瀬無い短さだよ。」

「さて、行くか。」

「しょうがねえなあ。」

「ようやく終わったー。」

「意外とあっさりだったな。」

「深鈴う、寂しいよ。」

「私もだよ、怜奈。」

「こんなん泣くもんなのかねえ？」

「お前は冷酷だな・・・。」

「悠斗も泣いてんのかよ!？」

「悲しいじゃん？」

「随分と泣いてないからな。」

「そうなのか。」

（いつからだろう。）

こんな風に、泣かなくなったのは・・・。

（

青く澄んだ空を見上げるが、その答えを見出す事も、涙を流す事も無かった。

「お兄ちゃん！」

「唯？」

大声で呼んだ妹が、いきなり手を引っ張る。

「な、なんだよ？」

「いいから来て！ これからが『本当の卒業式』なんだから！」

「お、おい！引っ張るな！」

有無を言わず、唯はグイグイと英樹を引っ張り、部室へと向かう。

（そういえば、高校で唯と再会して軽音部に連れて行かれた時もこうだったな。）

自分を引っ張って行く妹の背を見ながら、思い出す。

もしもあの時、唯と再会していなかったら。そう思うと、とても切なくなる。

自分は彼女達にいったい、何を残せたのだろうか？

いや、何も残せていないのだろう。

何もできない自分が急に小さく思えた。

「着いたよ、お兄ちゃん。」

「あ、ああ……。」

いつも何気なく開いていた扉が、今の自分には開けないのではない
かと思った。

「……。」

「どうしたの？」

中々開かないので、唯が心配する。

「ああ、いや……。」

「大丈夫だよ。」

英樹の考えを見透かしたかのように、唯が笑いかける。

「唯……。」

「だって、お兄ちゃんだもん。」

その理由らしくない言葉でも、何故か彼女が、
否、『彼女達』が言つと本当に大丈夫だと確信してしまう。

「そうだな。」

よう、唯に引っ張られたから来たぞ。」

「お疲れ様です。」

「待ってましたよ。」

「さ、どうぞ座ってください。」

「こっちですよ。」

「で？ 何をするんだ？」

英樹が指示された箇所座る。

「もちろん、英樹先輩の卒業祝いですよ！」

「盛大にするからね。」

「それでは最初は、『カレーのちライス』です。」

「聞いてください。」

全員が全力の、自分の音楽を懸命に紡ぐ。

それを聞いている間ずっと、英樹は今までの事を思い出す。

1年生の時は、トラウマの事から部活に所属せずに、ただいたずらに時間を消費していた。

それが2年生になった時、大きく変貌する。

唯との再会だ。

妹として接してきた唯が、小さい頃と何1つ変わらない性格で、再び自分の事を『兄』と呼んでくれた時は、とても嬉しかった。

唯とはトラウマの1件以来会わなくなったので、懐かしい気持ちでいっぱいだった。

そして、軽音部への入部。

律の強引さに呆れ、澪の恐怖症を落ち着かせる日々。

唯に音楽用語を教え、ムギのお茶に安堵する毎日が始まる。

1年生の文化祭の時は参加できなかったが、後で録画を見せてもらい、安堵した。

その後3年生になり、恋人となる梓と奇妙な出会い方をする。

新入部員が入ったにも関わらず、お茶をする毎日。

だが、それでも暖かい部室。

忘れる事の無い温もりを生み出すこの空間がずっと好きだった。

「最後！ 『ふわふわ時間^{タイム}』！」

忘れるはずが無い。

俺は絶対に、この思い出を忘れない。

静かに彼女達に優しい眼差しを向ける。

皆がいたからこそ、俺は・・・。

俺は、俺で居られたんだ。

皆、俺を誘って、導いてくれてありがとう。

本当に、ありがとう。

「どうだった？ お兄ちゃん！」

「ああ。　　すぐよかったよ。」

唯の満足そうな顔を見て、英樹は笑顔で答えるが、それにヒビが入る。

それは、皆も同じだった。

「クッ．．．。」

「ウウ．．．。」

「まあ、なんだ。

こういうのは、泣いた者勝ちだ。

俺も耐えられそうにないしな．．．。」

英樹が嗚咽をもらす。

その後、皆が英樹に寄り添い、彼女達も泣いた。

「ああ、ようやく落ち着いた．．．。」

「落ち着くのが英樹先輩が一番最後なんて珍しいですね。」

「長い事泣いてなかったからな。

あんなに泣いたのは本当に久しぶりだ。

ありがとう、皆。」

英樹は1人1人、ゆつくりと見回す。

「けど、俺は皆に何も残せないな。」

「だいじょーぶ!」

「英樹先輩がいたからこそ、私達はここまでこれたんですよ。」

「むしろ英樹先輩の方が、あたし達よりも大きい物を残してくれたんです。」

「よかった。」

そう言ってもらえて嬉しいよ。
最高の卒業式だ。」

「それじゃあ、帰りましょうか。」

「そうだな。」

律達が身支度を開始する。

「梓。」

「はい、なんですか?」

「この後、空いてるか？」

「あ。 はい、大丈夫ですよ。」

梓は、英樹が何を言おうとしているのかわかった。

「俺と、デートに行かないか？」

「もちろんです。 英樹さん。」

英樹が差し出した右手を、梓は優しくとった。

「またここに来ちまったな。」

「でも、私はここが好きですよ。」

2人が来たのは、互いに告白をした高台だった。

梓は愛らしい仕草で、風になびく髪を押さえながら笑っていた。

それを見て、英樹も自然と笑みがこぼれた。

「俺の高校生活は終焉を迎えた。

だけど、皆との時間は決して終わらせない。

会う時間はかなり減るかもしれないけど、それでも。」

「はい。」

待ってますよ。いつまでも。」

「それは、部活の後輩としてか？」

それとも、恋人としてか？」

「両方ともです。」

「そっか。」

思えば、本当にいろいろあったなあ。」

「最初の出会いはちょっと。」

「ハハハ。そうだな。」

「でも、それがあったから、私達は……。」

「んー、どうだろう？」

俺は無くても梓の事を好きになったよ。
なんせ一目惚れだったから。」

「そ、そうなんですか!？」

「ああ。でも、告白するのに結構長い時間を要したなあ。」

「私も長い時間を費やしました。」

梓がこちらを振り向く。

「費やして、後悔は無いか？」

「もちろんですよ。」

英樹の質問に、梓は即答した。

「良かった。」

「当たり前じゃないですか。 私は……。」

頬を赤らめて俯くが、すぐに顔をあげる。

「私は英樹さんしか、愛してないんですから。」

「ありがたい。」

俺も、梓しか愛してないから。
あと1つだけ叶えばいいんだが、欲張りはいけないよな。」

「なんですか？ その叶えたい願いつて。」

「この後グクシャクするのは嫌だから言わないでおく。」

「言わないなら、この写真、澪先輩に送りますよ。」

梓が、怜奈からもらった女装した英樹の写真を見せる。

「しまった……。それを持ってたんだっけか。
言っから閉まってくれ。」

「それで、なんですか？ 叶えたい願いつて。」

「まあ、その・・・。」

梓と結婚したいって願いだよ。」

「え・・・。」

2人の間に、永く感じられるほどの沈黙がおりる。

だが、それを打ち破ったのは梓だった。

「父と母が許可したら、いいですよ・・・。」

「本当か・・・？」

「はい。」

だって、私も英樹さんと結婚したいですから。」

「まあ、俺の方が就職決まって、養えるようにならないとな。

中途半端で結婚しても、苦労するだけだから。

それまで、そしてそれ以降も、一緒に未来を歩いてくれるか？」

「喜んで。 英樹さん。」

あの時と同じように、2人は口づけをかわす。

式を挙げる訳でないにしろ、2人とも同じ気持ちをその口づけにこめた。

いつまでも一緒に、愛する人と未来を歩けますように――

その願いが叶うのに数年を要したが、

2人はいつまでも、愛する人と共に未来へと歩んだ――

特別編 「皆との思い出、愛する人との未来」 了

けいおん！ F r a g m e n t T H E E N D

特別編 「皆との思い出、愛する人との未来」(後書き)

鮮血

「それでは、結ばれた2人、英樹と梓への質問タイムです。」

英樹

「そんなに質問集まったのか？」

鮮血

「そこは気にしないの。」

梓

「大丈夫なんでしょうか？」

英樹

「もう知らん。」

鮮血

「それじゃあ最初の質問、よろしくお願いします。」

伝説・改先生

「梓と付き合い始めて一番最初に可愛いと思ったのはどんなところですか？」

英樹

「質問者本人を呼んだのかよ!？」

まあそれはおいといて、そうだなあ・・・。

付き合い始めてから、だよな。

えっと、俺に料理を作ろうとして失敗しちゃったところかな。」

梓

「あ、あれは・・・。」

英樹さんが、エプロン姿が似合っつていきなり言うから・・・／
／／／／／／／／

英樹

「本当の事を言っただけなんだがな・・・。」

鮮血

「ああハイハイ、じゃあ次。」

軌融屡先生

「梓とやるんだったら、攻めと受けのどっちですか？」

英樹

「軌融屡先生！？　グフツ！？」

鮮血

「さて、英樹が吐血しているので梓に答えてもらいます。」

梓

「私がですか！？」

英樹

「いや、答える必要無いだろ！」

鮮血

「復活しおった！？

別にいいじゃないの。　大した問題じゃないし。」

英樹

「もうヤダ・・・orz」

梓

「えっと、その・・・。」

大抵は五分五分ですけど、最近は私が攻めの場合が多い・・・です。」

英樹

「話しちゃったよ・・・orz」

鮮血

「梓も随分と大人になったねえ（笑）」

英樹

「お前が書いているんだろうが！」

鮮血

「ちなみに、2人の子供が女の子だった場合の名前は「咲」だよ。英樹と梓の最後の1文字を取って付ける予定。」

英樹

「あつそ。」

けど、男の子だったらどうすんだ？」

鮮血

「んなの考えている訳ないじゃないか！」

梓

「誇つて言う事でしょうか？」

鮮血

「黙らっしゃい！ さて次です。」

GST先生

「言われて一番嬉しかった言葉は？」

英樹

「一番嬉しかった言葉か。」

俺は「英樹さんを信じてます」だな。」

梓

「私は、「一緒に未来へ歩いて行こう」ですね。」

鮮血

「なるほろ。」

そんじゃあ次。」

僚介先生

「子供は何人欲しいですか？」

梓

「子供は・・・。」

英樹さんが吐血し過ぎるとまずいですが、欲を言わせてもらつと2人です。」

英樹

「御期待にそえるよう頑張ります?。」

梓

「無理は禁物ですよ。」

鮮血

「それで、英樹はどうなんだ？」

英樹

「俺は今のところは1人かな。

いかんせん、科捜研に勤めている訳だから、帰りが遅くなる事が多いだろうし。

そうなると、2人も子供がいると、梓が苦勞するんじゃないかと思う。」

梓

「英樹さん……。」

鮮血

「梓の事をちゃんと考えていてよろしい。そんじゃあ次。」

I、K先生

「相手の好きなところは？」

ちなみに「全部」は無しです。」

英樹&梓

「全部は無しか。」

鮮血

「2人して言うつもりだったんかい！」

英樹

「しょうがないだろ。」

相手の好きなところなんて、全部以外にどこがあるというのだ？」

梓

「まあ、強いて挙げるとしたら、皆の事を心配するところですね。」

英樹

「俺はどんな事にでも一生懸命になるところだな。」

鮮血

「なんか答えが面白くなってきたな。」

「そんじゃあ次。」

黒桜先生

「2人の一番のデートコースはどこですか？」

「また、その時の雰囲気はどうでしたか？」

英樹

「デートコースと言うか、終着点はいつもあの丘だよな。」

「やっぱりあそこが一番だな。」

梓

「告白した思い出の場所ですからね。」

英樹

「雰囲気は・・・。」

「なんて言ったらいいんだろ？ 普通、かな。」

梓

「でも、2人きりの時に英樹さんの事をかっこいいと言っても、
いっつも照れてますよね？」

英樹

「しょうがないだろ。」

好きな人に言われるとそうなるんだよ・・・／／／／／／／／／／／／／／／／

鮮血

「さて、質問はこれで全部です。」

質問を下さった神作者様、ここまで読んで下さった読者様。
本当に、ありがとうございます！

これからも執筆活動は続きますので、

良かったら応援の方、よろしく願います。

それではこれで。 本当に、ありがとうございます。」

けいおん！ F r a g m e n t 作者 鮮血の刻印

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6502/>

けいおん！ Fragment

2011年7月30日18時49分発行